

ONLINE ISSN 2188-5451

薫物書の研究

薫

第 二 号

平成 27 年 (2015) 4 月

薫 物 書 研 究 会 編

薫物書研究会会則

- 一、本会は、薫物書研究会（たきもののしよけんきゅうかい）と称する。
 - 一、本会は、現行の図書分類法で香書に分類される和書のうち、薫物の処方と調合法を主題とした薫物書（たきもののしよ）の研究を行うことを目的とする。
 - 一、本会は、右の目的を達するために、左の事業を行う。
 - 1 会誌「薫物書の研究」の発行
 - 2 その他必要と認められる行事
 - 一、本会の会員は、日本の薫物書に関する学術研究を行う者で、本会の趣旨に賛同するものとする。
 - 一、本会の会員のうち、日本の薫物書を主題とした研究業績（投稿時に所属した研究機関以外で発行された査読付き学術研究誌に掲載された学術論文、または博士学位論文）を持つ者は、本会の会誌に研究を発表することができる。
 - 一、本会には、役員として代表一名と監事一名を置く。
 - 一、代表は会の事務局を兼ねるほか、会誌の発行（年一回）等の事業ならびに総会（年一回）の開催を行い、監事は会計を監査する。
 - 一、役員の選出は選挙による。選挙は会員の互選とし、総会において行う。
 - 一、役員の任期は二年とする。ただし、再任を妨げない。
 - 一、本会に入会を希望する者は、住所・氏名・職業・業績一覧を記載して本会事務局へ申し込まなければならない。
- ### 付 則
- 一、会費は原則として無料とする。ただし、本会からの連絡に費用の発生する会員に対しては、実費の負担を求める場合がある。
 - 一、本会の会計年度は毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終わる。
 - 一、本会則は、平成二六年四月一日から施行する。

薫物書の研究 第二号（平成 27 年）

目 次

京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薫物秘蔵抄」翻刻
附・「薫物秘蔵抄」人名家名等解説

田中圭子 1-97 頁

.....

A Study of Books on *Takimono* Vol.2 (2015)

Content

Reprinted Texts of *Takimono-hizo-sho* Stored in 'Kikutei bunko' in Kyoto University Library
Containing Explanatory Notes of People, Family, etc. Written on *Takimono-hizo-sho*

Keiko TANAKA pp.1-97

京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薫物秘蔵抄」翻刻

附・「薫物秘蔵抄」人名家名等解説

田 中 圭 子

解題

序

京都大学附属図書館菊亭文庫は、大正一二年以前に今出川家に伝来した図書九一〇部一三六九冊、文書八二二部から成る。また、特殊文庫に位置するこれらの他に、昭和二七年に購入された菊亭家旧蔵資料一二点九八八冊も収蔵され、普通書として配架される。同家は琵琶の演奏を家職としたことから、文庫には貴重な楽書が多数伝来しており、朝議典札に関する貴重な文献も豊富に伝わることはよく知られる（注一）。しかしながら、専修大学図書館菊亭文庫に収蔵された図書や文書も含めて、薫物に関する文献が二〇点以上も菊亭家に伝来したこと（注二）については、あまり注目されて来なかった。

薫物の伝書や調合の記録と見られる文献の内、南北朝期の三条家当主による類纂と伝わる『薫物故事』^{（注三）}を除く資料には、跋文等の識語の中に、天正年間から元禄年間迄の次の日付を確認することができる。

【一覧1】京都大学附属図書館菊亭文庫（京大菊亭）及び専修大学図書館菊亭文庫（専大菊亭）の薫物関係資料の書写者識語に見える日付及び資料名

- | | | |
|--------------------|------------|--------|
| ・ 天正一八（一五九〇）年 | 「薫物方」 | （京大菊亭） |
| ・ 寛文六（一六六六）年 | 「薫物合様」 | （京大菊亭） |
| ・ 寛文八（一六六八）年 | 「薫物秘蔵抄」 | （京大菊亭） |
| ・ 寛文一〇（一六七〇）年 | 「寛文十年合香之事」 | （専大菊亭） |
| ・ 延宝八（一六八〇）年 | | |
| 「延宝八年二月卅日三月三日四日調合」 | | （専大菊亭） |
| ・ 天和二（一六八二）年 | | |
| 「天和二年十月調合之寛江戸」 | | （専大菊亭） |

・貞享二（一六八五）年 「貞享二年三月十三日江戸薫物調
合之覚／同年惣上々ノ薫物之覚」（専大菊亭）

・元禄一三（一七〇〇）年 「元禄十三五六（匂袋）／元禄十
三五十一（匂袋）」（専大菊亭）

右の資料の各日付を含む年代には、今出川季持（天正三
（一五七五）―文禄五（一五九六））及び今出川公規（寛永
一五（一六三八）―元禄一〇（一六九七））、並びに公規子
息伊季（万治三（一六六〇）―宝永六（一七〇九））が当主
に就いている。以上の三名の内、公規と伊季については、
既存の目録類に薫物に関する動静が報告される。

京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵の薫物書「薫物合様」
一卷（菊巻¹⁰⁹）の巻末には「寛文六曆十月廿三日権大納言
公規」との識語が伝わり、同書に対して作成されたカード
目録には「今出川公規著」、「自筆」と記載される。また、
同じ文庫の「薫物秘蔵抄」（菊巻¹¹⁰）には書写者による跋
文等が伝わらないが、書中には、一部の薫物方の依拠資料
について「後徳大寺左府書」こと平安後期の後徳大寺左大
臣実定（長承元（一一三九）―建久二（一一九二））の書を
寛文八年に書き写した由が伝わる（翻刻54頁）。後述する
が、今出川公規は徳大寺右大臣公信（一六〇六）―貞享元
（一六八四）―二男であり実定の後裔にあたる。

富山市立図書館翁久允文庫所蔵の薫物書「香道薫香今昔
集」（請求記号⁷⁹²・キ）には、巻頭に「菊亭内府公作」と
ある（注四）。本書は「後伏見院宸翰薫物方」の書目で伝わる
薫物書の同類文に室町時代の新作薫物（注五）の処方とその

調査の説とを合写したものと見られる。書目の「今昔集」
とはこうした内容を反映した文言であろう。前半部に位置
する「後伏見院宸翰薫物方」は、「知恩院宮尊光法親王御本」
を拝借して延宝五（一六七七）年一〇月中旬に書写し終え
たとされる。後半部には「有明」や「兵部卿」を始めとし
た新作薫物方が類纂されており、巻末には文化三（一八〇
六）年二月及び天保一三（一八四二）年一月付け書写者
識語、並びに不明の花押一点が記載される。伝承の内容が
正しければ、「菊亭内府」は宝永五（一七〇八）年に内大臣
に任じてこれを極官とした今出川伊季に比定する。

以上の識語や報告からは、近世前期の今出川家において
薫物の伝書の蒐集や編著、それらに基づく合香活動の行わ
れた可能性を伺うことができる。本稿では、今出川公規自
筆とされる薫物書「薫物秘蔵抄」を翻刻するとともに、そ
の内容と書誌について、公規の日記として菊亭家と徳大寺
家に伝来した「公規卿記」や、京都大学附属図書館菊亭文
庫所蔵「薫物合様」一卷（菊巻¹⁰⁹）を始めとする他書の記
述と比較しながら検討することにより、公規の代の今出川
家における合香活動の実態と、菊亭文庫に伝来する資料と
の関わりについて考察する。

一 書誌

一―（二） 装訂、書目、筆者

「薫物秘蔵抄」は継紙を貼り継いだ本紙に軸も表紙も

付けない簡素な装訂による卷子本一巻から成る。表紙に当
たる巻首の裏面には外題「薫物方上」と、巻頭には巻首題
「薫物秘蔵抄上」とあり、続いて薫物の銘を列挙した「薫
物方目録」が記載される。

薫物方上

（蔵書票一枚）

「（外題・直書）

薫物秘蔵抄上

（「菊亭家蔵書」印一顆）

「（巻首題）

薫物方目録

梅花 十色

白梅 一色

黒方 廿九色

荷葉 五色

侍従 十三色

菊花 十一色

落葉 四色

盧橘 四色
はなたちはな

新枕 二色

千種 三色

仙人 二色

玉椿 二色

蘭 二色

若草 一色

長月 一色

有明 一色

野風 一色

坎方 一色

薰衣香 一色

承和百歩香 一色

富士 十色

紅梅 一色
（紙継目）
~~伽羅合薫物~~ 一色

干方 四色

玉簾

時雨

（翻刻44頁）

目録に記載された薫物の銘は二六種類を数え、内容は、「梅花」「黒方」を始めとした平安時代以来の伝統的な九種類の薫物と、「白梅」「盧橘」「新枕」といった新作薫物一七種類から成る。新作の内、目録の末尾に記載された「富士」、「伽羅合薫物（きやらのあはせたきもの）」、「干方」の三種は墨滅され、新たに「紅梅」、「玉簾」、「時雨」の新作三種類が加筆される。

一方で、本文の現状には、伝統的な薫物一〇種類と新作薫物二一種類、併せて三十一種類の銘が記載されており、目録において墨滅された三種類の新作薫物を除く二八種類の薫物の処方（表1）及び説が伝来する。以上の記述は巻の

通番	銘の記載場所	写本の現状		薫物方目録
		薫物銘(異銘等)	方番号／有無	掲出順／有無等(※)
1	目録,本紙	梅花	方1-10	1
2	目録,本紙	白梅	方11	2
3	目録,本紙	黒方	方12-42	3
4	目録,本紙	荷葉	方43-47	4
5	目録,本紙	侍従	方48-61	5
6	目録,本紙	菊花	方62-72	6
7	目録,本紙	落葉	方73-76	7
8	目録,本紙	盧橘(はなたちはな)	方77-80	8
9	目録,本紙	新枕	方81-82	9
10	目録,本紙	千種	方83-85	10
11	目録,本紙	仙人	方86,87	11
12	目録,本紙	玉椿	方88,89	12
13	目録,本紙	蘭	方90,91	13
14	目録,本紙	若草	方92	14
15	目録,本紙	長月	方93	15
16	目録,本紙	有明	方94	16
17	目録,本紙	野風	方95	17
18	目録,本紙	坎方(黒方)	方96	18
19	目録,本紙	薫衣香	方97	19
20	目録,本紙	承和百歩香	方98	20
21	目録,本紙	紅梅	方99	22-02(加筆)
22	目録,本紙	黒方	方100	3
23	目録,本紙	侍従	方101,102	5
24	目録,本紙	落葉	方103	7
25	目録,本紙	梅花	方104	1
26	目録,本紙	荷葉	方105	4
27	目録,本紙	菊花	方106	6
28	目録,本紙	黒方(烏方)	方107-113	3
29	目録,本紙	梅花	方114-117	1
30	目録,本紙	仙人	方118,119	11
31	目録,本紙	菊花	方120	6
32	目録,本紙	黄菊花	方121	6
33	目録,本紙	侍従	方122-125	5
34	目録,本紙	落葉	方126,127	7
35	本紙	花蓮	方128	(記載ナシ)
36	目録,本紙	荷葉	方129	4
37	本紙	蓮葉	方130	(記載ナシ)
38	目録,本紙	玉椿	方131	12
39	目録,本紙	若草	方132	14
40	目録,本紙	盧橘(花たち花)	方133	8
41	目録,本紙	新枕	方134	9
42	目録,本紙	野風	方135	17
43	目録,本紙	蘭	方136	13
44	目録,本紙	千種	方137	10
45	本紙	菖蒲	方138	(記載ナシ)
46	本紙	二葉	方139	(記載ナシ)

【表1】「薫物方目録」における銘の掲出順及び書本の現状における掲出順の対照

47	目録,本紙	紅梅	方140	22-02(加筆)
48	目録,本紙	玉簾	方141	24(加筆)
49	目録,本紙	時雨	方142	25(加筆)
50	目録,本紙	梅花	方143,144	1
51	目録,紙背	薰衣草	方145,146	19
52	紙背	八重一重	方147	(記載ナシ)
53	目録,紙背	梅花	方148-150	1
54	紙背	供養香	方151	(記載ナシ)
55	目録,紙背	玉簾	方152	24(加筆)
56	紙背	双葉(二葉)	方153	(記載ナシ)
57	目録	富士	(方ナシ)	21(墨滅)
58	目録	伽羅合薫物	(方ナシ)	22-01(墨滅)
59	目録	干方	(方ナシ)	23(墨滅)

※ 「薫物方目録」の列において、掲出順を表す2ケタ以内の算用数字以外の記述は次の通り行った。

- ・(記載ナシ): 目録中に記載されないが本紙や紙背に記載のあるもの
- ・(加筆): 目録中に記載されるが、当初からではなく、行中等の余白に加筆したと見られるもの。
- ・(墨滅): 目録中に記載されるが墨滅されているもの
- ・「22-01」: 目録中に記載されるが墨滅され、新たに加筆された別の銘に代えられているもの。
- ・「22-02」: 22-01に代えて加筆されたと見られるもの。

本紙から紙背にかけて行われており、本紙には薫物の処方一四四点及びその調合法を記した説四五点が、紙背には墨滅した処方九点及び説六点が載録される。

目録を含む本文の記述内容や現状には、本書の構想と成立の問題を考える上で重視すべき点が幾つか見られる。詳しい内容は次章において考察することとし、以下の本章では、書目や装訂、書写者によると見られる識語等から、本書の書誌について考えてみたい。

書目と伝承筆者

これまでに所在の明らかにされている菊亭家旧蔵書には、「薫物秘蔵抄」又は「薫物方」と同じ題目による続きの巻らしき写本は伝来しない。ただし、京都大学附属図書館菊亭文庫に収蔵される「薫物合様」一卷(菊巻¹⁰⁹、注二)は、「薫物秘蔵抄」と紙幅が同じであり、筆跡にも類似性が認められる。内容は、「薫物秘蔵抄」が処方を主体とした類纂であるのに対して、「薫物合様」は薫物調合の手順に添って調合の諸説や香具の特徴に関する諸説を類纂したものとなっている。本解題の序文でも述べたが、「薫物合様」には巻末に識語が伝わり、「寛文六曆十月廿三日権大納言公規」と記される。「権大納言公規」は寛文六(一六六六)年に権大納言正三位に叙された今出川公規(寛永一五(一六三八)―元禄一〇(一六九七))に比定する。なお、「薫物秘蔵抄」と「薫物合様」の整理番号は前後しており、前者が「菊巻¹¹⁰」、後者が「菊巻¹⁰⁹」として並ぶ。以上の特徴や現状から推し

て、両書は関係の近いものとして伝来し、或いはそうした了解の下に同図書館に収蔵された可能性がある。

「薫物秘蔵抄」に載録される処方等の冒頭部分には、それぞれの依拠資料の由緒や装訂の特徴らしき語句が標目として行われており、多くは朱筆で記入される。それらの内、依拠資料の元の所有者ないし考案者に由来する略称には、「三条右府家秘本」や「三条家秘本」という、合香家として著名な公家の三条家の秘本として伝来したと見られるものの他に、「大本勅筆」、「勅筆巻物」として、天皇の宸翰と伝わるものも含まれている。後述するが、これらの「勅筆」は、後水尾法皇と後西院が自ら書写して公規に与えた薫物方の宸筆一冊及び宸翰一卷に該当する可能性が考えられる（18―21頁）。

以上のことから、「薫物秘蔵抄」は、少なくとも上下二巻から成る薫物の伝書として構想されたものの一巻であり、処方を主体とした内容による本書は、外題と内題の内容から上巻として、調合法や薬種を主体とした「薫物合様」は下巻として位置づけられていた可能性が高い。また、「薫物秘蔵抄」という書目は、今出川家に伝来した「薫物」の「秘蔵」書から方や説を抜き書きし集めた「抄」、との意味によるかと考える。なお、下巻と見られる「薫物合様」については稿を改めて詳述したい考えであるが、内容が薫物調合の段階ごとに諸説を類纂したものであり、「薫物秘蔵抄」と題したのは内容にそぐわないことから、「薫物」の「合」せ「様」を記した書物の意味で名付けられたかと考える。

上下巻の類纂の経緯や具体的な時期については明記されないが、下巻の巻末には、寛文六（一六六六）年一〇月二三日に権大納言公規こと今出川公規が書写を終えたと記されていた。薫物方の由緒として書中に記載される人稱の内、特定可能な人物の動静は、寛文六年を下らない年代に確認できる（22―23頁）ことから、上下巻ともに類纂はそれ以前に終了し、いずれも公規の自筆により行われた可能性がある。ただし、上巻と目される「薫物秘蔵抄」には、一旦浄書を終えたと見られる寛文六年から二年後の同八年以降に、巻の後半以降の内容を料紙ごと変更したり、別の秘伝書を解いて継ぎ足したり、余白と紙背に処方や説を書き加えたりした痕跡が認められる（14―17頁）。上巻については下巻よりも試行錯誤の段階が長く続いていた可能性があり、巻末に跋文が伝来しないのもその為であったかと考える。

今出川公規の略歴と家系

公規は徳大寺家に生まれて今出川家の養子に迎えられた。家系は大略次の通りである。

今出川 又号菊亭

実兼公四男元亨二右大臣従一位

正慶元太政大臣同二

○兼季

停之為前右大臣

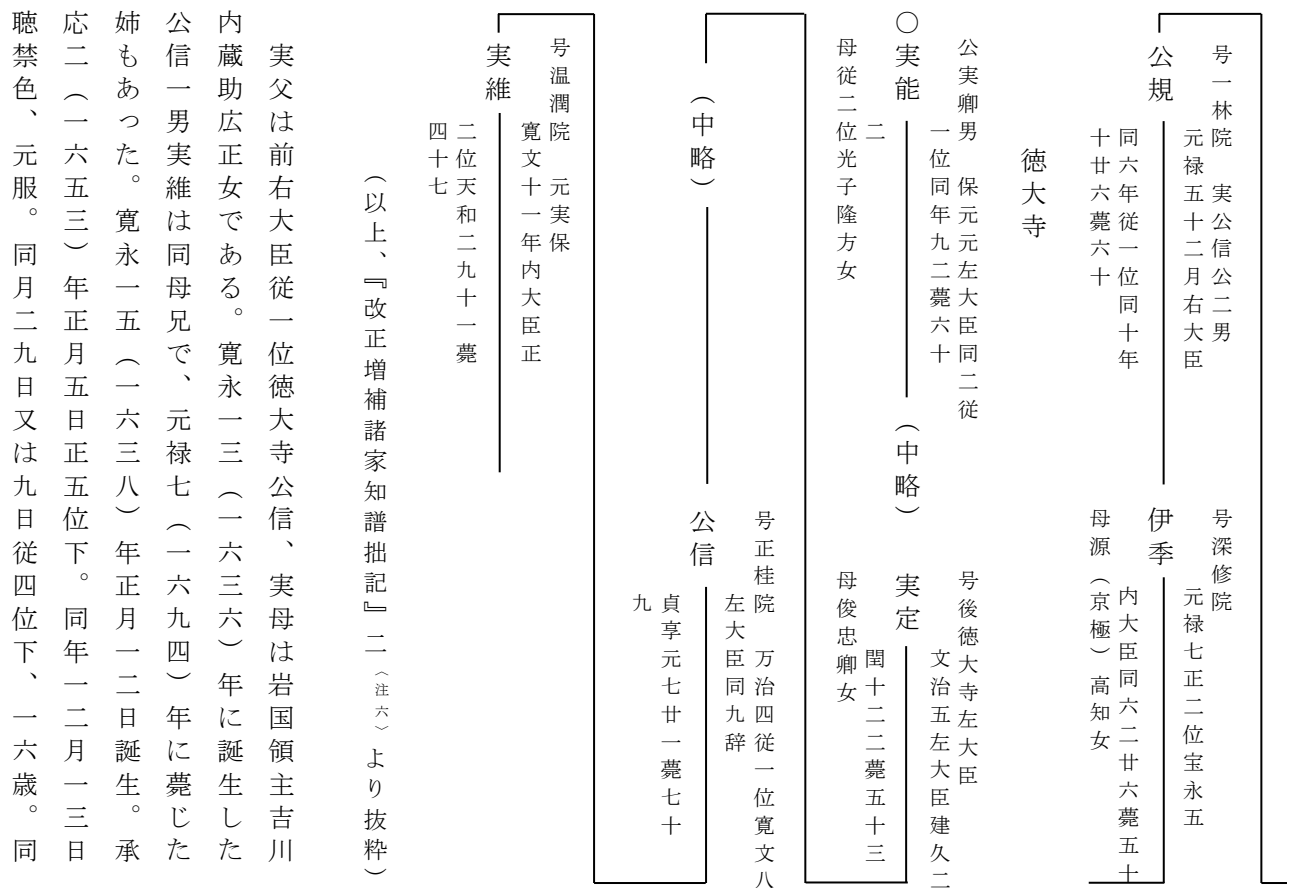
母家女房 暦応二正十六薨五九

（中略）

經季

元宣季
寛永五正二位慶安

五右大臣同年二九薨
母親綱卿女 五十九



実父は前右大臣従一位徳大寺公信、実母は岩国領主吉川内蔵助広正女である。寛永一三（一六三六）年に誕生した公信一男実維は同母兄で、元禄七（一六九四）年に薨じた姉もあつた。寛永一五（一六三八）年正月一二日誕生。承応二（一六五三）年正月五日正五位下。同年一二月一三日聴禁色、元服。同月二九日又は九日従四位下、一六歳。同

三（一六五四）年一二月二六日又は二一日左中将。万治二（一六五九）年一二月二二日又は正月五日従三位。同三（一六六〇）年又は二年一二月二四日權中納言。寛文三（一六六三）年正月一二日又は六日正三位。同四（一六六四）年五月一日權大納言。同三（延宝元、一六七三）年一二月二六日正二位。延宝六（一六七八）年十一月一九日權大納言に右大將を兼ねる。同八（一六八〇）年白馬外弁。東照宮奉幣發遣上卿。將軍宣下上卿。遺詔奏上卿。天和二（一六八二）年十一月一八日転左大將。同三（一六八三）年正月一三日任内大臣。元禄五（一六九二）年一二月一三日任右大臣。同七（一六九四）年一〇月二三日叙従一位、五七歳。同一〇（一六九七）年一〇月二五日薨、六〇歳。号一林院、一林院右大臣。同月二九日に今出川家の菩提寺である本国寺に葬られた（注七）。

慶安五（承応元、一六五二）年二月九日、今出川経季は所労危急の間に右大臣に任ぜられ、翌一〇日に薨去している（注八）。経季は後継に恵まれなかった為、急死により家系は一旦断絶した。翌承応二年七月七日、將軍家より「菊亭」こと今出川家に強力米三百石が加賜されている（注九）。公規はこの時まで子として迎えられたようである。その後経季室を後見役として養育され、今出川家嗣子として元服し、公卿に列したということであろう。ただし、徳大寺家本「公規卿記」の記述によれば、公規は実の父や兄と日常的に行き来している（注一〇）。他、岩国領吉川家の外祖父吉川広正や、広正女で寛文八年に岩国に帰っていた妙源院（注

一二、並びにその弟である吉川広嘉から、四季折々の祝儀や心遣いを受けること度々であったと云う（注一二）。徳大寺家の家族や親族との付き合いは、籍を離れて以降も変わらず続けられたようである。

今出川家の養母は京極高次養女で、実は従五位下内膳正氏家行広女である。氏家内膳正は大坂夏の陣で西軍に付き敗戦により自刃。子息四人の内三男を除く三人が処刑された（注一三）。子女については処分を免れ、京極家に引き取られたということであろう。京極高次嗣子忠高は甥の高和を養子に迎えて丸亀藩を継がせた。今出川公規室となるのはこの高和女である（注一四）。「公規卿記」の条々によれば、実母の生家である岩国領吉川家だけでなく、養母や正室の実家である丸亀藩京極家とも、折にふれ祝儀や文を交わしている（8—13頁）。

以上の記述から、吉川家と京極家では、公家の外戚という立場にあった武家にふさわしく、公規らの洛中における動静に配慮し、折に触れ祝儀や見舞を届けることにより、洛中での暮らしを支援するとともに、文のやりとりを頻繁にして最新の情報を交換したり、親族の情を交わしたりしていたと考えられる。

「公規卿記」に見る今出川公規と薫物

前述の通り、「薫物秘藏抄」には、「公任卿方」の由緒を伴う六種類七点の処方について、「後徳大寺左府書」から寛文八（一六六八）年に写された旨の識語が記載されていた。

また、「薫物秘藏抄」を上巻とする下巻と見られる「薫物合様」の巻末には、「今出川公規自筆」との識語が伝来した。以上の伝承が事実であるとすれば、公規は古今の秘方秘説を類纂する程薫物に精通した人物ということになる。

「公規卿記」には、今出川家の合香活動や資料収集活動に係る記述が散見し、右の仮説を裏付け得る資料として注目される。例えば、寛文五（一六六五）年七月四日条には、公規と見られる人物が、家伝の貴重な薫物書を禁裏に進上したところ、その返礼として、当時の法皇及び上皇が公規の進上した秘伝書を自ら書写した宸翰及び宸筆の下賜に与った旨が、次のように記されている。

（七月）

四日 自朝陰雷雨如昨日今朝徳大寺右府給使云夜前

長谷三位

被参内證申候今日 法皇_江可参之間狩衣令持

先徳大寺殿迄可参之由也想得候由返事

申入四ツ過_ニ徳大寺殿_江行也徳大寺右府公対面_{ニ而}

夜前長谷三位来而先日 法皇_江下官借上候薫物

之方一冊一卷 一卷者秘法輪奐香自筆
一冊ハ不知古本也 借上御満足_{ニ被}

思召候然者当時 禁裏官庫先年炎上故_一（一八丁裏）

古筆之古物無之_ト奏上申候ハ、御進上有度之由也

上候ハ、当家_{ニモ}無之_{而モ}不叶之間一卷ハ

法皇被染 宸翰一冊ハ 新院被染

宸筆候様ニ御意ニ而可被下之由ニ候間追付御礼ニ
法皇江参候而●長谷可申上之由右府公依被申 着狩衣

法皇江御礼ニ参長谷三位ヲ招出夜前右府公来入之時

法皇 仰之通右府公申聞候^{ニ付}御礼^ニ參候御用立候
さへ悉存候處^ニ而 御所之被染 宸筆[」]（一九丁表）

可被下之由難有存候御次手之節御礼被上 仰

可給候由重疊所申也更須（※）長谷^ト雜談結句借

上申候^{ヨリ}けつこう成候由^ヲ申長谷^江前右府公夜前

姫君之事談話之由珍重之條被申了今日

法皇^ニ而 生身玉之御振舞有

新院御幸連枝方宮門跡可參之由長谷被申

追付退出了 法皇^ニ而 大覺寺宮^ニ對顔^{スル}也

「（一九丁裏）

（下略）
「（二〇丁表）

※ 更須―謄写本に須叟とある。

（「公規卿記」第五冊（注一五） 徳大寺家本 41-17-04）

（訓読）四日 朝自り陰、雷雨昨日の如し。今朝、徳大寺
右府、使を給て云く、夜前に（長谷三位）參られ、内證
に申し候ふは、今日 法皇へ參る可き間、狩衣を持た令
め、先づ徳大寺殿迄參る可き由也と。想ひ得て候ふ由、
返事申し入れ、四ツ過に徳大寺殿へ行く也。徳大寺右府
公對面にて、夜前に長谷三位来りて、先日 法皇へ下官
借し上り候ひし薰物之方一冊一卷（一卷は転法輪実香の
自筆、一冊は不知の古本也。）借し上りしを御満足に思し
召され候、然れば当時 禁裏官庫は先年炎上せし故に古
筆の古物これ無しと奏上し申し候はゞ、御進上有り度き
由也。上り候はゞ、当家にもこれ無くて叶はざる間、

一卷は 法皇 宸翰を染められ、一冊ハ 新院 （宸筆
を）染められ（候ふ様に、御意にて下さる可き由に候ふ
間、追付御礼に 法皇へ參り候ひて●長谷申し上る可き
由、右府公申せらるに依り、）狩衣を着て法皇へ御礼に參
り、長谷三位を招き出して、夜前に右府公来入の時、法
皇 仰せの通り右府公申し聞へ候に付き、御礼に參り候
ふ。御用立て候ふさへ悉く存じ候ふ處に、而 御所の染
められし 宸筆下さるべき之由、有り難く存じ候ふ。御
次手の節に御礼上られ 仰せ給ふ可く候ふ由、重疊申す
所也。須叟長谷ト雜談、結句、借上り申し候ふよりけつ
こう成り候ふ由を長谷へ申す。前右府公、夜前に姫君の
事談話の由、珍重の條申され了んぬ。今日法皇にて生身
玉（いきみたま）の御振舞有り、新院御幸にて連枝方、
宮門跡（注一六）も參る可き由、長谷申され、追付退出し了
んぬ。 法皇にて大覺寺宮に對顔する也。
（以上、訓読文の丸括弧内は原文の傍書又は割注の記述を
本文化したもの。句読点と送り仮名は稿者記入。）（内は
割注の書式による二段構えの記述。以下、翻字中の難字は
「●」と記した。）

寛文五（一六六五）年七月四日の朝、徳大寺家から筆者
宅に使いがあり、それによれば、前夜に徳大寺家へ「長谷
三位」が參上して、内緒に申したところによると、翌四日
に筆者を「法皇」の御前へ參らせよとのことであり、先ず
狩衣を持參して徳大寺家へ行くよう指示があったので、筆

者は「徳大寺右府公」に対面した。長谷三位が前夜に来て話したところによれば、法皇へ「下官」がお貸しした「薫物」の方一冊一卷（一卷者転法輪実香自筆一冊ハ不知古本也）

をお借りになり、法皇はご満足に思召された。そこで、禁裏官庫が「先年」炎上した為に昨今は古筆による古典籍が無い旨を奏上し申し上げところ、禁裏への御進上を希望なさる御意向が聞かれた。献上した場合、筆者宅にも古筆が無くなってしまうので、一卷については法皇が宸翰を染められ、一冊は「新院」が宸筆を染められなさるようお考えになり、それらを下さる、とのことであつた。直ちに御礼に法皇御所へ参候し、長谷三位に参候の旨を申し上げよと前右府公が申されたので、筆者は狩衣を着て法皇へ御礼に参り、長谷三位を招き出して次のように話した。昨夜前右府公の許へ長谷三位が来入した際にうかがつた法皇の仰せの通り、前右府公が申し伝えましたので、御礼に参候しました。ご用立て致しましただけで光栄に存じておりましたところに、両御所の染められた宸筆を下さるそうで、ありがたく存じておりますし、この機に御礼を仰せいただけることについて、この上無く喜ばしいことに存じます、と。筆者はそれからしばしの間長谷三位と談話し、思いもかけず薫物書をお貸ししたことで良い結果の得られたことへの喜び等を語った。別件についても少し話した後で、長谷三位より、この日は法皇の長寿を祝う「生身玉」の行事があり、新院の御幸の他に「連枝方」と「宮門跡」も参上なさる予定であるとの説明があつた。筆者はすぐに退出した

が、法皇の御前で「大覚寺宮」にお目にかかったと云う。

「長谷三位」は非参議正三位長谷忠康、「法皇」は後水尾法皇であり、「徳大寺右府公」、「前右府公」とは公規実父の前右大臣徳大寺公信である。薫物書をお貸しした「下官」とは、以下の語り手である長谷三位ではなく、本日記の筆者と見られる公規と解釈できる。公規が貸し出した「薫物」の方一冊一卷（一卷者転法輪実香自筆一冊ハ不知古本也）とは、一点は卷子本で伝承筆者轉法輪三条実香、いま一点は冊子本で筆者不明の古本であつたと云う。公規の手元に伝来したものであるらしい。続文によれば、「先年」の禁裏官庫の炎上により、禁中には薫物の古写本が失われたと云う。承応二（一六五三）年六月二三日の禁裏炎上に際して官庫の焼亡したことを意味するのであろう。この時の火災は東山御文庫構築の契機としてよく知られている。

「新院」は後水尾法皇皇子後西院である。「一卷ハ法皇被染 宸翰一冊ハ 新院被染 宸筆」云々とは、筆者から禁裏に進上した二点の薫物書を、後水尾法皇と後西院が自ら書写したものと読める。禁裏官庫に献上すれば、筆者の家から手本とすべき古く貴重な薫物書が失われることとなる為、新たな手本として、伝承筆者実香の卷子本一卷は後水尾法皇が、筆者不明の古本一冊は後西院が書写して筆者に授けることにしたようである。なお、「連枝方宮門跡」とは後西院の兄弟姉妹である後水尾法皇皇子や、皇子の内寺院に入室した門跡方を云う。「大覚寺宮」はその一人であり、後水尾法皇皇子で後西院異母弟の性覚法親王である。

宸翰、宸筆の授受の様子については具体的に記されない。内緒の話があるから狩衣を持参して来るように、等と言われた前夜に、長谷三位がこれを徳大寺公信に預け、翌日公信が公規に引き渡したと考えておきたい。

筆者は狩衣に着替えて法皇御所へ御礼に参上するよう指示され、その通りにしていることから、一連の趣向と指示は法皇の主導によるものと考えられる。筆者宅に直接使いをやらずに実父の徳大寺公信邸へ遣わし、また、狩衣姿に身をやつすべく準備がなされたのは、宸翰の存在と下賜の事実を世間に伏せる為であったのだろう。

後水尾法皇は、禁裏官庫の補充の為に貴重な秘伝書の献上を促す対価として、後西院との宸翰の共同制作と下賜を思いついたのであろう。また、法皇には薫物書の古筆を珍重するとともに、薫物を伝統文化として尊ぶ思いがあり、証本たるべき宸翰の制作を思い立ったと言えるかもしれない。

さて、「公規卿記」寛文一一（一六七一）年の条々には、公規が匂袋や「供養香」等の薫物を調査した由が、次のように記載される。

（二月）

十一日 巳 癸 天晴

松木大納言殿より御当座之和歌御会ふれ折

紙まいる十六日辰刻ニ御まいり有へきのよし申参

（中略）

今日匂袋

御手合也吉野より飛脚かへり返事共まいる徳左府様より

御使今日御出候はんと昨日仰こし候さいわい小倉中納言殿この方に御入候間御出候へのよし也御へんしには唯今は少用之事候まゝ

暁ほと御出候はんよし申参小倉殿へも御事つて申まいる岩国妙源院様より近所火事こと候へとも何事なくめてたきとの御悦の文まいる監物よりも大納言殿へ文まいる日暮時分徳大寺殿へ御出也夜五つ時分御帰

（中略） 「（一六丁表）

（五月）

七日 巳 丁 天晴

今日薫物御調査也 （中略） 「（三〇丁裏）

申来心へ候よし御申つかい也そのとをり徳大寺殿へ御申つかひなり道悦日野殿へ礼ニまいるよしもおもてへも御礼ニまいる清閑寺殿より内々の御頼のほうしんこん

調査申候てまいるかうはこ入まいる此方にてあけ御返し也

（中略） 「（三一丁表）

（中略）

十九日 巳 己 あめふる

（中略）

御調査也宿ニ御まいり也 今日昼供養香 「（三三丁表）

（以下、傍線は稿者記入。「公規卿記」第一〇冊、東京大学

史料編纂所蔵徳大寺家本、41-17-09）

右によれば、今出川家では二月に匂袋が、五月には「供養香」という銘の薫物が調合されたと云う。「御調合」とあることから、作り手は、本日記の実際の筆者と見られる家札らしき人物（注一七）の主人であり、公規と考えられる。同じ日記の同年二月九日条には「今城殿より香具ふるいかりニ参則御かし候也」（注一八）とあり、公家の「今城殿」こと参議従三位今城定淳家から今出川家に「香具ふるい」を借りに使いが参上したので、公規がこれを貸し与えたと読める。「香具ふるい」とは、薫物や医薬の材料となる「香具」を搗き篩い細かにする為の道具類の一つである。日記の寛文一一年正月一〇日条には、今城定淳が今出川家に帯劔を返却したことが記されており（注一九）、必要な道具類の貸し借りをを行う親しい関係であったことが伺える。

また、左記の延宝二（一六七四）年二月二〇日条は今出川家の公卿としての視点で書かれており、公規が書き手であったと考えられるが、薫物、匂袋について次のように記述される。

（延宝二年二月）

廿日 己酉 雨下及申刻晴 今日精進也 後光明院御忌日也終日精進

（中略）

「（膳写本七三丁表）

入夜上越後守来笛唱奇数反（以下、割注・傍書略）

京極備中守ハ状来江戶下向之事也又井上筑

後守ハ薫物匂袋等調合之節申請處之由状来

（下略）

（東京大学史料編纂所所蔵「公規公記」膳写本より。原本は「公規卿記」第一三冊、東京大学史料編纂所所蔵徳大寺

家本、41-17-09）

右の日記の筆者である「予」は漢文体で記述しており、武家の親族に対して「殿」等の尊称を記していない。後文には「予（当家家札也）」として家札らしき人物の語りが聞き書きされているが（注二〇）、右の記述の筆者はそれとは別の高位の人物と考えられる。ここでは親族の京極備中守から「予」の江戸下向の件について書状の届いたことが記述される。公規は延宝三（一六七五）年に江戸へ下向していた。以上の文脈と状況から、ここでの「予」こと筆者は公規と考えられる。

日記には、この日「井上筑後守」から、薫物や匂袋等を調合する際にはそれらを手に入れたいと旨を記した書状が届いたとある。公規が調合する薫物や匂袋を所望する書状であったと考えられる。「井上筑後守」は高岡藩二代藩主従五位下筑後守井上政清であろう（『寛政重修諸家譜』）。公規の調合する薫物や匂袋は、政清を始めとする幕府大名の間で珍重されていたのかもしれない。

公規は、合香以外に医薬方の調合を行うこともあったらしい。寛文一一年五月一二日、二二日条や、延宝三（一六七五）年二月二日条には、公規と見られる人物が複数種類の医薬を自ら調合し、或いは調合しようとしていたことについて、次のように記される。

（寛文一一年五月）

十二日 戌 壬 天晴昼過^ふ曇風少吹

昼徳前右大将殿御出やかて御帰大納言殿又徳大寺殿へ御出也東坊城殿^ふふんこまいる本御かへし又此方より

一冊まいる日暮時分大納言殿舟橋式部殿へ御出夜ニ入テ御帰
「（三一丁裏）

今日安神散御調合也

（中略）

廿二日 申 壬 天晴

今日牛黄清心圓御調合也上越後江戸よりのほり候とて御みまい申御対面也ほしいひ進上申也くほかいの間もまいり同物持参
「（三三丁裏）

（「公規卿記」第一〇冊、東京大学史料編纂所所蔵徳大寺家本、41-17-09）

（延宝三年二月）

二日 卯 辛 快晴今日当番也請卯下刻参勤於番所

御日次写了具後拝龍顔舞之御沙汰有之花

園三位自 ●番所来 ^{而さが}舞之沙汰雑談了下及此

口中氣之由語之處齒ウクニモ痛ニモ三年ニ成

茄香物ト南天之葉ト黒焼等ニ合付テ能由

談之追付可為調合也午下刻退出酉刻

宿参勤為口中療治親康恕庵来 親康

喜安子

（「公規卿記」第一三冊、東京大学史料編纂所所蔵徳大寺家

本、41-17-12）

寛文一一年五月一二日、二二日の条においては「御調合」とあることから、前述の匂袋や「供養香」の場合に同じく、作り手は公規と考えられる。一二日に調合した「安神散」は婦人薬の一種、二二日に調合した「牛黄清心円（丸）」は滋養強壯剤の一種である。特に前者については、他者の必要や希望によって調合したものと想像される。

さて、延宝三年の日記は寛文一一年の日記と異なり、書き手は今出川家の公卿であるらしく、公規と考えられる。公規は三年間歯痛に苦しんでいたところ、「茄香物ト南天之葉」を黒焼等に合せ付けければ歯痛に効果があると聞き、ただちにこれを調合する必要があると記している。続文によれば、その後宿直の為に参上した宮中において、歯痛療治を行う口中医師として当時著名であった親康喜安の子恕庵を来させているが、公規にとつては、おおよその材料と調合法さえ分かれば、自分で歯痛の薬を調合することも難しくはなかったようである。

ところで、徳大寺家本「公規卿記」の記述に依る限り、当時の今出川家における薫物や医薬の調合は、全て二月から五月の時期に行われていた。今城家が香具ふるいを拝借した目的が、薫物の調合であるとしたら、同家においても二月に合香が為されたことになる。平安中期の成立と見られる『源氏物語』や平安後期類纂と伝わる古い秘伝書には、一月下旬から三月までは朝廷の公務が比較的少ない為に、合香のように手間と時間を要する作業を行う余裕があることや、気候が温暖で湿度の高いことから、合香に適した時

期として説かれている。

江戸時代前期の近衛家当主基熙に降嫁した後水尾法皇皇女の日記『无上法院殿御日記』によれば、当時の皇室と近衛家において、合香は例年二月から六月までの期間に専ら行われている（注二）。江戸時代前期には政治の実権が幕府に移っており、戦乱も平定されて久しいことから、皇族や公卿は平安時代のように、或いはそれ以上に合香の為の時間的余裕を備えていたのではないか。皇室や近衛家、今出川家等の公卿の家々においては、平安時代と同じように、薫物や医薬の調合を春先から初夏までに行うことが可能であつたかと推測する。

「薫物秘蔵抄」の伝承筆者今出川公規は、寛文五（一六六五）年までに薫物書の古筆一卷及び一冊を伝承していた。前者は室町時代の合香家による自筆と伝わり、後者は由緒の不明な古本であつたと云う。同年七月にこれら二点の貴重書を皇室に献上することとなったが、代わりに後水尾法皇と後西院によりそれぞれ書写された宸翰と宸筆を下賜されていた。公規は、古今の秘方秘説を古筆や宸翰から参照できた人物であり、「薫物秘蔵抄」の書写者識語からうかがえるように、貴重で古い合香方に精通した可能性が考えられる。また、そうした証本とも云うべき信頼できる秘伝書を参照しながらであろうか、薫物を調合することがままあり、幕府大名から所望されることもあつた。公規は医薬調合の技能も備えており、自身や周辺の必要に応じて調合していた。調薬の技能は合香の手業にも通じることから、薫

物の調合も器用にこなしたものと想像される。

一―（二） 類纂と試行錯誤

「薫物秘蔵抄」の巻頭には、巻首題に続けて薫物の銘を列挙した「薫物方目録」が記載されていた（3頁）。目録の中の薫物の銘は二六種類を数え、内容は、「梅花」「黒方」を始めとした平安時代以来の伝統的な九種類の薫物と、「白梅」「盧橘」「新枕」といった新作薫物一七種類から成る。新作の内、目録の末尾に記載された「富士」、「伽羅合薫物（きやらのあはせたきもの）」、「干方」の三種類は墨滅され、新たに「紅梅」、「玉簾」、「時雨」の新作三種類が加筆される。

右の目録の内容に対して、本文の現状には、伝統的な薫物一〇種類と新作薫物二一種類、併せて三一種類の銘が記載されており、目録において墨滅された三種類の新作薫物を除く二八種類の薫物の処方（4―5頁・表1）及び説が伝来する。以上の記述は巻の本紙から紙背にかけて行われており、本紙には薫物の処方一四四点及びその調合法を記した説四五点が、紙背には墨滅した処方九点及び説六点が載録される。

目録において墨滅された三種類の新作薫物の処方、本紙にも紙背にも載録されない。一方で、加筆された三種類については同銘の薫物方が載録される。また、本紙と紙背には、目録に無い七種類の薫物方も記載され、「供養香」を除く六種類が新作の銘と考えられる。

処方の掲出順序は、目録に第二二番目の銘として記載されていた「伽羅合薫物」に代わって加筆された「紅梅」までであれば目録の順序に一致するが、残る三分の一の処方の順序については、目録のそれにほとんど一致しない。

「紅梅」方は書中に二点載録される。先に掲載される「紅梅」方⁹⁹（53頁）は脚欄の余白に記述されたものであり、これ以降の薫物の掲出順序と種類は、目録のそれに対してほとんど一致しなくなる。ただし、もう一点の「紅梅」方¹⁴⁰（58頁）について見ると、直後に続く薫物「玉簾」方¹⁴¹と「時雨」方¹⁴²までは、目録に記された「紅梅」↓「玉簾」↓「時雨」の順序に並行していることが分かる。なお、二点の「紅梅」方は、いずれも紙継目の冒頭又はその脚欄余白に記載されており、それらの内「紅梅」方⁹⁹を冒頭の脚欄余白に配した「公任卿方」六種類七点の処方には、末尾に「寛文八（一六六八）年一月一日後徳大寺左府書借写之了秘方也」と記されている。

また、右の寛文八年識語から「黒方」方¹⁰⁷及びその調合の説⁴³を隔てた紙面には、依拠資料と由緒について「宿紙表紙ノ薫方 四辻流」と伝わる薫物「黒方」方¹⁰⁸以降の処方や説が記載されるが、これ以後の四枚の料紙の継目に当たる箇所には、「一」から「四」の順に記載された漢数字を確認することができる。「四」の直後に継がれた料紙の末尾には、合香家の三条家で類纂されたと伝わる秘伝書に頻繁に記載された、轉法輪三条実香が後土御門院に薫物方を相伝した際に賜った御製とされる「たきものゝ代々の匂ひを

雲上につたふる風のたよりうれしも」の一首が記載される。この料紙の左端には、「一」から「四」と同様の位置に小さな墨跡が認められる（55―57頁）。

「一」から「四」の料紙の横幅は四四・九センチから四五・五センチまでとほぼ等しいが、これら以前に継がれた料紙とは幅が異なり、三分の二程度に縮んでいる。また、「四」の料紙以降にも二枚の紙が継がれており、いずれも横幅は「一」から「四」の料紙にほぼ等しい。

「一」から「四」の料紙と続く継ぎ紙一葉に記された①「黒方」方¹⁰⁸から「二葉」方¹³⁹までの処方三二点の内「侍従」方¹²⁵を除く三一点、及び②「黒方」方¹¹¹を調合する為の説一点、並びに③「二葉」方¹³⁹に続いて記載された和歌一首については、続群書類従所収「四辻家薫物書」の冒頭部分に合写された「四辻家代々相伝之双紙」に、同類文を確認することができた。

また、最後尾の料紙には、前述の「紅梅」方¹⁴⁰から「時雨」方¹⁴²の三点と、「建久の説」と呼ばれる依拠資料から写し出されたいらしい二点の薫物方と一点の調合法とが載録され、本紙の記述が終えられている。

以上のことから、本書の類纂は、少なくとも次のような複数の段階に渡り行われたものと推測する。

当初の予定では、目録に墨滅された「富士」「伽羅合薫物」「千方」の三種類を末尾に配した構成が企図され、寛文六年にその類纂と浄書が終えられた。しかしながら、後になつて末尾の三種類を「紅梅」「玉簾」「時雨」に変更したい

と考えたのであろう、「富士」の直前に置かれた「承和百歩香」方98以下の料紙を切り離して新たな紙を継ぎ、目録の内容に変更を加えたのではないか。これ以後も記述は加増されたが、目録の内容がそれ以上に変更されることは無かったようである。或いは、変更を兼ねた浄書が計画されていたのかもしれないが、本紙の上では実現されなかったであろう。

寛文八（一六六八）年になり、類纂者であり書写者である人物は、「公任卿方」の由緒を伴う「黒方」方100以下の処方を加筆することを思いつき、以前に加増した「紅梅」から「時雨」までの継ぎ紙を再び切り離し、これより先に「公任卿」方の料紙を継いだらしい。「公任卿」の冒頭余白に記された「紅梅」方一点は、目録との整合性を図る目的から、この時加筆されたのであろう。なお、「公任卿方」の末尾から「一」の料紙の冒頭にかけて記載されている「黒方」方107とその調合の説43は、「一」を継いだ後に生じた余白を埋める目的等から加筆されたものかと考える。

「一」から「四」までの四枚、及び元は「五」と記されていた可能性のある続きの一枚、並びにこれに継ぎ足された一枚、計六枚の料紙は、元々ほぼ等間隔の料紙であった。

これらの数字はそれ以前の継紙に確認できず、「一」より前の料紙とは紙幅も異なる。また、「一」以降の五枚の処方方は「宿紙ノ表紙」の略抄による秘伝書に載録されたものと伝わるのであって、内容及び「四辻流」との由緒が、続群書類従所収「四辻家薫物書」に合綴されて伝来する「四

辻家代々相伝之双紙」と一致している。以上の特徴から、「一」以下の五枚は、元は四辻流の秘伝書として類纂された冊子本等に綴じられていた五丁分の料紙であり、綴じ目を解いて折り目を開き、「黒方」方106までを記載していた卷子本の末尾に貼り継がれた可能性が考えられる（注二二）。なお、最後尾の料紙一枚も同じ紙幅であったことから、「一」以降の五枚をから成る冊子本等の巻末に綴じられていた遊紙を、直前の五枚とともに貼り継いだ可能性についても考慮すべきであろう。

最後尾の料紙には、「紅梅」方140から「時雨」方142までの三点の処方が記入されたのに続けて、「建久之説」として「焼物調合法」を依拠資料とする「梅花」方143、144方と説45も写されている。「建久之説」より前とそれ以後とでは、筆跡の印象が随分異なることから、前後の記述はそれぞれに時期を隔てて行われたのではないだろうか。以上で本紙への加筆は終了し、それ以降の時期に、紙背への「薫衣香」等の処方九点及び調合の説六点の書入と墨滅が行われたものと考えられる。

一―(三) 処方の由緒と伝来

・ 依拠資料

「薫物秘蔵抄」には、載録される処方ごとに異なる依拠資料の略称、計一一点が併記される。略称の掲出順と、それらから抜き出されたという処方と説の内訳は、次の通りである。

【一覽2】「薫物秘藏抄」依拠資料の略称と処方及び説

※特定の処方や説に対して複数の略称が行われる場合がある。

※「三条家秘方」とある場合も、他の方に同じく「大本」の載録方でもある旨が記されることから、「三条家秘本」の同義と見なした。

(一) 装訂に由来する略称

1 「大本」 処方二〇点、説四点

梅花方 1、2、説 2、黒方 12 | 17、荷葉方 43、44、説 19、侍従方 48 | 50、菊花方 62、落葉方 73、74、説 29、新枕方 81、千種方 83、説 31、仙人方 86、坎方 96

2 「宿紙表紙」 処方三三点、説一点

黒方 108 | 112、説 44、烏方（黒方異名）方 113、梅花方 114 | 117、仙人方 118、119、菊花方 120、き菊花（黄菊花）方 121、侍従方 122 | 125、落葉方 126、127、花はちす（花蓮）方 128、荷葉方 129、蓮葉方 130、玉椿方 131、若草方 132、盧橘（花たち花、花橘）方 133、新枕方 134、野風方 135、蘭方 136、千種方 137、菖蒲方 138、二葉方 139

3 「白表紙半切」 処方一〇点、説四点

梅花方 6、侍従方 59 | 61、説 22、23、菊花方 66 | 68、説 27、28、玉椿方 89、蘭方 91

4 「墨流半切」 処方一六点、説一点

梅花方 3、4、黒方 32 | 36、説 13、荷葉方 47、侍従方 54 | 57、菊花方 69 | 71、盧橘方 79

5 「大和トジ」 処方一四点、説二点

梅花方 5、黒方 38 | 42、説 16、17、荷葉方 46、菊花方

72、落葉方 76、新枕方 82、千種方 85、仙人方 87、玉椿方 88、蘭方 90

(二) 処方又は伝本の所有者ないし考案者に由来する略称

6 「後徳大寺左府書」 処方八点、説なし

黒方 100、侍従方 101、102、落葉方 103、梅花方 104、荷葉方 105、菊花方 106

7 「三条右府家秘本」 処方二点、説四点

黒方 18、19、説 6 | 9

8 「三条家秘本」 処方八点、説四点

梅花方 2、説 2、荷葉方 44（三条家秘方）、説 19（三条家秘方）、侍従方 51、菊花方 63、落葉方 75、説 30、盧橘方 77、新枕方 81、千種方 83、説 31

(三) 装訂及び筆者に由来する略称

9 「大本勅筆」 処方六点、説なし

黒方 12 | 17

10 「勅筆巻物」 処方二一点、説八点

梅花方 7 | 10、説 3、白梅方 11、説 4、黒方 24 | 31、説 10、11、荷葉方 45、説 20、侍従方 52、53、58、菊花方 64、65、説 25、26、盧橘方 78、千種方 84、説 32

(四) 資料の書写年に由来する略称

11 「建久之説」 処方二点、説一点

梅花方 143、144、説 45

近世前期以前の薫物関係資料を対象とした調査研究はほとんど進展しておらず、右の依拠資料の全てを既存の資料の中から特定するには困難な状況にある。ただし、薫物諸書の載録状況の集計結果と依拠資料ごとの処方や説の集計結果との比較により、依拠資料ごとの内容構成に関する特徴を伺ったり、一部の依拠資料の推定を行ったりすることは可能である。

「宿紙表紙」(2)と呼ばれる依拠資料が、続群書類従所収「四辻家薫物書」冒頭に合写された「四辻家代々相伝之双紙」と来歴上比較的近い関係にある可能性については、類纂過程を考察する中で既に言及した(16頁)。「建久之説」(11)とされる依拠資料については、既存の資料の内「焼物調合法」(注二三)の書目で伝わる秘伝書に、建久年間の日付による識語と同類文を確認することができる(21・22頁)。その他にも、「勅筆巻物」及び「大本勅筆」と呼ばれる依拠資料については、「薫物秘蔵抄」の伝承筆者今出川公規の日記と伝わる「公規卿記」(「公規公記」とも。)に記された薫物方の宸翰及び宸筆の特徴に重なる点の見られることから、来歴と由緒について考察する余地が認められ、注目に値する(18―21頁)。

以下の考察では、「薫物秘蔵抄」の依拠資料の内、特に(三)として分類した内の9「勅筆巻物」及び10「大本勅筆」、並びに(四)として分類した11「建久之説」について取り上げ、それぞれの内容構成の特徴を検討するとともに、「公規卿記」の記述との比較検討を試みる。

「勅筆巻物」と「大本勅筆」

依拠資料の内(三)の9「大本勅筆」からは、処方の六点が写し出されたと云い、処方の種類は全て「黒方」であるという(表3)。それらの内、由緒の明記されない方12を除く五点の処方は、八条大将、朱雀院、八条宮、承和こと仁明天皇が考案ないし所持したものと伝わり、いずれも平安時代前期と中期の合香家にゆかりの品とされる。六点全ての同類文を載録する伝書については探索中である。

依拠資料の内(三)の10「勅筆巻物」からは、八種類の薫物(「梅花」「白梅」「黒方」「荷葉」「侍従」「菊花」「盧橘」「千種」)の処方二点と、それらの調合法や香具に関する説八点が抜き出されたと云う(表2)。依拠資料の中では「宿紙表紙」に次いで多く抜き出されている。薫物の種類に新作が含まれることから、「勅筆巻物」は室町時代以降に類纂された可能性がある。処方を考案ないし所持したとされる人物については、四条宮遵子内親王、八条宮本康親王、二条関白藤原教通並びに堀川右大臣藤原頼宗という、平安前期から中期の合香家と見られる人物の呼称の他に、薫物「梅花」と「黒方」の処方及び調合法の由来として、「三家秘法」「黒家法」という、合香家の略称らしきものが確認できる。

「三家秘法」は処方四点、調合法一点の由緒として記される。「三家秘法」の全てを一同に載録した伝書は確認できていないが、処方の内二点は三条家の類纂と伝わる『薫物故事』にも載録されることから、「三家」が合香家の三条家

【表2】「薫物秘蔵抄」に伝来する「勅筆巻物」逸文の概要、及び処方に対する他書の同類文

掲出順	方・説通番	銘・項目名	由緒、概要等	書中と他書の同類方
9	方7	梅花	勅筆巻物	【薫集】侍従方48【香秘】補闕方31【雑要】方16【故書】侍従方32,梅花方47【秘方】挿入紙A梅花方2△,同方5.9【た】方7【薫上】方2,10,114【黒秘】梅花方2【上1】梅花方2【上2】梅花方2
10	方8	梅花	勅筆巻物; 四条宮黒(黒方のかきかけ?); 右三色三家秘方也、云々(説3)	【薫集】黒方方70△【香秘】坊方方27△【故書】黒方方3△,29△,梅花方48【薫・書陵】黒方方23△【薫上】方117【万】方14
11	方9	梅花	勅筆巻物; 同方; 一両合分并取重次第; 右三色三家秘方也、云々(説3)	
12	方10	梅花	勅筆巻物; 右三色三家秘方也、云々(説3)	【薫集】侍従方48【香秘】補闕方31【雑要】方16【故書】侍従方32,梅花方47【秘方】挿入紙A梅花方2△,同方5.9【た】方7【薫上】方7,114【黒秘】梅花方2【上1】梅花方2【上2】梅花方2
13	説3	(方8-10の調合法)	勅筆巻物; 右三色三家秘方也右沈四両合方大本ノ勅筆ニモ有梅花ハ花ノひらを取入候●●ソレハ花をかけほしニ仕テ粉ニシテ入候; 甘松ハー夜酒ニヒタシテソノハチ又ノ日ニ布ニツミメテ水ニテフリスノギンホリテ日ニホスベシ火ニアブルベカラス	
14	方11	白梅	勅筆巻物; 白梅	【た】方10△【薫・京菊】方5△【万】方25△【上1】方25△【上2】方25△
15	説4	(白梅一般の調合法)	勅筆巻物; 白梅 梅干実ノ中水ニツケテ表ナル赤皮ヲソソケノケ候ノ後キサミコに仕候或橘実入事有云々	
33	方24	黒方	勅筆巻物	【た】方6【秘方】方6【薫上】烏方113△【薫】小倉方31△,黒方方37△【万】方10△
34	説10	(黒方一般の沈の刻み様)	勅筆巻物; 一ちんのギザミ程くろほうコマカナルヨシ	
35	方25	黒方	勅筆巻物; 四条宮	【薫集】方65△【焼物】方13△,方14△【故書】方45△【た】方1△,方5
36	方26	黒方	勅筆巻物	
37	方27	黒方	勅筆巻物	
38	方28	黒方	勅筆巻物; 一両合之時ハ	
39	方29	黒方	勅筆巻物	【万】方42【薫上】方37△
40	説11	(方29と一両合の方の調合法)	勅筆巻物; 黒家法; ○は又取重様秘説也二両合は勿論一両合ノ時モ沈は二度也麝香は掻合後	
41	方30	黒方	勅筆巻物	【万】方40【た】方1.5△【薫上】方18
42	方31	黒方	勅筆巻物; 三家秘方	【万】方11【た】方2
64	方45	荷葉	勅筆巻物	【香秘】方16.8【万】方38
65	説20	(方45の香具に関する秘説)	(勅筆巻物); 今二種之香入之云々秘可書歟、麝香一朱安息香一朱事也	
73	方52	侍従	勅筆巻物(二条関白方か。)	【薫集】方55
74	方53	侍従	勅筆巻物; 右一方堀川右大臣 二条関白治暦四年四月六日(堀川右大臣方か)	【薫集】方40,方56【焼物】方10【故書】方46【秘方】方3
79	方58	侍従	勅筆巻物; 右一方八条宮方	【薫集】方36,38,41,44,52,百和香方95【焼物】方8,9【香秘】方2,百和香方5,方23,方29△【故書】方104【薫】梅花方65【薫上】方58
88	方64	菊花	勅筆巻物	【秘方】方41△
89	説25	(方64の調合法)	(勅筆巻物); 一菊花冬菊シヘテ取陰干無別義候	
90	方65	菊花	(勅筆巻物)	【万】方39【薫上】方67△,方68△
91	説26	方64の香具に関する説	勅筆巻物; 掻合後(七番目に)麝香二朱	
108	方78	盧橘; はなたちはな	勅筆巻物	【万】方43【薫上】方133△
115	方84	千種	勅筆巻物	【万】方20
116	説32	(方84の香具に関する説)	勅筆巻物; 掻合後(八番目に)麝香一朱半	

※右端列「書中と他書の同類文」における他書の略号と内容から推定される類纂又は書写年代の上限

【薫集】薫集類抄(平安時代後期)、【焼物】焼物調合法(鎌倉時代前期)、
 【香秘】香秘書(南北朝期)、【薫・書陵】薫物方(南北朝期、宮内庁書陵部所蔵)、
 【故書】薫物故書(南北朝期)、【黒秘】薫物黒方秘方(室町時代後期、宮内庁書陵部)、
 【上1】【上2】無題薫物書2点(室町時代後期、上田流和風堂所蔵)、
 【薫・京菊】薫物方(安土桃山時代、京都大学菊亭文庫所蔵)、
 【薫】薫物之方(江戸時代前期、徳川林政史研究所所蔵)、
 【秘方】薫物調合秘方(江戸時代前期、東山御文庫)、【薫上】薫物秘蔵抄(江戸時代前期、京都大学附属図書館菊亭文庫)、
 【万】万方(江戸時代前期、専修大学図書館菊亭文庫)、
 【類聚】類聚薫物秘抄(江戸時代中期、四天王大学図書館所蔵薫集類抄中に伝来)、
 【た】たきものゝほう(不明)

【表3】「薫物秘蔵抄」に伝来する「大本勅筆」逸文の概要と他書の同類文

掲出順	方・説通番	銘・項目名	由緒・概要等	書中と他書の同類方
17	方12	黒方	大本勅筆	【薫・書陵】方22△、25【類聚】方5△
18	方13	黒方	大本勅筆；右一色八条大將方也	【薫集】方71△【薫・書陵】方20
19	方14	黒方	大本勅筆；朱雀院御方	
20	方15	黒方	大本勅筆；八条宮方	【故書】侍従方36△
21	方16	黒方	大本勅筆；八条宮方	【故書】侍従方40△【香秘】菊花方33【薫・乾々】侍従方53△
22	方17	黒方	大本勅筆；八条式部卿宮方承和秘方	【薫集】方61,62,76,79,82△【香】方3,16△【焼物】方15,17△【薫・書陵】方1,4,16,33【香秘】坎方方24【故書】方4,10【た】方3【薫】方29,42,67【秘方】方35【薫上】方17,32,40,菊花方61,99,109【薫・乾々】黒方方1

※右端列「書中と他書の同類文」における他書の略号と内容から推定される類纂又は書写年代の上限

【薫集】薫集類抄（平安時代後期）、【香】香之書（平安時代後期）、
 【焼物】焼物調合法（鎌倉時代前期）、【香秘】香秘書（南北朝期）、
 【薫・書陵】薫物方（南北朝期、宮内庁書陵部所蔵）、【故書】薫物故書（南北朝期）、
 【薫】薫物之方（江戸時代前期、徳川林政史研究所所蔵）、
 【秘方】薫物調合秘方（江戸時代前期、東山御文庫）、
 【薫上】薫物秘蔵抄（江戸時代前期、京都大学附属図書館菊亭文庫）、
 【薫・乾々】薫物之方（不明、杏雨書屋乾々齋文庫所蔵）、
 【類聚】類聚薫物秘抄（江戸時代中期、四天王大学図書館所蔵薫集類抄中に伝来）、
 【た】たきものゝほう（不明、高松宮本）

を意味する可能性は検討に値する。また、表2には記していないが、説11は専修大学図書館菊亭文庫所蔵「万方」にも載録されており、同書の同類文中には、「黒家法」が「黒家」と称する合香の名家による調合の「法」として記述される（注二四）。合香家（黒家）の探索と検証は稿を改めて行うとして、説11は薫物「黒方」の調合法であることから、現時点においては、「黒方調合についての当家の説」を意味する語と解釈しておきたい。

以上で確認した通り、「大本勅筆」には、伝統的な薫物「黒方」方で、平安時代の高貴で著名な合香家らにゆかりとされる品が載録されていた。また、「勅筆巻物」には平安時代の由緒ある合香方と室町以降の新作薫物方とが類纂され、中には三条家の秘方として伝来した可能性のある処方や調合法も含まれていた。「薫物秘蔵抄」に写された処方や説以外にも掲載のあった可能性は考えられるが、「薫物秘蔵抄」の類纂者が、それぞれの書物の主体を成す記述と見なした処方や説が写し取られたと見て間違い無かろう。どちらの「勅筆」についても、いずれの天皇によるのかは明記されていない。

さて、「薫物秘蔵抄」の伝承筆者である公規の代の今出川家には、室町時代の合香家による秘伝書を写した宸翰一巻と、筆者不明の古本と見立てられた古い伝書を写した宸筆一冊とが伝来していた可能性がある。「公規卿記」寛文五年七月四日条には、公規が「薫物之方」一冊一巻一巻者転法輪実香自筆一冊ハ不知古本也」、伝承筆者轉法輪三条実香とさ

れる薫物の方の卷子本一卷と、筆者不明の古本と云う冊子本一冊から成る二点の秘伝書を法皇にお貸ししていたところ、禁裏より、承応二（一六五三）年六月二三日の禁裏炎上により貴重な古典籍が焼亡した禁裏官庫を補充する為に、これらの秘伝書を献上するよう御所望があり、その返礼として、「二巻ハ法皇被染 宸翰一冊ハ 新院被染宸筆」、伝承筆者実香の卷子本を後水尾方法が写した宸翰一卷と、筆者不明の古本を後西院が写した宸筆一冊とが用意され、公規に与えられた経緯が記されていた（以上、8―10頁）。

「薫物秘蔵抄」に云う「勅筆巻物」は、卷子本という装訂と、三条家の秘方秘説と新作薫物を類纂したと見られる点において、伝承筆者轉法輪三条実香の「薫物之方」一卷を写したとされる後水尾法皇宸翰一卷の特徴に一致する。また、「大本勅筆」についても、冊子本であったとされることと、内容の主体が平安時代前期と中期の合香家にゆかりの処方と見られる点において、筆者不明の古本一冊を写したと云う後西院宸筆一冊の特徴に重なる。「勅筆巻物」と「大本勅筆」が右の宸翰及び宸筆に該当する可能性は非常に高いと言えよう。

東山御文庫や宮内庁書陵部には、後水尾法皇と後西院の宸翰と伝わる典籍が伝来する（注二五）。今後の調査研究では、禁裏官庫に献上されたというこれらの底本の所在や来歴を探究、検証することにより、「薫物秘蔵抄」に記載される伝承及び「公規卿記」記事の史実性の検証に努めたい考えである。

「建久之説」

依拠資料「建久之説」に云う「建久」とは、鎌倉時代前期の年号の一つであろう。「建久之説」から抜き出された梅花方¹⁴³及び¹⁴⁴並びにその調合の説⁴⁵の内容を、既存の資料の記述内容と処方や説の載録状況の集計結果に照らしたところ、名古屋市蓬左文庫と陽明文庫に諸本の伝来が確認される「焼物調合法」^{（注二三）}との間に共通点の見られることが分かった。

「焼物調合法」に伝わる識語の内最も古いものの書写年は「建久四年正月廿日」とある。また、「焼物調合法」は「建久之説」から抜き出されたと云う処方と説の同類文を載録する。以上の特徴から、「建久之説」の語が「焼物調合法」の伝本を意味する略称として記載された可能性は、調査の現状において比較的高いと考えられる。

管見に、「焼物調合法」の逸文は、「薫物秘蔵抄」と同じ京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵天正一七年写「薫物方」^{（注二）}と、岩国徴古館所蔵吉川家寄贈図書「薫物相伝書」（一冊、資料番号 121400052）に確認している。吉川家は今出川公規実母徳大寺公信室の生家である。『公卿補任』や『諸家伝』、公規の日記とされる「公規卿記」には、公規が外祖父を始めとした母方の親族の訃報に接して喪に服したり、岩国から四季折々の祝儀や見舞い等の心遣いを受けたりしていたことが記されていた（8―13頁）。また、吉川家には、三条家で類纂されて今出川家や高松宮家に伝来した『薫物

故書』という、当時としては比較的規模の大きな薫物書の写本が、「薫物之書」の書目により伝来する（注二・三）。

現在の広島県山県郡北広島町に置かれていた戦国武将の吉川元春館跡からは、十種香などの遊戯で香の種類を答える為に用いられた「聞香札」が発掘されている。吉川家では近世前期以降に公家の三条家と婚姻を重ねていた。三条家は合香家として著名な家柄でもある。吉川家には、高家に准ずる家柄にふさわしく、岩国領に移る以前から香文化を嗜む教養がそなわっており、江戸時代以降には、公家との縁戚関係を通じて薫物文化への理解を深めていったものと想像される。

公規の代の今出川家には、平安時代の公卿藤原公任の秘方秘説を類纂したとされる「後徳大寺左府書」（17頁）や、平安時代の秘方秘説を主体としたと見られる「不知古本」（8—11頁）、並びにそれらと同じ平安時代の秘方秘説の類纂である「焼物調合法」の本文も伝来していた。後述するが、「後徳大寺左府」は平安時代後期の公卿で蔵書家としての逸話も知られる徳大寺実定であり、その自筆と見られる「後徳大寺左府書」は、徳大寺家に代々伝来して公規が書写ないし移譲された可能性がある（25・26頁、人名家名等解説81・82頁）。「焼物調合法」の類纂は、鎌倉時代前期の建長年間以前に行われた可能性はある。「不知古本」の書写年等は不明であるが、禁裏官庫にあつて焼亡した「古書」に代わるものとして後水尾法皇の御所望に与っていた。今出川家に伝来していた薫物書には、平安時代の著名な合香

家にゆかりの名方を類纂し、平安後期から鎌倉前期までに成立した可能性のある貴重な古典籍が含まれており、それらの資料的価値は、禁裏官庫の損失を補い得る程優れたものとして評価されたと考えられる。

吉川家に伝来した『薫物故書』伝本と「焼物調合法」逸文が、同家の親族である今出川家と三条家のどちらに由来するものであるのか、或いは、右とは別の経緯により同家にもたらされたのかといった問題については、今後の課題として引き続き究明に取り組みたい考えである。

・ 合香家

「薫物秘蔵抄」に伝来した処方や説を所持ないし考案した合香家として名前の見える人物の内、個人の特定ないし推定が可能なのは、次の一九名である。

【一覧3】「薫物秘蔵抄」の合香家と生没年

（一） 皇族

- 1 承和（仁明天皇。弘仁元（八一〇）—嘉祥三（八五〇）
- 2 朱雀院（延長元（九二三）—天曆六（九五二）
- 3 四条宮（円融院太皇太后宮藤原遵子。天徳元（九五七）—寛仁元（一〇一七）
- 4 正親町院（永正一四（一一五七）—文禄二（一一五九三）
- 5 御室御所（御室仁和寺第二〇世任助法親王（大永五（一一五二五）—天正一二（一五八四）か）

（二） 臣下

- 6 四条大納言（源定。弘仁六（八一五）—貞観五（八六三）

- 7 八条宮（仁明皇子本康親王。天長九（八三二）以前―延喜元（九〇一））
- 8 枇杷左大臣（藤原仲平・貞観一七（八七五）―天慶八（九四五））
- 9 公忠朝臣（源公忠。寛平元（八八九）―天曆二（九四八））
- 10 八条大将（藤原保忠。寛平三（八九一）―承平六（九三六））
- 11 大江千里（生没年不明）
- 12 公任卿（藤原公任。康保二（九六六）―長久二（一〇四一））
- 13 堀川右大臣（藤原頼宗。正暦四（九九三）―康平八（治暦元、一〇六五））
- 14 二条関白（藤原教通。長徳二（九九六）―承保二（一〇七五））
- 15 後徳大寺左府（藤原実定。長暦三（一〇三九）―建久二（一一九一））
- 16 後白川右府（轉法輪三条公冬。元名公量、公光。明德元（一三九二）又は同二―長祿三（一六五九））
- 17 龍翔院（轉法輪三条公敦。永享一〇（一四三九）―永正四（一五〇七））
- 18 轉法輪前左府（轉法輪三条実香。応仁二（一四六八）―永祿元（一五五八））
- 19 中納言宗種（難波宗種。慶長一五（一六一〇）―万治二（一六五九））

右の人々の生没年や活躍した時期は、平安時代前期の天皇で合香家としても著名であった仁明帝（弘仁元（八一〇）―嘉祥三（八五〇））を上限とし、江戸時代前期の公卿難波宗種（慶長一五（一六一〇）―万治二（一六五九））を下限とする。このことは、本書の伝承筆者を今出川公規とする

見方を妨げない。

また、本書に名前の見える合香家の中には、既存の資料や従来の研究において薫物との関わりについて報告されない人物が数名ある。そのため、本書の内容を分析する事により、これらの人物の知られざる特徴や人脈を解明する手がかりとして重視される。「薫物秘蔵抄」は、江戸時代前期の今出川家に伝来した秘方秘説を今に伝える点において貴重であると同時に、日本文化史研究の領域に新たな情報と視点を提供する点においても非常に有用である。

「薫物秘蔵抄」に記された人称等については、本稿附録『薫物秘蔵抄』人名家名等解説」（61―97頁）に略歴や薫物との関わりについてまとめており、詳しくはそちらを参照されたい。以下の各項では、本書において新たに知られ、或いは推定することのできた合香家について取り上げ、その略歴と秘方秘説の由来並びにそれらの方、説に見られた特徴の要点を紹介する。

御室御所（人名家名等解説 65・66頁）

「薫物秘蔵抄」には「黒方」方107と同方調合の説43には、御室御所よりこれらを拝受し、相伝したのは正親町院である、と解釈できる識語が記載される。伝承の内容が正しければ、「御室御所」とは正親町院の存命中に御室仁和寺宮門跡を務めた法親王であり、第一九世覚道法親王及び第二〇世任助法親王のいずれかに該当する可能性が高い。

右の二名の内、任助法親王は大永五年に誕生。父は後柏

原院猶子伏見宮貞敦親王、母は轉法輪三条太政大臣実香女藤原香子である。後奈良院猶子となり、天文八（一五三九）年に親王宣下を受けて仁和寺へ入室。天正一二（一五八四）年に逗留先の芸州厳島にて病により入滅し、厳島の対岸、現在のJR山陽本線宮島口駅近辺に埋葬された。

任助法親王は院と同年配であったほか、実母は後奈良院に薫物を伝授した轉法輪三条実香の姫君である。「人名家名等解説」の正親町院項で述べたように、院が御室御所から相伝したとされる「黒方」方は、平安後期以降の古い薫物書にも掲載されているが、室町時代以降には三条家類纂の『薫物故書』に載録されて上層社会に伝来したことが知られる。任助法親王が母方から薫物の秘方や秘説を継承しており、正親町院にその一部を伝授したとの推論には、蓋然性が認められよう。

「薫物秘蔵抄」以外の薫物書にも、御室仁和寺にゆかりの品として伝わるらしき薫物の方や説は散見する。管見に、載録先は皇室と公家に伝来した秘伝書である。御室の方は主として皇族、貴族に伝来し、彼らを主体とした文化圏において珍重されたのかもしれない。

中納言宗種（人名家名等解説 76・77頁）

「薫物秘蔵抄」に「中納言宗種」の秘方、秘説と伝わる処方「黒方」方⁴⁰及び新作「若草」方⁹²の二点で、調査の説¹⁶及び³⁹をそれぞれ伴う。方、説のいずれも専修大学図書館菊亭文庫所蔵「万方」^{（注二）}に同類文を確認すること

ができ、「宗種」または「宗種卿」にゆかりの品との伝承が記載される。「中納言宗種」は、室町時代に発祥したと見られる新作薫物の方を考案ないし所持したと伝わることから、江戸時代初期の難波宗種（慶長一五（一六一〇）―万治二（一六五九）に比定する。

難波宗種は従一位権大納言飛鳥井雅宣（雅胤とも）男。母不明。難波家は藤原北家師実流の称号。父雅宣は飛鳥井雅庸二男で初め宗勝といい、難波家一四代宗富の逝去によって中絶していた同家の家督を相続し再興したが、慶長一四（一六〇九）年七月、二三歳の時に勅勘を蒙り一月九日に配流された。同一七（一六一二）年勅免を受けて洛中へ戻り、翌年八月三日に飛鳥井家を相続して名を雅胤と改め、更に又雅宣と改めている。

宗種は父の配流の翌年に当たる慶長一五年二月一〇日に誕生。元和三（一六一七）年正月五日に八歳で従五位下に叙され、同五（一六一九）年六月一〇日に一〇歳で元服、同日に侍従従五位上の官位を賜る。承応三（一六五四）年四月七日に権中納言に任ぜられ、翌明暦元（一六五五）年四月七日に後西院より聴直衣の賞を賜るなど慶事、昇進や行事への参加が続いた。同年七月三日に権中納言を辞し、三年後の万治二（一六五九）年二月一四日に薨去、五〇歳。

学問や家業の蹴鞠を始めとした諸芸における評判はあまり伝わらないが、飛鳥井家の主催と見られる明暦四（万治元、一六五八）年正月二三日「裏亭会始」及び同年八月一六「裏亭当座」に和歌を一首ずつ出詠しており（『近代御会

和歌』、出自に相応しい教養を備えていたことが伺える。なお、これらの和歌御会には、「薫物秘藏抄」を類纂した可能性のある今出川公規も出詠している。また、慶安元年七月七日に幕府から武家伝奏と宗種、公規の両名とに合力米の加増が為されたこともあった(『宣順卿記』)。宗種と公規の年齢には親子程の差があり、公規が公卿に列した時期は宗種の晩年に重なるが、それ以前から、公務や和歌などの文化的催しを通じて面識があり、協力し合うこともあったかと考える。

五〇歳という比較的若い年齢で薨去したこともあつてか、宗種の履歴には和歌以外の才芸に関する事跡が見当たらない。飛鳥井家と難波家がともに家業の一つとした蹴鞠の道における技量の程も管見に不明であるが、蹴鞠の行事への参加に支障の無い程度の修練は経ていたものと想像する。今出川家の伝書に云われる通り、宗種が考案ないし所持したとされる処方や調合法が実際に「秘方」、「秘説」と称されたとすれば、宗種は江戸時代前期の上層社会を代表する優れた合香家の一人としての評判を得ていた可能性がある。

後徳大寺左府(人名家名等解説 81・82頁)

「後徳大寺左府」とは、平安後期から鎌倉前期に活躍した公卿であり、歌人としても著名な藤原実定を云う。徳大寺右大臣正二位公能一男、母故権中納言俊忠女。長暦三(一〇三九)年誕生、建久二(一一九一)年薨去。九条兼実の日記『玉葉』承安二(一一七二)年一二月八日条によれば、

実定が「花園左大臣記」八十余巻と「四条戸部記」百余巻を殊に秘藏して披露せず、これらの他にも和漢の本書抄物を一万巻余も所持したことを弟の実守が明かしており、蔵書家として知られたらしい。三条西洞院の実定邸は安元三(一二四五)年四月二八日に洛中で発生した火事により焼亡。邸内に収蔵された豊富な文書もこの時焼失したという(注二六)。著述に日記『槐林記(庭槐抄)』があり、治承元(一一七七)年から寿永二(一一八三)年までの五年分のうち一部が伝存する。

和歌文化活動における実績と評価は高く、平安時代末期から室町時代までの勅撰集及び鎌倉時代後期の私撰集にのべ九九首が入集するほか、家集『林下集』が編まれた。『古今著聞集』には、嘉応二(一一七〇)年一〇月九日に住吉社に奉納された歌合に歌人として参加した折の逸話として、実定の出詠歌「ふりにける松物いはゞとひてましむかしもかくや住の江の月」に対して判者の藤原俊成が感じ入り、世間においても高く評価されたと伝わる。実定の逝去から数十年後に成立したとされる『無名秘抄』には、実定の人物と和歌を酷評する逸話や評伝が記載されており(「無名大将事」、「歌人不可證得事」)、評価は必ずしも一定していなかったらしいが、室町時代まで多くの勅撰集等に入集し続けたことにも明らかのように、平安末期から鎌倉前期の歌壇における代表的な廷臣歌人の一人と評価される(注二七)。実定は雅楽にも長じ、多好方から神楽歌の秘曲を相伝して子息公継に伝授したと云う(『神楽血脈』)。

管見に、実定の薫物に関する伝承が記載されるのは「薫物秘蔵抄」のみである。同書に「公任卿方」（人名家名等解説67―69頁）として載録される六種類、七点の薫物方の書写者識語に「寛文八年十一月十一日後徳大寺左府書借写之了秘方也（寛文八（一一六八）年十一月十一日、後徳大寺左府書借りてこれを写しおはんぬ、秘方也）」と記述される。今出川公規が、生家である徳大寺家に伝来した「後徳大寺左府書」を拝借ないし相伝し、そこから「公任卿方」を抜き出して「薫物秘蔵抄」に書き加えた可能性は検討に値する。

「薫物秘蔵抄」載録方のうち「黒方」方¹⁰⁰は、平安時代の合香家にゆかりの品とされる著名な処方の同類文である。平安後期の類纂と伝わる『薫集類抄』（注三）に記載の同類文には「公任卿」方に同じとする伝承も記載されており、「黒方」方¹⁰⁰とは処方の内容と由緒のいずれも重複することが分かる。「侍従」方¹⁰¹は茶道上田宗箇流上田家に収蔵される伝書の載録方の同類文であり、その他の処方は他書に同類文が確認できない。以上の特徴から、「後徳大寺左府書」の逸文は、他書にほとんど伝来しない珍しい処方を中心とした内容であるが、平安後期の類纂と伝わる伝書の内容に対して重複も見られることから、後徳大寺左府実定の蔵書と言われるだけの時代性を備えていると評価できるのであつて、或いは、『薫集類抄』の典拠の一つと依拠資料を共有した可能性も考慮すべきかと考える。

二 「薫物秘蔵抄」の表現

――薫物の「流」と（流派）――

「薫物秘蔵抄」の文表現は、江戸時代前期の薫物文化の実態だけでなく、香に関する当時の語彙の解明を目指す上でも重視すべきであろう。それらの表現の内、他書に対する独自性という点において最も顕著と思われるのは、書中における「流」の語の用例と、他書の同類文と比較した際に残された校合痕と見られる数十種類の記号である。

記号の種類と他書への記載状況については調査中であり、稿を改めて考察したい考えである。以下の本稿では、「流」の語の用例を分析するとともに、その結果からうかがえる当時の薫物文化の実相について考察する。

「流」の語は、京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薫物秘蔵抄」の依拠資料「宿紙表紙薫方」の由緒を記した中に「四辻流也」としてあらわれていた。「宿紙表紙薫方」は「黒方」方¹⁰⁸から「二葉」方¹³⁹までの方32点及び説1点を載録したと考えられる。これらの処方や説の内、処方一点を除くほとんど全ての記述については、続群書類従所収「四辻家薫物書」の冒頭に合写された、「四辻家代々相伝之双紙」と呼ばれた秘伝書の内容に一致することが分かっており、「宿紙表紙薫方」は「四辻家代々相伝之双紙」の諸本であつたと考えられた。「四辻流也」とあるところの「四辻」とは、鎌倉時代前期の太政大臣西園寺公経四男実藤を祖とする藤原北家閑院流室町家の号であり、「流」とは、「宿紙表

紙薫方」が「四辻家代々相伝之双紙」と同じ源流にさかのぼる伝本であることを意味すると考えられた（以上、解題15・16頁、人名家名等解説89―91頁「四辻家」）。

「宿紙表紙薫方」には正式な書目が付いていなかったらしく、跋文等も見当たらないが、末尾に合香家三条家の秘伝書において珍重された後土御門院御製が記される。書中には三条家の著名な合香家（後白川右府、龍翔院）が考案ないし所持したとされる薫物方も複数点含まれる他、「四辻家敷」と注記される「家方」及び「家の方」も散見する。

以上の特徴から、「宿紙表紙薫方」とは、元は三条家の秘方秘説の類纂が四辻家に伝来したものを源泉としており、同家において独自の工夫をほどこされた薫物方数点を交えて再編されて、「薫物秘蔵抄」類纂者の手元に伝わった可能性が考えられた。また、「薫物秘蔵抄」を増補する最終段階において、「宿紙表紙薫方」から表紙を取り外して「薫物秘蔵抄」に貼り継いだ際に、本書の原型と素性を記し留める目的から、類纂者が冒頭の余白に「宿紙表紙薫方 四辻流也」と加筆したものと想像された（16―18頁）。

「薫物秘蔵抄」において、秘方秘説の相伝系統を意味して書かれたと考えられる「流」の語の用例は、右の一例しか確認することができない。ただし、「薫物秘蔵抄」と共に今出川家に伝来した薫物諸書の本文には、「三条ノ流」や「勅作中院等ノ流」、「勅中ノ流」、又「誰ノ流」として、合香家三条家の他に天皇家や公家の中院家等による薫物の「流」も存在した可能性を伺わせる記述が残されている（注二八）。

薫物以外の諸芸において、師弟関係を流派の概念と樹形図により体系化することは、古くから行われてきた。例えば、今出川家の家職であった琵琶を始めとする音楽の分野においては、奏法の伝来する流れを樹系図によって示した相承血脈が江戸時代にも書き継がれている。また、公規は靈元朝の和歌御会や飛鳥井亭歌会に度々出詠しており、教養の一環として和歌の習得と創作にも力を入れたと考えられるが、例えば『古今和歌集』の秘事の教示を「秘説相承」と称して行う古今伝授においても、江戸時代には複数の流派が形成され、代表的な宗匠の家名を冠して「〱流」、「〱派」と称していた。公規は、音楽や和歌等の教養を身に着け、上層社会におけるそれらの催しに参加する中で、それぞれの分野における流派の概念や表現についてもよく理解していたものと想像する。

「薫物秘蔵抄」等における「流」の語の用例は、当時の社会に薫物のいわゆる〈宗匠〉が複数存在した可能性を示唆している。薫物の処方や調合法の内、平安時代の著名な合香家によるとされるものは、当時から上層社会に流布していたとされる。江戸時代前期の秘伝書に伝わる平安時代の古い処方や説は、『源氏物語』梅枝巻に名前のある合香家にゆかりの品がほとんどであり、秘伝書ごとの内容にはほとんど差が見られない。これに対して、室町時代以降に考案されたと見られるいわゆる新作薫物については、種類が多様化した上に、処方や調合法において「秘中之秘」等と称して独自の説を立て、それらを珍重することが行われ

ていたようである。

平安後期から江戸時代前期までに類纂されたと伝わる薫物諸書において、薫物の秘方秘説を（宗匠）ごとに分類し、それらを時代と伝授の流れに添って系統立て、並列させて体系化するといった試みは、管見に確認できていない。ただし、薫物の相伝血脈を「流」の語により説明することが、秘伝書の中で一度も行われなかったというわけではない。『薫集類抄』（注三）裏書勘物における次の記述には、八条宮本康親王から源公忠と平随時へ伝来したとされる秘方秘説の相承経路と両者の技能の共通点及び相違点について、「流」と「派」の語により説明されている。

凡合香法、管窺輩多称_二其能_一、然頗得_二其道_一者、公忠朝臣、随_二時朝臣等也、公忠者伝_二典侍直子説_一称_レ雄、随_二時者以_二八条李部王之孫_一得_レ名、此兩人、其流雖_レ同、其派猶異、口説相違、手法相乖、公忠先搗_二諸香_一作_レ散、和合後、以_二龜羅_一篩、号曰合篩、々訖入_二煎蜜_一更和合良久、研黏、取_二入鉄臼_一、搗三千許杵、搗了、斤定、知_二蜜員数_一、取出如_レ丸入_二瓷壺_一、埋七日。随_二時亦春_二諸香_一、和_レ蜜了、春無數、以_レ多為_レ能、埋如前法、亦公忠熟鬱金代用_二麝香_一、随_二時以_二黄鬱金_一通用。其説非_レ一、其論難_レ定。今見_二拾遺本草_一、随_二時所_レ陳、々以相違。亦大唐僧長秀云、熟鬱稿鬱金花、和_二白蜜_一所_レ作之物也、云々。見_二此兩種、其不_レ同也、非_レ可_二通用_一、云々。

（『薫集類抄』裏書勘物F、下巻「合和」説紙背）

「流」は（ながれ）、「派」は（わかれ）を意味する。公

忠の母とされる滋野直子朝臣は、合香家八条宮の薫物方を写して皇室に献上したとされる人物である。また、随時の父雅望王は八条宮の御子であるから、随時は宮の孫にあたる。両者とも、秘方秘説又は血筋において八条宮にさかのぼる家系であるから、「流」が同じと云われるが、両者の合香の口説と手法には隔たりがあるので、「派」が異なると説明されているらしい。

また、室町時代に合香家として顕著な活躍を見せた轉法輪三条実香の類纂と伝わる秘伝書の卷末等には「当家薫物御伝授事」と題された記述があり、同家の歴代当主から秘方秘説の伝授を受けたと伝わる皇族、貴族、武士の名前が列举される。

這方者当家所伝之秘本也

当家薫物御伝授事

¹ 後堀河院以来御代々殊当御代者

² 天文式季十一月中旬父子令参 内裏

口伝等奉 伝授畢

「（二〇丁表）

³ 伏見殿

中務卿宮 青蓮院宮⁴

右外

普光院殿 御内書有之⁶

慈照院殿 同⁷

惠林院殿 同 金玉猶有之⁹

畠山 ト山

同^ニ 左衛門佐 能登守護

大内^ニ

多々良 義興

「(二〇丁裏)

〔「薫物相承次第」、一冊、写本、享和元年写、甘露寺家旧蔵、内閣文庫所蔵、請求番号 199-0291〕

〔注〕 1 後堀河院―第八六代後堀河天皇。建暦二(一二一二)年生、文暦元(一二三四)年崩。承久三年から貞永元(一二三二)年に在位。後堀河朝の三条家当主は従一位白川右府実親(建久六(一一九五)―弘長三(一二六三))。

実親は、『薫物故書』(注三)等の伝承に同家の薫物の祖として位置付けられる。 2 天文式季十一月中旬―天文二(一

五三三)年一月中旬。ただし『言継卿記』及び『御湯殿上日記』は、轉法輪三条実香(人名家名等解説 77―79頁「轉法輪前左府」、公頼父子が後奈良院の御前に伺候して薫物

「黒方」を調合し御相伝に及んだ期日を同年一〇月一九日として伝える。 3 伏見宮中務卿宮―伏見宮家当主で中

務卿に任じた人物。堀河朝から三条公敦、実香父子以前の時代に合香に関する逸話の知られる人物に、伏見宮六代貞敦親王(人名家名等解説 87・88頁「妙莊嚴院」)がある。 4

青蓮院宮―青蓮院に入室して門跡となった親王。堀河朝から三条公敦、実香父子以前の時代に合香に関する逸話の知

られる人物に、後柏原天皇皇子尊鎮入道親王(永正元(一五〇四)―天文二〇(一一五五〇))がある(注二九)。 5 普

光院殿―室町幕府第六代將軍足利義教(応永元(一三九四)―嘉吉元(一四四一))。義教が三条家から薫物を相伝したとする史実や伝承は探索中。轉法輪三条家を嫡流とする三条家と義教との関わりについては本稿附録「『薫物秘蔵抄』

人名家名等解説」(91―95頁)に概要を記しており、そちらを参照されたい。 6 御内書―室町時代以降の將軍家から内々に出された文書。ここでは薫物の伝授に関する内容

のものを云うらしいが、それについての史実や伝承は確認できていない。 7 慈照院殿 同―室町幕府第八代

將軍足利義政(永享八(一四三六)―延徳二(一四九〇))。「同」とは御内書が存在したと云う意味であるうが、それについての史実や伝承は確認できていない。 8 惠林院

殿 同―室町幕府第一〇代將軍足利義材(義尹、義植とも)。

三条家による類纂と伝わる薫物書の伝写本やその逸文と伝わる中には、明暦九(一五〇〇)年四月上旬、周防在国中の「槐下桑門宗空」又は「龍翔院」こと轉法輪三条公敦(人

名家名等解説 91―97頁)が「尊命」により薫物の秘方等を伝授して和歌を贈答したこと、また、続いて五月一三日付

けにより、「義尹」が以上の伝授と贈答の経緯を記したと見られる「御内書」が、公敦との間で授受された旨の識語が記される(注三〇)。 9 金玉―秀歌。ここでは前述の惠

林院による和歌(8)を云うのであろう。 10 畠山 ト

山―「ト山」は河内守護畠山尚順(尚慶、尚長とも。文明

七（一四七五）、大永二（一五二二）の号。大内義興（12）らと協力して足利義植（8）の將軍復職に尽力した（注三一）。

11 同 左衛門佐 能登守護―代々左衛門佐に任じた能登畠山氏の嗣子。薫物に関係した動静の知られる人物に畠山義総があり、後奈良院から名香「蘭奢待」と薫物を下賜されており、享禄元（一五三〇）年閏九月二日及び同三年六月一八日にはそれぞれに対しての御礼金を献上している（注三二）。義総の薫物の伝授に関する史実や伝承は探索中。

12 大内 多々良義興―周防守護大内義興（文明九（一四七七）、享禄元（一五二八））。文明一八（一四八六）年三月、周防滞在中の轉法輪三条公敦は三条家伝来の『御注孝經』に跋を書いて亀童丸こと大内義興に与えたとされる（注三三）。三条家による類纂と伝わる薫物書の伝写本やその逸文に伝わる伝承によれば、公敦は、後土御門天皇に薫物を伝授するにあたって賜ったとされる「宸翰の奉書」を、義興父政弘に懇望されて遣わしたと云う（注三〇拙稿）。

「当家薫物御伝授事」と題した右の記述は、天文一一（一五四二）年に入道前太政大臣こと轉法輪三条実香が書写したとの跋文が伝わる内閣文庫所蔵「薫物相承次第」（29頁）、及び幕末の彦根藩主で將軍家大老を務めた井伊直弼の自筆と鑑定される彦根城博物館所蔵の茶書「茶道下留」に伝来する（注三四）。内容は、三条家が後堀川院以来の歴代天皇に對して薫物を伝授して来たこと、殊に「御当代」こと後奈良院には「天文式季十一（ママ）月中旬」に実香と公頼の

「父子」が内裏に参上して口伝等を伝授し奉り終えたことを冒頭に記し、続いて親王二名と足利將軍三名、守護三名の呼称を列挙し、これらの人物に三条家から伝授を行った由を記したものと解釈できる。三条家による伝授に限って簡条書き形式で皇族、將軍、守護の順に相伝者の人稱を列挙したものはあるが、相承血脈に准ずる内容とは言えそうである。

史実や伝承において、轉法輪三条家が室町時代に天皇や將軍を始めとする有力者に薫物を伝授したとされることについては既に確認した。また、轉法輪三条家の直系が断絶した時期には、同家から伝授を受けた天皇が皇子等に薫物方を伝授しており、また、正親町三条家や三条西家等の親族らが、他家に對して薫物方の伝授を行うこともあった。こうした状況は、轉法輪三条家という、いわば薫物の「宗匠」が不在であつたことにより、正統継承者である皇族や同じような方説を伝える親族らによる伝授への期待が高まつた為に生じたものと考えられた（人名家名等解説71・72頁）。室町時代には、轉法輪三条家だけでなく、皇室や正親町三条家、三条西家といった複数の合香家が薫物の（宗匠）としての役割を果たしていたのであり、薫物文化圏においては、「流」の語をあてはめて体系化するだけの要素が揃っていた、と言えそうである。

「薫物秘藏抄」の「四辻流」や、「万方」における「勅作、中院流」等といった諸流が実際に存在し、当時の合香家の間でそうした呼び方や体系化が一般に行われていたのか、

それとも、「薫物秘蔵抄」と「万方」を類纂した可能性のある今出川家において、江戸時代の一時期にある人物の思いつきによって私的に行われた表現であったのか、という問題については、「四辻流」の検証も含めて、稿を改めて詳しく考察したいと考えている。

結

京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薫物秘蔵抄」一巻は、少なくとも上下二巻から成る薫物の伝書として構想されたものの一巻であり、処方为主体とした内容による本書は上巻に、調合法や薬種を主体とした同文庫所蔵「薫物合様」一巻は下巻に位置するものとして類纂された可能性が高い。また、下巻については跋文に寛文六（一六六六）年一〇月二三日に権大納言公規こと今出川公規が書写を終えたと思われることから、上下巻ともに右の期日以前に類纂と浄書が一旦終了されたものと推測される。ただし、上巻であるかもしれない「薫物秘蔵抄」には、寛文六年の二年後に後半以降の内容の一部が取り除かれた後に、別の書本の料紙を貼り継ぐことによる増補が行われた他、増補された料紙を含む全体の余白や紙背において、方と説が書き加えられた可能性が認められる。以上の考察結果から、上巻は下巻よりも試行錯誤の段階が長く続いていたものと考えられた。

東京大学史料編纂所蔵徳大寺家本「公規卿記」によれば、公規は、禁裏官庫の損失を補い得る程の資料的価値を備えた薫物の伝書を所持しており、禁裏に対してそれらを

進上することにより、宸翰及び宸筆の薫物書を下賜される榮譽に浴したと云う。薫物や医薬を実際に調査することもままあり、そうして完成した薫物を所望する者もあったと云う。右の勅筆の内容の一部は抜書きされて「薫物秘蔵抄」に類纂された可能性が考えられる。

公規は、薫物の貴重書を所持して合香の故実に精通するのみならず、香薬を調査する確かな腕前と繊細な嗅覚の持ち主でもあったらしい。公規を「薫物秘蔵抄」の書写者と見なした鑑定結果の蓋然性は極めて高いと言えよう。

近世前期の今出川家は、当時の公家社会において合香の名家としての業績を残したものと評価したい。菊亭文庫に伝来した薫物資料群は、特に公規による薫物書蒐集及び合香活動の名残をとどめる品々であった可能性が高い。また、「薫物秘蔵抄」を始めとするこれらの秘伝書は、江戸時代前期の上層社会に薫物の複数の流派と宗匠が存在した可能性を示唆する点において、極めて重要な資料と言える。以上の可能性の検証とともに、「薫物秘蔵抄」の成立の問題を説明するには更なる資料の探究と整理が肝要であり、引き続き取り組みたい考えである。

注

(1) 『京都大学附属図書館六十年史』(京都大学附属図書館編・発行、昭和三十六年、京都大学附属図書館ホームページに転載、<http://edlib.kulib.kyoto-u.ac.jp/60his/MOKUJI.html>、平成二七年二月九日最終閲覧)によれば、菊亭家から京都大学附属図書館に対して、大正一〇年から昭和二七年までの間に次の通り寄託されている。

- ・大正一〇(一九二一)年 図書八七二部・一三二六冊
- ・同 一二(一九二三)年 図書三八部・四三冊、文書八二二部 (以上、図書九一〇部一三六九冊、文書八二二部)

また、同図書館情報サービス課による「Library Service News」八二号によれば、右の寄託資料以外にも次の資料が購入され、普通書として同付属図書館に配架されたことが報告される。

- ・昭和二七(一九五二)年 資料一・二点・九八八冊

なお、菊亭家旧蔵書の概要については右の参考文献を含む次の報告及び先行研究に学んだ。

目録

- 1 『専修大学図書館所蔵菊亭文庫目録』、専修大学図書館編・発行、平成七年
- 2 田中幸江「専修大学図書館蔵「菊亭文庫蔵書目録」書名索引(稿)」、『専修国文』、第八〇号、専修大学日本語日本文学会、平成一九年
- 3 大田暁子「ケンブリッジ大学図書館所蔵の菊亭家旧蔵雅楽関係資料 目録 其ノ二」、第三七号、東京音楽大学、平成二五年

調査報告／解説

- 4 『京都大学附属図書館六十年史』(前出)
- 5 『国史大辞典』(「菊亭家文書」の項)、吉川弘文館、昭和五四年
- 6 『旧華族家史料所在調査報告書』、本編一―四及び附編、学習院大学史料館編・発行、平成五年
- 7 平井誠二、新刊紹介「学習院大学史料館編『旧華族家史

料所在調査報告書』(全五冊)」、「『史學雑誌』、第一〇三号、平成六年、Cinii Articleに転載、
http://ci.nii.ac.jp/els/110002361736.pdf?id=ART0002610322&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=142346896&cp=、平成一七年一月九日最終閲覧

- 8 「Library Service News」No.82、京都大学附属図書館情報サービス課編・発行、平成一三年一二月、京都大学附属図書館ホームページに転載、
<http://www3.kulib.kyoto-u.ac.jp/LSN/LSn0112/LSN.html#kiji9>、平成一六年一月一六日最終閲覧)

- 9 太田暁子、科学研究費助成事業(科学研究費補助金)研究成果報告書「ケンブリッジ大学所蔵の菊亭家旧蔵雅楽関係資料に関する調査研究」、平成二四年、科学研究費助成事業データベース(KAKEN)掲載、
<https://kaken.nii.ac.jp/pdf/2011/seika/C-19/32646/21520129seika.pdf>、平成一七年一月九日最終閲覧

- 10 田中幸江、科学研究費助成事業(科学研究費補助金)研究成果報告書「菊亭家とその蔵書に関する研究」、平成二四年、科学研究費助成事業データベース(KAKEN)掲載、
<https://kaken.nii.ac.jp/pdf/2011/seika/C-19/32664/20720060seika.pdf>、平成一七年二月九日最終閲覧

学術研究論文

- 11 福原紗綾香「東京国立博物館所蔵菊亭家旧蔵書について」、『MUSEUM』六二七号、東京国立博物館編、平成二二年
- 12 太田暁子「ケンブリッジ大学所蔵の菊亭家旧蔵雅楽関係資料について」、『研究紀要』、第三五号、東京音楽大学、平成二三年
- 13 太田暁子「ケンブリッジ大学図書館所蔵の菊亭家旧蔵雅楽関係資料 目録 其ノ一」、第三六号、東京音楽大学、平成二四年
- 14 田中幸江「江戸期の菊亭家当主の日記『公規公記』について―今出川実種による蔵書整理と書写活動―」、『専修国文』、第九〇号、専修大学日本語日本文学文化学会、平成二四年、専修大学学術機関リポジトリ転載、
<http://id.nii.ac.jp/1015/00003314/>、平成二七年二月九日最終閲覧
- 15 田中幸江「今出川公規と禁裏の楽器・楽書について―専修大学図書館蔵『公規公記』の記事から―」、『論集 文学と音楽史―詩歌管弦の世界』、研究叢書四三七、磯水絵編、和泉書院、平成二五年

(二) 京都大学附属図書館菊亭文庫に雑文書として分類される香道書のうち、薫物の伝書としては次の五点三冊二軸を確認している。

- 1 薫物相伝次第、一冊、菊々24
- 2 たき物のほう、一冊、菊々25
- 3 薫物方、一冊、天正一七年、菊々33
- 4 薫物合様、一軸、寛文六年、権大納言公規、菊卷109
- 5 薫物秘蔵抄、一軸、今出川公規自筆、菊卷110

専修大学図書館菊亭文庫には二一点四卷六冊一一枚から成る香道書を収蔵する(『専修大学図書館所蔵菊亭文庫目録』、注一の1)。それらの内一点一枚を除く次の資料は、薫物の伝書や覚書、材料となる香具及びその調合にも使用される香道具の記である。

- 1 万方、一冊、写本、第2函118、マイクロー連番164
- 2 香具撰様調様、一冊、第2函119、マイクロー連番165
- 3 薫物調合之事上 巻物ノ写、一冊、第2函120、マイクロー連番166
- 4 薫物相伝次第、一冊、第2函121、マイクロー連番167
- 5 薫物故書、一冊、第2函122、マイクロー連番168
- 6 香道具、一枚、第2函123、マイクロー連番169
- 7 薫衣香方、一枚、第2函125、マイクロー連番171
- 8 本方両副(剂力)、一巻、第2函126、マイクロー連番172
- 9 寛文十年合葉之事、一冊、第2函127、マイクロー連番173
- 10 延宝八年二月卅日三月三日四日調合、一枚、第2函128、マイクロー連番174
- 11 天和二年十月調合之覚江戸、一巻、第2函129、マイクロー連番175
- 12 貞享二年三月十三日江戸薫物調合之覚／同年惣上々ノ薫物之覚、一巻、第2函130、マイクロー連番176
- 13 元禄十三五六(匂袋)／元禄十三五十一(匂袋)、一巻、第2函131、マイクロー連番177
- 2 保志、一枚、第2函132、マイクロー連番178
- 伏見宮有明、一枚、第2函133、マイクロー連番179
- 〔吉野等〕、一枚、第2函134、マイクロー連番180
- 〔練香一覽〕、一枚、第17函152、マイクロー連番181
- 〔香一覽〕、一枚、第17函215、マイクロー連番182
- 潤舩肌香油、一枚、第2函135、マイクロー連番183

20 三条西殿たき物合やうの事 口伝、一枚、第2函157、マイクロー連番198

(三) 『薫物故書』の所蔵情報は注二の5参照。解題とテキストは拙著『薫集類抄の研究・附・薫物資料集成』(三弥井書店、平成二四年)に掲載しており参照されたい。

(四) 富山市立図書館翁久允文庫所蔵「香道薫香今昔集」(792-ざは巻首題を「薫香今昔集」と云い、「菊亭内府公作」(以上、「二丁表」と伝わる。後者の情報については平成八年三月刊行の『翁久允文庫目録』に報告がある。)

内容は、『薫集類抄』以降の諸書に伝来した平安時代の著名な合香家の処方や説に、比較的新しい内容の薫物方や調合法を合写したものが見られる。巻末には文化三(一八〇六)年二月及び天保一三(一八四二)年十一月付書写者識語、並びに不明の花押一点が記載される。

「香道薫香今昔集」には冒頭から伝統的な処方や説が類纂されており、続いて新しい時代の方や説が記述される。内容から、伝統的な処方や説を前半部、新しいそれらを後半部として区別した場合、前半部の末尾に位置する部分に次の書写者識語を確認することができる。

右以後伏見院宸翰入書写畢

知恩院宮尊光法親王御本拝借之書写畢

延宝丁巳応鐘中旬

「(二八丁表)

〈訓読〉後伏見院宸翰を(借り)入れ書写しおはんぬ、知恩院宮尊光法親王御本を拝借し書写しおはんぬ、延宝丁巳(五年、一六七七)応鐘(一〇月)中旬。

右の識語を伴う前半部の内容は、「後伏見院宸翰薫物方」の書目で群書類等に収録される薫物書の記述に相当するが、群書類従本にはこの識語が伝わらない。加賀文庫には同じ内容と識語による写本が「後伏見院宸翰薫物方」の書目で伝来することから、「香道薫香今昔集」とは伝来の過程において比較的近い関係にあるものと推察されるが、その詳細については稿を改めて考察したいと考えている。

「知恩院宮尊光法親王」は後水尾法皇第一皇子知恩院宮門跡で、延宝五年には三三歳であった。「後伏見院宸翰薫物方」の諸本

の内、書目を「香道薫香今昔集」と云い「菊亭内府公作」の伝承とともに新たな時代の処方や説を伴うものは、管見に翁久允文庫の一本のみである。

(五) 本稿では、平安時代に類纂されて後の時代の薫物書の古典的規範として位置づけられるであろう『薫集類抄』等に記載される銘の薫物に対して、室町時代中期以降の公家の日記や秘伝書に記載され始める新規な銘の薫物を、「新作薫物」と呼ぶ。新作薫物については次の拙稿に管見によるところの成果をまとめているので参照されたい。なお、本間洋子の近著『中世後期の香文化…香道の黎明』（思文閣出版、平成二六年）には、室町時代中期から戦国時代にかけて活躍した公卿三条西実隆の日記『実隆公記』において、複数の新作の銘とその贈答などが記録されることについて、報告と分析結果が紹介されている。

(六) 「改正増補諸家知譜拙記」五巻の内の二巻、国立国会図書館所蔵、請求記号 288.2-Tu793s-(t1)。国立国会図書館デジタルコレクション収録、<http://dl.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/2603236?tocOpen=1>、平成二七年二月一〇日最終閲覧。

(七) 『諸家伝』（日本古典全集）、『公卿補任』（新訂増補国史大系）及び『菊亭家譜』（大日本史料データベース）に知られる今出川公規の家系及び閥歴は左記の通りである。なお、閥歴は『諸家伝』を基として『公卿補任』によりこれを校勘し、それらに記述の無い事跡について『菊亭家譜』より補った。

公規「視イ」
右大臣（今出川）経季公男、実（徳大寺）公信公二男、
林院右大臣、母氏家内膳女（同（徳大寺）実経（※）公イ）

※実経は実経（元名実保）の誤り。『諸家伝』徳大寺実保条に「母武士吉川内蔵助藤原廣正女」とある。以下、傍線は稿者記入。

寛永一五（一六三八）年正月一二日誕生。

正保二（一六四五）年正月六日従五位下。八歳。

慶安五（承応元、一六五二）年一〇月一二日叙従五位上。同年一月一二日任侍従。一五歳。

承応二（一六五三）年正月五日叙正五位下。同年十二月一三日聴禁色。同日元服。同月二九日「異説に二月九日と」叙従四位下。一六歳。

同 三（一六五四）年正月一日任左少将。同年十二月二六日「異説に二一日と。」転左中将。同月二八日叙従四位上。一七歳。

同 四（明応元、一六五五）年七月二五日叙正四位下。一八歳。
万治二（一六五九）年十二月二日「異説に正月五日と。」叙従三位。中将如元。二二歳。

同 三（一六六〇）年「異説に二年と。」十二月二四日任権中納言。二三歳。

同 四（寛文元、一六六一）年正月一日勅授帯劔。同日奏慶着陣。二四歳。

寛文三（一六六三）年正月一二日「異説に六日と。」叙正三位。二六歳。

同 四（一六六四）年五月一日任権大納言。同年二月春日祭上卿。踏歌節会外弁。外宮仮殿正遷宮等日時定上卿。二七歳。

同 五（一六六五）年元日節会外弁。二八歳。

同 六（一六六六）年白馬節会続内弁。東照宮奉幣発遣日時定上卿。例幣上卿。同年辞伝奏。依輕服也（諸家伝菊亭家譜）。同除服出仕（諸家伝菊亭家譜）。二九歳。

同 七（一六六七）年元日節会外弁。踏歌節会続内弁。三〇歳。

同 八（一六六八）年十二月二日叙従二位。白馬節会外弁。復辟宣下上卿。三一歳。

同 九（一六六九）年八月二七日為幸仁親王家勅別当。踏歌節会外弁。座主宣下上卿。三二歳。

同 一〇（一六七〇）年踏歌節会外弁。三三歳。

同 一一（一六七一）年九月一九日為幸嘉親王家勅別当。元日節会外弁。踏歌節会外弁。三四歳。

同 一二（一六七二）年白馬節会外弁。三五歳。

同 一三（延宝元、一六七三）年十二月二六日叙正二位。元日節会外弁。親王宣下上卿。三六歳。

延宝三（一六七五）年内裏上棟日時定上卿。三八歳。

同 四（一六七六）年踏歌外弁。三九歳。

同 五（一六七七）年元日外弁。

同 六（一六七八）年一〇月一九日為秀憲親王家勅別当。同年一月一九日兼右大将。元日外弁。四一歳。

同 七（一六七九）年十一月二二日拝賀。同年十二月二五日「異

説に二九日と。諸家伝菊亭家譜」為右馬寮御監。四二歳。

同 八（一六八〇）年白馬外弁。東照宮奉幣發遣上卿。將軍宣下上卿。遺詔奏上卿。四三歳。

同 九（天和元、一六八一）年石清水放生会宣命奏上卿。四四歳。

天和二（一六八二）年九月一日輕服。同年一〇月一二日除服出仕（以上、大日本史料所引菊亭家譜）。同年十一月十八日転左大将。（諸家伝菊亭家譜）。同年一二月二日為朝任親王家別当。白馬節会内弁。内

宮山口祭日時定上卿。四五歳。

同 三（一六八三）年正月五日為左馬寮御監（諸家伝菊亭家譜）。同月

一三日任内大臣。同日大将還宣旨（左大将如元）。踏歌節会外弁。内宮上棟日時定上卿。立太子節会外弁。石清水放生会上卿。同年一二月八日輕服、妻（大日本史料所引菊亭家譜）。四六歳。

同 四（貞享元、一六八四）年正月二九日叙服出仕（大日本史料所引菊亭家譜）。同年七月二一日喪、実父入道左大臣。九月一二日除服出仕（大日本史料所引菊亭家譜）。同年一〇月（九月）諸家伝菊亭家譜」一日辞左

大将。同月一〇日賜隨身兵杖（大日本史料所引菊亭家譜）。同年十一月一

九日（二〇日）諸家伝菊亭家譜」辞内大臣。四七歳。

元禄五（一六九二）年正月二七日服解、実母（大日本史料所引菊亭家譜）。同年一二月一三日任右大臣。同月二五日賜隨身兵杖。同日奏慶

着陣。五五歳。

同 六（一六九三）年三月二二日除服出仕（大日本史料所引菊亭家譜）。同年八月七日辞右大臣。同年一〇月二三日從一位。五六歳

同 七（一六九四）年七月一〇日輕服、姉、同年八月二八日除服出仕（大日本史料所引菊亭家譜）。同年一〇月二三日叙從一位。五七歳。

同 八（一六九五）年七月三日除服出仕、去六月二二日岩防州姨死（大日本史料所引菊亭家譜）。五八歳。

同 一〇（一六九七）年一〇月二五日薨。六〇歳。号一林院。同月二九日葬本国寺（諸家伝菊亭家譜）。

（八）『二条家譜』二条光平条に「慶安五年二月九日辞右大臣、依仰辞之、前権大納言藤原経季所劳危急之間為被任也」とある

（東京大学史料編纂所大日本史料データベースより）

（九）『宣順卿記』七月七日期に「自大樹武家両伝奏へ強力米

五百俵給、毎年、難波百石、菊亭三百石加増」とある。

（東京大学史料編纂所大日本史料データベースより）

（一〇）解題 8 頁以降、及び注一二に引用した「公規卿記」釈文を参照されたい。

（一一）妙源院の動静については当時の岩国領関係資料に記載のあることが報告される。樹下文隆「江戸初期岩国能楽記録稿（二）」（『国文学研究資料館調査研究報告』、第一七号、二二三、二六八頁）参照。

（一二）徳大寺家本「公規卿記」寛文六（一六六六）年五月九日条によれば、吉川広正の訃報を携えた飛脚が徳大寺家に到来し、今出川家の公規に知らせが届いたと云う。公規は服喪の日数を検討するとともに、翌一〇日には徳大寺家奥方へ供養の品を届けている。

（五月）

九日 己丑 霽 今朝広橋弁（殿）柳原弁烏丸頭弁へ遣使了子細前記之吉川

内蔵助逝去云々所驚入也

由徳大寺 予本性之母方之祖父也白川へ尋遣処

日云々今日行向西園寺殿

十日 庚寅 霽 今日徳大寺奥方へ為吉川内蔵助吊行向不及対面

御出入無用之由右府被申之由取次之者所申也抑吊之義昨夜可来之所有子細而今日迄延引了前記之

（中略）

（「公規卿記」第八冊、東京大学史料編纂所所蔵徳大寺家本、41-17-07）

徳大寺家本「公規卿記」寛文一一（一六七一一）年日記とされる一冊は、実は今出川家の家札と見られる人物が書き手と推定される内容であり、同家の主である「大納言殿」こと公規の動静を中心とした出来事が細かに記録される。この為、武家の親族とのやりとりについて、公教を筆者としたと見られる他年の日記の条よ

りも詳しく記されており、参考になる。例えば、正月一〇日条によれば、同日に吉川広正男広嘉より今出川家の表向きと奥向き宛に祝儀の品が届いている。また、同年二月九日には、広嘉と公規実母の姉妹と見られる「妙源院」からも年頭の祝儀が届いている。

(正月)

十日 亥 天晴風吹

やすいつねへ半介御使に來ル御いんしん有水本まいられ御対面
今朝日野大納言殿ふ使明昼少御出被成候様ニさい

わいよきついて有し間夕供御まいりし程ニと申來ル今城殿ふ
帶劔御返し也夕供御過ニ仏地院殿御出奥ふさかつき出シ

いわみ申おつつけかへり日暮時分安井つねより使園供

まいる吉川監物殿よりおもておくへしうき文まいる

(中略)

「(六丁裏)

(二月)

九日 卯 天晴風吹昼より晴曇不定時々雨降

今朝本国寺より大慈院其外坊主共御濟ニまいり

つとめ有転聞一条殿御内宝昨日御はてのよし也大納言殿

「(一五丁表)

本国寺へ御唐参それよりなるたき三宝寺へも御まいり八つ過ニ
御かへり五辻殿よりいつそや御かりし物之本ふんこニ入まいる久我
右府公より歌仙色紙たのみニまいる今城殿より香具ふ

るいかりニ参則御かし候也岩国妙源院様より年頭の祝儀多まいる

〔「公規卿記」第一〇冊、東京大学史料編纂所所蔵徳大寺家本、

41-17-09)

右のような季節の祝儀や見舞等は、吉川家からだけでなく、養母の実家である丸亀藩京極家からも今出川家に贈られたことが分かっている。寛文一一(一六七一)年正月一五日に洛中で大火が発生した際には、同年二月五日、丸亀から見舞の飛脚が今出川家に参上し、大火によって被災した近衛家への見舞を届けている。飛脚は二日ほど洛中に逗留した後、七日に丸亀へ帰されている。また、翌八日には丸亀から別の飛脚が上洛。慶安五(承応元、一六五二)年二月一〇日に急逝した、先代の今出川家当主経季の祥月命日より上らせたものらしい。一日には、岩国の広嘉と妙源院から「大納言殿」宛に、火災に遭わなかったことを喜び労う見舞の文が届いている。

(二月)

五日 天晴

「(一三丁裏)

今日五つ時分上使参内故大納言殿にも禁中へ御まいり

昼時分之経師以後より御経ノ下地まいる飛鳥井殿より

昨日之歌なをしまいる昨日の官位成の一通今日大内記大外記へ

一通御つかわし也持明院殿へ懷紙見せニまいる御返事有飛鳥井殿へ

日暮時分ニ御出也今夜の懷紙ノ歌 春風先発花中梅

のとけしなはる風ゆるきそのうち

まつさきそむる梅のにはひは

如此也圓かめより見まひの飛脚まいる近衛殿の火事見まい也

(中略)

七日 曇

今日本国寺よりいつもことくかくしんときニまいるよし野へ

飛脚まいるまるかめのひきやくこん日かへす也松木大納言殿

より聖唐御法楽之歌ノ題ならひニ而月次之歌題まいる

澤若葉 暮春藤 御月次之題来共四日

朝落葉 聖唐之御法楽 来共五日如此

申まいる

野宮殿より使まいる●とい頼申候歌仙被遊被下候様ニと申来
御へんしニは此中少御用之事候て御書付候はすやかて此方より書
付にて被遣候はんよし也今日吉野へ飛脚まいる

八日 庚寅 曇朝少雨降昼より又夜ニ入テも雨降 一(一四丁裏)

橋本中将より切紙いつそや借申源氏永々扱借●存候唯今

返申由源氏抄一冊参請取也禁中より水無瀬宮御法楽

歌之題参うけ給は松木大納言かよし申まいる題は

秋旅 来廿二日 如此也今日あたこへおもてより庄助奥

又はつまいらする也子細四日晚方座へ鴉おちて死申候故

屋敷之内に鴉死申候へはあたこ山へ人まいらする物よし人に申

故にて右之通なり火なんつゝしみの為也飛鳥井殿より宮を

たのみにまいる使也明日之小番昼夜御●相番中へ申来

故右府経季公の御しやう月ゆへ也圓かめ 飛脚上ル此方のも帰上ル

(中略)

十一日 癸巳 天晴

松木大納言殿より御当座之和歌御会ふれ折

紙まいる十六日辰刻ニ御まいり有へきのよし申参

庄助日野殿へまいり●●請取かへる也今日匂袋

御手合也吉野より飛脚かへり返事共まいる徳左府様より

御使今日御出候はんと昨日仰こし候さいわい小倉中納言殿この方に

御入候間御出候へのよし也御へんしには唯今は少用之事候まゝ

暁ほと御出候はんよし申参小倉殿へも御事つて申まいる岩国

妙源院様より近所火事こと候へとも何事なくめてたきとの御

悦の文まいる監物よりも大納言殿へ文まいる日暮時分
徳大寺殿へ御出也夜五つ時分御帰
(中略)

一(一六丁表)

また、同年五月三日条には、岩国の吉川広嘉から端午の祝儀が、
妙源院から文が到来。丸亀の京極備中守高豊からも、今出川家の
表向きと奥向きに宛てて、端午の祝儀と文が届いている。

(五月) 三日 丑 晴曇不定昼少雨降

吉川監物殿より端午之祝義参妙源院様よりも文

まいる鳥丸宰相殿より色紙まいる京極備中守殿

よりいつものことく端午之祝義文おもて奥へまいる原田

民衛門使ニまいり平松宰相殿日光よりのほられ候よしにて使被遣也

一(二九丁裏)

「公規卿記」第一〇冊、東京大学史料編纂所所蔵徳大寺家本、
41-17-09)

41-17-09)

(一三) 『新訂寛政重修諸家譜』参照。既刊二八冊、高楊光寿

監修、続群書類従完成会、八木書店、昭和三九—平成二四年

(一四) 『諸家伝』(全四冊、正宗敦夫編纂校訂、日本古典全書、

日本古典全書刊行会、昭和一一—一五年)及び『寛永諸家系図伝』

(全七冊、日光叢書、日光東照宮社務所編、平成元—三年)参照。

(一五) 東京大学史料編纂所所蔵徳大寺家本「公規卿記」第五

冊(無題)、請求記号・徳大寺家本 H-17-04。本冊は表紙に「慶

安元」(一六四八)年と直書きされ、表紙の注箋に「寛文五年ノ記」

とある。書中の六月二九日条に吉良上野介の入洛、拝朝について

の記述があり、寛文五(一六六五)年の史実に一致。注箋に記さ

れた通り、同年の日記と見なすべきである。日記の冒頭には慶安

元年、同二年(東照宮三三年忌)及び寛永一七年(東照宮二五年

忌)の記を収録する。筆者は、寛文五年の東照宮五〇年忌に際し

て幕府から遣わされた上使に対する祝儀の要不要や内容を検討す

る必要から、先例を蒐集したか。

(一六) 新院こと後西院の兄弟姉妹の皇子女方をいう。

(一七) 徳大寺家本『公規卿記』寛文一一年日記として伝わる

この一冊は、この日記には、「大納言殿」と徳大寺家や吉川家との

近しい関係が記されており、今出川家の出来事を記録したもので

あるのは間違いない。一方で、他の年の日記の本文が漢文体

であるのに対して漢字仮名混じり文により筆記されており、「大納

言殿」と呼ばれる公卿の日々の行動が記されるほか、家僕と見ら

れる立場の人々の動静が詳しく記載される。また、筆者であるは

ずの公規から見て格下にあたる公卿らに對して「殿」や「様」の尊称を付けて呼びならしている。以上の特徴から推して、本冊の筆者は公規とは考え難く、おそらくは家僕のような立場にあつて、「大納言殿」に仕えていた可能性が考えられる。二月五日条の近衛殿の火事の記述などから、本史料が寛文一一年の日記であるのは間違いないことから、「大納言殿」は公規に比定する。

慶安元年の日記と伝わる『公規卿記』第五冊には、寛文五年に公規と思しき筆者が、東照宮奉幣に際して上洛する幕府の上使へ下される品物について検討を行う目的から、家僕山本奎助の日記を参照していたことが記されている。第一三冊の延宝二年条には、地下の身分の家礼が自身の官位について陳情した内容について詳しく書かれている。

寛文一一年日記として伝わる一冊は、当時の今出川家についての何事かを知る為、或いは公規自筆の日記の紛失等の事情により、公規自身ないしその後裔が家僕等の日記を参照しているうちに、公規の日記の一部として誤って伝来した可能性が考えられる。

(一八) 徳大寺家本「公規卿記」寛文一一年二月九日条の全文は次の通り。

九日 辛卯 天晴風吹昼より晴曇不定時々雨降
今朝本国寺より大慈院其外坊主共御濟ニまいり
つとめ有転聞一条殿御内宝昨日御はてのよし也大納言殿

「(一五丁オ)

本国寺へ御唐参それよりなるたき三宝寺へも御まいり八つ過ニ御かへり五辻殿よりいつそや御かりし物之本ふんこニ入まいる久我右府公より歌仙色紙たのみニまいる今城殿より香具ふるいかりニ参則御かし候也岩国妙源院様より年頭之祝儀多まいる

(「公規卿記」第九冊、東京大学史料編纂所蔵徳大寺家本、41-17-09)

(一九) 徳大寺家本「公規卿記」寛文一一年正月一〇日条には、今城殿について次のようにある。

十日 亥 癸 天晴風吹

やすいつねへ半介御使に來ル御いんしん有水本まいられ御対面

今朝日野大納言殿ハ使明昼少御出被成候様ニさい
わいよきついて有し間夕供御まいりし程ニと申來ル今城殿ハ
帶劔御返し也夕供御過ニ仏地院殿御出奥ハさかつき出し
いわる申おつつけかへり日暮時分安井つねより使園供
まいる吉川監物殿よりおもておくへしうき文まいる

「(六丁裏)

(「公規卿記」第一〇冊、東京大学史料編纂所蔵徳大寺家本、41-17-09)

(二〇) 徳大寺家本「公規卿記」延宝二年二月二〇日条の後文は次の通りである。筆者は管弦の練習において下毛野武忠が調子を務めたことに触れ、「内々語」として、「予」以下(傍線部)にその語る内容を聞き書きしており、「今日、云々」以後の記述は日記の筆者である公規の視点に戻る。

今日調子從五位下左近衛將曹筑後守下毛野

武忠^{初而}及位可上之由内々語^{当家}予^{家礼也}官者

右近衛府生^{父依為將曹不能}位階者六位上又^{將監申仍如此候}ハ

正六位下^ニ而も可申之由也此事正六位上ハ近代

有御吟味地下輩不能叙又正六位下も如何^父

^{ニ二代正六位上之例アリ雖然不甘}
^{心先任例可申上之由也}一条内府依為

右大將予家礼之(者?)隨身也仍調子左近將曹下毛

野武行ヲ相添右之條々又ハ予方ハ職事ハ願可

申哉但一条殿ハ被頼候之由申入了彼公留主

故帰了其後從彼公給使明日家礼隨身可参之

由也今日從中御門大納言年頭御使四月御法

事参向之公家地走人之書見遣給則書付又烏丸中納言へも見せ遣了 折紙也

年頭之御使御馳走

勅使 黒田甲斐守

両院使 九鬼和泉守

本院使 一柳山城守

四月御法事ニ付参向之公家衆御馳走

転法輪 京極備中守

中御門 ^{ダテ}伊達宮内大輔

菊亭 京極甲斐守 京極飛驒守子也

烏丸 九鬼大隅守

梶井御門侍 相馬出羽守

聖護院御門侍 小出備中守

竹内御門侍 嶋津飛驒守

(一行略)

「(膳写本七四丁裏)

〔「公規公記」第六冊、東京大学史料編纂所膳写本、2073-115-6-6。底本は「公規卿記」第一一冊、東京大学史料編纂所蔵徳大寺家本、41-17-12〕

傍線部には、下毛野武忠子で今出川家家礼と見られる「予」の官職、位階について、「予」の語ったところが記載されるらしい。「予」の父が将曹である為に「予」は将監になれなかった。位階は六位上又は正六位下にも叙されてしかるべきところが、近年の御吟味の結果、地下の者は正六位下に当らないと判断された。父親と子供が共に正六位上に叙された例もあるので、御吟味の結果とはいえ納得できないから、官職についても父と同じ将曹に任じられるよう申し上げたいのだ、という。

「一条内府」は大内大臣兼右大将正二位一条内房。二三歳。武忠子の視点による文脈であるが、筆者の位階が反映してか、一条内府への「殿」の尊称が欠けている。

武忠は、右近衛府生という職務上この右大将の随身を勤める必要があるため、公規の江戸下向には調子左近将曹下毛野武行(武忠嗣子で右近衛府生の兄弟か)が同行することになったようである。その上で、「予」こと武忠子は「右之條々(武忠子の陳情)を自ら職事に願い入れるべきかとも考えたが、一条殿(一条内府)から願い出ただけよう申し入れた。一条殿内府は留守であったためそのまま帰宅したところ、後になって内府から使があり、明日家礼は隨身に参上せよとの連絡を受けた、として聞書きは終えられている。

(二) 例えば、後水尾法皇皇女で近衛基熙室となった品宮常子内親王の日記『无上法院殿御日記』の次の条々には、禁中や法皇御所、近衛家等において行われたと云う合香活動が、丸括弧内に示した通り記録される。

左記の内主な活動については、瀬川淑子『皇女品宮の日常生活』『无上法院殿御日記を読む』(岩波書店、平成一三年)に紹介される他、拙稿「徳川林政史研究所蔵「薫物之方」翻刻」『薫物書の研究』、創刊号、平成二六年、
<http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/hju/metadata/12045>、平成二七年二月九日最終閲覧)注一七にも釈文を掲載した。なお、同じく

注六〇には、常子内親王の夫である近衛基熙が、後西院からお聞きしていた薫衣香方五種を、東山天皇の御前で調合した旨を記した『基熙公記』元禄一五年六月一日条釈文を掲載しているので、併せて参照されたい。

寛文一二年

三月二二日条(きん中御たき物調合あそはされ御てつたいにまいる、くろほう二あはせ玉椿二あはせ花たちはな二あはせ以上六あはせあそはさるゝ)

同月二五日条(法わうへ参たき物調合すしゝう五和はせ也)

同月三〇日条(右府たき物調合也)

四月一〇日条(きん中そらたきのたき物あはさるゝよしにてめしにたまはりまいりて調合す女一の宮の御かたもなる女御などもあはさるゝ)

同月一二日条(きん中へ法わう御幸なり(中略)姫君の御かたもなるこれはたき物調合二なり)

寛文一三(延宝元)年

二月二一日条(きん中へ御幸也ほし御てうかう御てんしゆの

御事成)

三月四日条(右府我身もたき物調合す)

同月九日条(右府たき物御てうかう也)

同月一二日条(右府たき物御てうかう也)

同月二六日条(右府たき物御てうかう也)

同月二七日条(けふもたき物調合也)

五月三日条(右府たき物調合也)

同月四日条(右府けふもたき物御調合也)

同月七日条(新院御てうかうの御にほひふくろはいりやうす
右府へもきのふたまはる)

六月一八日条(右府たき物調合也)

同月一九日条(右府たき物御てうかう也)

延宝二年
四月一九日条(たき物調合す)

延宝八年

四月八日条(戸田ゑちせんの守むすめかたへてうかうのにほ
ひふくろ三つ ねみたれかみ うてな 九重 此三色也此
内一つニハすきふくろ我身さいくニしてかくるすきふくろ
はすゝしの糸色くゝにそめわけたてすしたにゑようつくる
其ほかゑようハさまくゝにつくる也古代のもの也ひいふ二
隙いはの通隙かはつことのほかかたしけなかり)※これよ
り遠からざる時期に調合したか。

延宝九年

四月四日条(新院へまいる左府もおなしけふは御にほひふく
ろ御ちやうかうにて御手つたへにまいる)

同月二八日条(左府たき物ちやうかう也 仙人 荷葉 菊花 盧橘
常夏此五いろ也おひてよひにつかはしまいらるゝ)

同月二九日条(けふもたき物ちやうかう也 黒方 二葉 紅梅
三色也けふも又おひてまいらるゝ)

同年五月一日条(けふもたき物ちやうかう也我身もおなし 荷
葉 千種二色也)

同月二日条(けふもたき物ちやうかう我身もおなし 有明野風
ママ) 三色也)

同月三日条(けふもたき物ちやうかうすしゝう一色ほしもち
やうかうす)

六月八日条(にほひふくろちやうかうす 一さらしな 一うて
な 一九重一山ふき 一ねみたれかみ 此五いろ也御ひても
まいられ手つたへし給ふ)

天和三年
二月六日条(新院へまいるほしの御てうかうにて御手つたへ

す)

同月二四日条(新院へまいる内々たき物て(傍書…御て)うか
う有へきよしにてけふ御手つたへにまいる勅さくの御方我
身へ御さうてんあそはし下さるへきとの事にて三色あそは
しつけ御おくかきなど有をつたへ給はる誠にやうの事は
大事の御はうにてゆいじゆ一人へ御てんしゆ有なるを道
のめうかになひかたしけなき事中くおろかにはいふに
たらすすなはち此三色のうち梅花をまつくけふ御前にて
てうかうす何もくこまやかにくはしくをしへ給はりかた
しけなき事也残二色ハ又四五日中ニまいりててうかうすへ
きよし仰也御方ともけふはいりやうす左府もまいり給ふ)

同月二九日条(新院へまいる御たき物御てうかうの御手つた
へす我身も(日)とひの残の二色をてうかうすふじ 新枕
此二色也 いつれも御ひはうとものこらす御さうてんあそ
はし給はりかたしけなきいふにたらす)

三月六日条(新院へまいる御たき物御てうかうにて御手つ
たへす)

同月一四日条(新院へまいる御たき物御てうかうにて御手
つたへす左府もまいり給ふ亥刻程にかへる)

三月一八日条(新院へまいる御たき物御てうかう有て御手
つたへす左府もまいり給ふ御たき物すと(傍書…み)て御
座へならします)

同月二二日条(新院へまいる御たき物御てうかうにて御て
つたへす)

貞享二年
七月二四日条(にほひふくろちやうかうす さらしな うて
な ねみたれかみ 九重 山ふき)

貞享四年
五月二日条(内府もまいらるゝほうしうめいよひにほひふく
ろあはせ何かかきつけなとたのむくれ程にかへる)

同月四日条(一門ならしまし夕かたく御さうはんす我身た
き物てうかうす ころ方 野風二色也一門にもならひた
きよししよもうによりをしへまいらせあはせ給ふ内府も
まいられてうかう也)

元禄三年
一〇月二八日条(ひるたき物てうかうす黒方二あはせ野風二
あはせ也)

元禄六年
二月一三日条(たき物てうかうすくろ方三あはせ)

同月一四日条(たきものてうかうすくろ方三あはせ野風六あ

はせ也)

元禄七年

二月七日条(夕かたたき物てうかうす)

同月八日条(けふもたきものてうかうす)

同月九日条(たきものてうかうす)

同月一〇日条(けふもたきものてうかうすほしもてうかうす)

元禄八年二月七日条(たきものてうかうすくろはう五あはせ也)

同月八日条(けふもたきものてうかうすくろ方二あはせ野風六あはせほしも二あはせてうかうす)

(以上、東京大学史料編纂所蔵写本(全三六冊、2073-179-36-1(36)及び『天皇皇族実録』の内『靈元天皇実録』三冊・『東山天皇実録』一冊、藤井讓治・吉岡眞之監修・解説、ゆまに書房、平成一五・一六年)

(二二) 「薫物秘蔵抄」原本の閲覧が許可されなかったことから、複写物に対する目視しか行っていない。料紙が冊子本の綴じ目を解いて貼り継がれたものであった場合、中間点に折目の跡が残っている可能性が考えられるが、現時点ではその痕跡を確認できていない。

(二三) 焼物調合法、一卷、名古屋蓬左文庫、請求記号162-95(『名古屋蓬左文庫国書分類目録』、名古屋蓬左文庫編、名古屋市教育局、昭和五一年)。解題とテキストは注三所掲の拙著を参照されたい。

(二四) 専修大学図書館菊亭文庫所蔵「万方」には、「薫物秘蔵抄」の「黒方」方29に対する説11の同類文として、次の説42及び方42が記載される。なお、説42の傍線部に云う「丸」(「薫物秘蔵抄」は「〇」と記号で示す)とは、「黒家ノ秘説」に云われた香薬を鉄臼に入れて搗く順序(㊸から㊹)を意味すると考えられる

説42 (記号) 黒方 勅作次第ハ沈白貝丁薫沈麝丸ハ黒家ノ秘説也(記号) ト大方同

方42 ㊸一沈一両二朱之中 ㊹二丁二分 ㊺三貝一分 一朱ヒカ

㊻五白一分 六

㊼薫一分 六 一(一六丁裏)

(二五) 和田英松『皇室御撰之研究』(明治書院、昭和八年)によれば、後水尾法皇宸翰には「薫物方」、後西院宸翰には「正方」の書目による秘伝書がそれぞれ伝来したとされる。

後水尾院に關わる薫物書には、東山御文庫所蔵「後水尾天皇薫物調合御覚書」(一冊、函号一三三・四一・二二〇)、宮内庁書陵部所蔵マイクロフィルム版あり、請求記号P3688)及び「薫物調合秘方」(一冊、函号一三三・四一・一一一)、宮内庁書陵部所蔵マイクロフィルム版あり、請求記号N2208)が伝来する。内容には、『皇室御撰之研究』に報告された「薫物方」の逸文や概要に一致する点が見られることから、類纂の依拠資料や書写の底本等として互いに参照された可能性が考えられる。「薫物調合秘方」の解題とテキストは拙著「東山御文庫所蔵「薫物調合秘方」解説と釈文―杏雨書屋所蔵『香秘書』享受史一考―」(『杏雨』、第一四号、公益財団法人武田科学振興財団杏雨書屋、平成二三年)に掲載しており参照されたい。

後西院宸翰には、前述の「正方」の他に、宮内庁図書寮文庫所蔵「薫方之書」一点(料紙六枚に処方を記入し、それぞれに折り畳んで、四枚と二枚に分けて包紙に納める。請求記号・宸一四二〇)が確認される。

(二六) 安元三年四月二八、二九日条。細谷勘資「撰関家の儀式作法と藤原基房」参照、渡辺直彦編『古代史論叢』、続群書類従完成会、平成六年

(二七) 後徳大寺実定の閲歴と業績については、主として次の先行研究に学んだ。

1 松野陽一「林下集について」、『研究紀要』、第八号、立正学園女子短期大学、昭和三九年

2 中村文「後徳大寺実定の沈淪」、『立教大学日本文学』、第四六号、昭和五七年

3 松野陽一「歌仙落書考―千載集時代秀歌撰研究続貂」、『講座平安文学論究』、第三卷、風間書院、昭和六一年

4 五味文彦『藤原定家の時代―中世文化の空間』、岩波書店、平成三年

5 松野陽一『玉箒 千載集時代和歌の研究』、風間書院、平成七年(1に補筆して再録)

6 黒田彰子「林下集贈答歌群をめぐる」、『愛知文教大学比較文化研究』、第三号、愛知文教大学、平成一三年、CINii Article 掲載、

http://ci.nii.ac.jp/els/110000037567.pdf?id=ART000036741&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order.no=&ppv-type=0&lang_sw=&no=1423704196&cp= 平成二七年二月二二日最終閲覧

(二八) 注二一所掲の拙稿「徳川林政史研究所所蔵「薫物之方」翻刻」注六六、四二頁参照。

(二九) 『後奈良天皇宸記』天文四(一五三五)年一〇月八日条によれば、後奈良天皇は尊鎮入道親王の求めに応じて薫物を調合している。

(三〇) 拙稿「宮内庁書陵部所蔵「薫物黒方秘方」翻刻」、『広島女学院大学日本文学』第一九号、平成二十一年七月、四六、四八頁。

(三一) 米原正義『戦国武士と文芸の研究』、桜楓社、昭和五一年、第一章「能登畠山氏の文芸」一六、一二四頁。

(三二) 『御湯殿上日記』享禄元年閏九月二一日条には蘭奢待の下賜に対する御札金献上について、同三年六月一八日条には薫物下賜への御札金献上について記される。

(三三) 三条西実隆が周防の大内家から取り寄せて享禄四年に書写し、天文三年に子息公条がこれを書写したものを模刻したと云う寛政一二(一八〇〇)年五月九日跋『御注孝経』一冊(刊本、玄宗注、三条西実隆点、源(屋代)弘賢跋早稲田大学図書館「古典籍総合データベース」掲載、

http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ro12/ro12_00728/index.html、平成二十七年十一月二日最終閲覧)に伝わる奥書参照。奥書の概要については阿部隆一「室町時代以前における御注孝経の講誦伝流について―清原家旧蔵鎌倉鈔本元始注本を中心として―」(『斯道文庫論集』、第四号、昭和四〇年三月、一、八五頁)等の先行研究を参照した。

(三四) 拙稿「井伊直弼と三條家薫物秘説との関係について」、研究ノート、『藝能史研究』、第一八二号、平成二〇年

付記

本稿の執筆に際しましては、京都大学附属図書館より貴重書の複写及び翻刻掲載のお許しを賜りましたことを始めとして、関連する資料の所蔵先であられる施設、団体、個人からも御高配を賜りました。また、所属する学会と研究会におきましては、参加者の皆様方より「薫物秘蔵抄」の内容及び関連資料についての貴重な御教示とご鞭撻の数々

を頂戴して参りました。改めまして、心より御礼申し上げます。

ご多忙の折にも関わらず、拙稿の査読及び英文題目の校閲をお引き受け下さいました二名の先生方からは、貴重なお教えと厳しいご指摘、暖かいご助言の数々を賜りました。御学恩に対しまして、深甚なる謝意を表します。

なお、本稿はJSPS科研費26580046ならびに公益財団法人武田科学振興財団平成二五年度杏雨書屋研究奨励による成果の一部を論文化したものです。

凡例

一、京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薫物秘蔵抄」（請求番号・菊巻 110、写本一軸、縦一四・五 cm、別書名「薫物方」）の全文を翻刻した。

一、右の書誌は、国文学研究資料館ホームページ「日本古典籍総合目録データベース」（平成二七年二月十二日最終閲覧、<http://basel.nijl.ac.jp/~tkoten/about.html>）に掲載される情報、及び京都大学附属図書館菊亭文庫カード目録に記載の内容、並びに同図書館より提供された複写物による計測結果に基づく。

一、本文の字配り、行配りは底本のままとした。

一、本文及び頭書及び傍書の文字色・文字サイズ・位置については、可能な限り底本のまま翻刻した。

一、表紙、裏表紙を含む各紙面及び貼紙の翻刻末尾には、次の要領でその位置を示した。

（例）表紙 〓 」（表紙）

表紙の内側 〓 」（表紙内）

料紙の継目 〓 」（紙継目）

貼紙の末尾 〓 」（貼紙）

一、記述のうち薫物の処方と調合の説については、冒頭からの掲出順に、次の要領による通番を頭書した。

（例）薫物の処方の第一番目 〓 方 1

薫物の調合法の第一番目 〓 説 1

一、説は、処方に対して行・段落を独立して記述される場合に、主要なものとなし通番を付した。

一、底本の古体・異体・略体字は、「ふ（より）」を除いて適宜正字体ないし通字体に改めた。

一、底本の記号や斜線、傍線の色・形・位置は、可能な限り底本に忠実に翻刻した。

一、底本の変体仮名は、すべて通行の書体に改めた。

一、仮名遣いの「ん」「む」の表記は底本のままとした。

一、反復記号「ゝ」「く」は底本のままとした。

翻刻

(蔵書票一枚)

薫物方上

「(外題・直書)

〔「菊亭家蔵書」印一顆〕

薫物秘蔵抄上

薫物方目錄

梅花 十色^八 白梅 一色

黒方 廿九色 荷葉 五色

侍従 十三色 菊花 十一色

落葉 四色 盧橘 四色
はなたちはな

新枕 二色 千種 三色

仙人 二色 玉椿 二色

蘭 二色 若草 一色

長月 一色 有明 一色

野風 一色 坎方 一色

薫衣香 一色 承和百歩香 一色

紅梅 一色

富士 十色 伽羅金薫物 一色

半方 四色 玉簾

時雨

(紙繼目)

(紙繼目)

説 1

梅花

梅花ヲカタトル 梅花ハ甘松
梅の花を入手口伝 春もちゐ候

大本

方 1

一沈二両三朱 占唐二朱 甲香三分三朱

甘松一朱餘 薫陸一朱餘 白旦三朱餘

丁子二分三朱 麝香三朱

本條右府秘本

方 2

一沈四兩 一子三兩 申香二分 甘松三朱

説 2

麝香三朱

甘松ハ一度酒ニヒタシテソノトチヌノニツソミテ
水ニチフリヌトギンボリ日ニホタヘシテニアフレバカラデ
十梅ノ花ヲウヅム事アリヌイルト事アリ口伝

半切 墨流表紙

方3 一沈四兩 丁子二兩 貝香三分 甘松二分

薰陸一分 麝香一分

方4 一沈五兩 丁子一兩 甲香一兩_小 甘松二分

麝香二分_大

大和とじ

方5 一沈五兩 丁子二兩三分 貝香五兩

甘松一分 鬱金三分 麝香一分

半切 白表紙

方6 一甘松一兩 藿香三朱 丁子一分

縮沙_{一朱ヲ半分ニ} 木香三朱 麝香皮一朱

川芎三朱 白旦三朱 薰陸三朱

天文三年七月十七日轉法輪前左府被合也
右之方梅花香云々

勅筆巻物

方7 一沈四兩 丁子二兩 貝香一分 甘松二分 麝香二分

中表紙

方8 一沈三兩 丁子一兩二分 貝香一分 甘松二分 麝香二分

薰一分 白一分

↑●は「黒(方)」を
書きかけたものか。
(紙継目)

同方 一両合分并取重次第

方9 一沈一兩 白一朱々中 貝一分一朱大 丁一分一朱大

薰々一朱大 麝一朱大

方10 一沈四兩 丁子二兩 貝二分 甘二朱 麝二朱

右三色三家秘方也右沈四両合方大本ノ勅筆ニモ有

梅花ハ花ノひらを取入候事候ソレハ花をかげぼし

ニ仕テ粉ニシテ入候

甘松ハ一夜酒ニヒタシテソノ汁又ノ日ニ
布ニツミミテ水ニテフリスギシホリテ
日ニホスベシ火ニアブルベカラス

白梅

勅筆巻物

方11 一沈一兩 丁二分 貝一分 白二朱 薰一朱

甘半朱 熟宇根半朱 麝半朱

白梅 梅干実ノ中水ニツケテ表ナル赤皮ヲコソケノケ
候ノ後キサミコに仕候或橘実入事有云々

(墨) (墨) (減) (減)

説5

黒方

冬サエコホルトキフカクソノカホリアリ
ゑヤウ松露 黒方は丁子薰陸

大本勅筆

方12 一沈三両 丁子一両二分 甲香一両三朱

薰陸四朱餘 白旦四朱餘 麝香一分三朱

方13 一沈大四両二分 丁子大二両二分 甲香大二両一分

麝香大二分 白旦大二分 薰陸大三分

右一色八条大将方也

方14 一沈小四両 薰陸小一分 白旦小一分 丁子小二両

甲香小一両 麝香小一分四朱

右 朱雀院御方

方15 一沈四両 丁子二両 甲香一両 薰陸二分

鬱金二両

方16 一沈四両 丁子二両 甲香一両 麝香二分

薰陸二分 甘松二分

右二方八條宮方

方17 一沈大四両 丁子大二両 白旦大一分 (紙継目)

甲香大一両 或二両 麝香大二分 薰陸大一分

右八條式部卿方承和秘方也

三条右府家秘本

方18 一沈四両^{おも} 丁子二両^{かろし} 白檀二分

薰陸一分 甲香一両 麝香一分

方19 一沈四両^{おもし} 丁子二両^{かろし} 甲香一両

白檀一両 薰陸一両 麝香二分

説6 一沈ハコマカニキザミテモデノフルヒニテフルウヘシ

説7 一丁子ハキザミテヨクコニシテセイコウニテフルウヘシ

説8 一甲香ハ三日ハカリ酒ニヒタシテウラノクロキアカヲヨク

カタナニテコソケテウラヲモテスキトヲルホトニコソゲテ

サテアマツラニ水トウブンニ入テヨクサカケヲセンシイダシテ

水ニテアラヒ日にほスヘシ其後クダキテコニテシテセイコウ

ニテフルウヘシ

説9 一麝香ハ毛ト皮トヲヨクノケテジヤカウスリニテヨクヨクスルヘシ

方20 一沈二両二分^{一朱半加} 丁子一両一朱 貝一分一朱

白一両一分 薰一分 麝一分

方21 一沈四両三分 丁子一両二分一朱 貝三分二朱

白一分三朱 薰一分三朱 麝二分

方22 一沈一両三朱 薰一分 白一分 貝一分^少

丁一分 麝二朱

方23 一沈一両一分 薰一分 丁子三分 貝一分

白旦一分 麝一朱半

勅筆巻物

方24 一沈香四両 丁子二両 貝香一両 薰陸一両

白檀一両 麝香一分

説10 一ちんのキザミ程くろほうコマカナルヨシ

(紙継目)

方 25 一沈四兩 丁二兩 白一分 貝二兩 麝一分

薰一分
右四条宮黒方

方 26 一沈四兩 丁二兩 甲香一兩 熟字根一分一朱

甘松一分一朱

方 27 一沈五兩 丁子一兩三分 貝香一兩一分

甘松一分 鬱金三分 麝香一分

一兩合之時ハ

方 28 一沈一兩 丁二分斗敷 貝四朱

甘松一朱輕 鬱金二朱重 麝一朱歟

(紙継目)

方 29 一沈一兩 丁二分 貝一分

一沈二朱々中 五 六
薰一分 白一分

搔合テ後麝香一朱半

黒家法

説 11 ○は又取重様秘説也二兩合は勿論一兩合ノ

時モ沈は二度也麝香は搔合後

方 30 一沈四兩 丁二兩 白二分 薰一分 貝二兩

麝一分

方 31 一沈五兩 丁二兩半 白一兩 薰一兩

貝一兩 麝二分半

説 12 右三家秘方也取重次第沈薰白丁沈 搔合麝

半切墨流

方 32 一沈四兩 丁子二兩 貝香一兩 薰陸一分

白旦一分 麝香二分

方 33 一沈二兩 丁子一兩 貝香二分 薰陸三朱

白旦二分 麝香一分

方 34 一沈香四兩 如常 丁子二兩 薰衣香ナト
ニ入タル風ノ引
タルヲ 諱火ウスクスリ
ヲロシ水ヒ三十返
白旦三匁三分 如常 貝香二分 カケホシ

薰陸二分 如常 麝二分二朱 如常

説 13 右麝大形ニスリ薰モ大形ニスリテ麝薰一ツニ

入スリ合調合スル也クロミハナベスミ也塩フルキヨシ

右秘方也

方 35 一沈二兩 丁子一兩 貝二分

薰二分 白二分 麝三種(種)はママ

説 14 右 禁裏へ申入方也春ハ丁子増一朱ほど

次第沈白貝丁薰 搔合麝

方 36 一沈一兩 丁二分 白一朱 貝一朱 薰一朱

麝一朱

半齊之時

沈一兩 丁二分 貝一分 薰一分 白一分 麝一分 朱半
調合次第ハ沈一兩ヲニ取合二分ニカケラレテニツツミ分テ
置ノコリノヤク種ハヲノヲノカケ合地ウスヤウヲシキ二分
分タル沈ヲウスクヒロケウヘニ後藥種トモヲヲキヒロケル也
次第ハ沈白貝丁薰如此ムラナクヲキテ後沈ヲヒロケテヒトツニアハ
セテキジノハネニテカウシニミゾヲツケソノアトニ麝香ヲヲキヨク合テア
マツラニテツク也ツクカス千キネ

「(方 35・説 14 を覆う貼紙)

◇ト同

方 38

一沈一兩三朱 大和トジ半切
貝一分 薰一分 白旦一分
麝二分

方 39

一沈大二兩 丁一兩 白二朱 貝二分
麝一分 薰二朱

方 40

一沈四兩 丁子二兩 白旦一兩
薰陸一兩 貝香三分三朱 麝香三分

説 16

右一方中納言宗種秘方也ツク数四千

方 41

一沈四兩 丁二兩 貝一兩 薰一分 白一分
麝二分

説 17

右ニガミ有方也

方 42

一沈五兩 丁一兩 貝一兩 白三分 薰三分
麝二分

右今案黒方也

説 18

荷葉

はすのかにタリ
夏しやうれん葉
荷葉は藿香白檀

大本

方 43

一甘松三朱 沈三兩三分 貝香一兩一分
白旦一朱 熟藿金一分 藿香二朱
丁子一兩一分

右方天慶六二公忠朝臣所献也

(紙継目)

三条家秘本

方 44 一沈三兩 甘松三分 甲香一兩

白旦二分 熟金一兩 薰陸二分 ㊟

藿香二分 丁子一兩 麝香一分

說 19 一藿香一夜酒ニツケテヌノニツミテ水ニテフリ

スミキテシポリ日ニホスベシ甘松ニヲナシ

勅筆卷物

方 45 一沈二兩二分 甘三朱 貝一兩一分 白一朱

熟字根一分 藿香二朱 丁一兩一分

說 20 今二種之香入之云々秘可書歟

麝香一朱 安息一朱 事也 墨滅四行

大和トジ

方 46 一沈三兩 甘三分 貝一兩一分 白一分

字根一朱 薰二分 藿二分 丁一兩半朱

麝一分半朱

墨流半切

方 47 一沈四兩 甘松三朱 貝一兩半 白旦一朱

宇一分 藿香二朱半 丁子一兩二分

青木香一朱 安息香一朱

說 21 侍従

大本 もみちをかたとる
秋風セウサツトシテ心ニクキヲリニ
ヨソヘタル匂ナリ 侍従ハ葎根

方 48 一沈三兩一分三朱 丁一兩三分三朱

甲香一兩三朱 熟金一分 甘松一分

(紙継目)

方 49 一沈小四兩 丁小二兩 甲小一兩 甘小一分三朱

麝小一分三朱

右一方八條大將方

方 50 一沈大四兩 丁子大二兩 甲香大兩 (ママ)

甘松小一兩 熟金小一兩 占唐一分

朱雀院御秘方也

三条家秘本

方 51 一沈四兩 丁子二兩 甲香一兩

甘一分 麝一分

勅筆卷物

方 52 一沈四兩 丁二兩 貝一兩 甘二兩 ㊟

方 53 一沈四兩 丁二兩 貝一兩 甘二分

右一方堀川右大臣 二条関白治暦四年四月六日

墨流半切

方 54 一沈四兩 丁子二兩 貝一兩 甘一兩 麝一分

方 55 一沈四兩 丁二兩 貝二兩 甘二分 占唐一分三朱

方 56 一沈二兩 丁一兩 貝一分 甘二朱 宇一朱 ㊟

方 57 一沈二兩 丁一兩 貝二分二朱 甘一分 白一分 不

勅筆卷物

方 58 一沈四兩 丁二兩 貝一兩 甘一兩 熟字 ㊟

右一方八條宮方

方 66	說 26	方 65	說 25	方 64	方 63	方 62	說 24	方 61	說 23	方 60	說 22	方 59
白表紙半切												
一 沈五兩 丁一兩 貝一兩 甘二分 麝												
コノ方ニハ麝二三朱入候事も候												
一 沈一分 丁二朱 貝一朱 甘一朱												
麝少入タルモヨシ半朱ホト												
一 沈二兩 丁一兩 貝一分 甘一朱												
熟字一朱 占唐一朱												
菊花 大本 菊ノカニニタリ 秋きくニクデンアリ												
一 沈四兩 丁子二兩 甲香一兩二分 麝陸一分 白檀一分 麝香二分												
三条家秘本												
一 沈四兩 丁子二兩 甲香一兩 薰二分 甘松一分 麝香二分												
勅筆巻物												
一 沈四兩 丁二兩 貝一兩 薰二分 甘二分 麝二分 麝												
一 菊花冬菊シヘヲ取陰干無別 義候												
一 沈一兩 丁二分 貝一分二朱 麝一分二朱 口伝 二二分テ其半ヲ入												
搔合後 麝香二朱												
白表紙半切												
一 沈一兩 貝一分 薰一朱 甘一朱 麝二朱												
右一方以勅筆書云々												

(紙継目)

方 67	一沈一兩 丁二分 貝一分二朱 薰一朱 甘一朱 麝二朱	右二方同方也
說 27	右 禁裏申入之委細以 勅筆口伝之義 被伝之分	
方 68	一沈二兩 丁二分 貝一分二朱 薰一朱 甘一朱 麝一朱	一香殊勝至極也搔中へ塩一朱ヨリモ輕 入也丁子又一朱入之二度加入也初度ハウ 二度メハ金臼ノ中ニテ薰物ノ上へ振懸モ シ沈ニホヒノコリテワロカランニハウ中へ丁子ヲ 可入之由被仰畢仍入之
說 28	此方ハ甘松ト麝香ト匂ヒカンヤウト心得候 沈ヲサノミニニホヒノコラテワロカラン匂ヒニテ 候ハミツノ中へ丁子ヲクワヘベシ	墨流表紙半切
方 69	一沈四兩 丁子一兩 貝香三分 薰陸三朱 甘松三朱 麝香一分	
方 70	一沈二兩 丁一兩 貝三分 薰三朱 甘三朱 麝二分	
方 71	一沈二兩 丁二分 貝香一分半 薰一朱半 甘一朱半 麝三朱	
說 29	大和トジ	落葉 秋ノ夕暮時雨スルホト紅葉ノ チリナトスルトキ心スゴキニヤアラン
方 72	一沈二兩 丁一兩 貝二分 白一朱 薰一朱 丁二朱	大本

方 73 一沈九両 丁子四両 甲香一両二分

麝香二分 香附子三分 白檀一分三朱

薰陸一分 藁合香一両

方 74 一沈八両 丁子四両 甲香一両二分

麝香二分 香附子本ノマ 白檀二分三朱

薰陸一分

(紙継目)

方 75

三条家秘本

一沈五両 丁三両 白三分 薰三分 藁香二分

鬱金一朱 青木香一朱 桂心一朱 甘一朱

占唐一朱 いまはなし 麝香二分

説 30

口伝云占唐用澤写

大和トジ

方 76

一沈五両 丁三両小 白三分大 宇一朱

藁二分 青木一朱 桂一朱かろく 甘一朱

貝一両 丁二分 占唐一朱 占唐代澤写

はなたちはな

盧橘

あやうしゆしけん

三条家秘本

方 77

一沈四両 丁子二両 甲香一両二分

白旦一両二分 ひき一分 カヤノ木也 麝香二分

勅筆巻物

方 78

一沈四両 丁二両 貝一両一分 白一両三分

カエノ木一分 麝一分

方 79

墨流表紙半切

一沈四両 丁子二両 貝一両一分 青木香一朱

藁香一分 藁香油一朱

方 80

一沈二両二分 丁三分かろく 貝二分

白三朱 薰二朱 宇一朱 甘一朱

麝二朱

新枕

大本

方 81

三条家秘本

一沈四両 丁子二両 甲香一両 墨滅記号主点

薰陸一両 白檀一両 麝香二分

大和トジ

方 82

一沈四両おもく 丁二両 貝二分 白一両かろし

藁一両かろし 甘一分 桂一朱かろし 麝一分

宇一朱 藁二分 青木一朱

千種

大本

方 83

一沈四両 丁子二両 甲香一両 白旦一両

薰陸一両 鬱金一分 甘松一分

麝香二分

(紙継目)

説 31

三千キネツクヘシカタクナレハ後ニモ又アマツラヲ
入テソツトツキアワスヘシ

方 84

勅筆巻物
一 沈^一二両 丁^一二分 貝^三三朱 白^四三朱 呂
薰^五三朱 麝^六一朱 輕^七甘^七一朱半

説 32

搔合後 麝香一朱半

方 85

大和トジ
一 沈^一五両 丁^一二両 貝^一一両 白^一一両 薰^一一両
字^一一分 甘^二二分 麝^二二分

或本二字一両

仙人

方 86

大本
一 沈^一二両 丁^二二分 貝^三一分 白^四一朱 薰^五一朱
麝^七三朱 甘^六二朱

或本二朱

右妙莊嚴院御方

方 87

大和トジ
一 沈^一三両 丁^一一両 貝^一二分 白^一二朱
薰^一二朱 麝^一二分

方 88

一 沈^一二両二分 丁^一一両^{かろく} 貝^一二分
白^一一朱 薰^一一朱^{おもく} ち^一やかう二朱^{おもく}

方 89

白表紙半切
一 沈^一一両 丁^五二分 甘^二二朱 貝^三一分 薰^四一朱
黄^六麝^六金^六一朱 麝^七香^七一朱

説 33

説 34

説 35

説 36

説 37

説 38

説 39

説 40

説 41

説 42

説 43

説 44

説 45

説 46

説 47

説 48

説 49

説 50

説 51

説 52

説 53

玉椿

大和トジ

一 黄^一麝^一金^一ハウハ皮ヲコソケテキサミ粉ス(ママ)
一 蜜^一ニテツキアワセテ後沈粉一朱許フリカケ
又ツクヘキ也
一 蜜^一ニ塩入事不可有ツカリカタキ時塩ヲ入候其
外ハ無用也
一 麝^一金^一ハ此一朱ト注スルヨリモ少ヒカヘテ
一 沈^一キサミヤウハ如黒方沈ノヒキクヅ不苦
右合次第分黒方候此玉椿黒方同前也

蘭

大和トジ

方 90

一 沈^一三両 丁^一二両 白^一一両 貝^一二分 薰^一三分
薑^一二分 甘^一一分 桂^一一朱 麝^一一分

方 91

白表紙半切
一 沈^一一両 澤^一写^一一分 貝^一二分 甘^四一朱^中
白^五三朱 桂^六少^七 薰^七一朱^中 丁^八二分二朱
麝^九三朱重

(紙継目)

若草

方 92 一沈^一三兩 占^二唐三分 貝^三香一兩一分

甘^四松三分 白^五旦二分 丁^六子一兩

薰^七陸一分 麝^八香二分二朱 中^九

中納言宗種卿秘方也ツク数三千

說 39 說 40 ヌツキ了テ後ウヘシタヘカミゲヲヤキイボホド三ツホド入也

長月

方 93 一沈^一二兩二分 丁^二一兩^カロク 貝^三三分 白^四三分

甘^五松二朱 宇^六根三朱

有明

方 94 一沈^一二兩 丁^二一兩二分 貝^三二分 白^四三朱

薰^五二朱 麝^六三朱

野風

方 95 一沈^一四兩二分 貝^二一兩 甘^三一分^{おもく} 白^四一分一朱

丁^五一兩二分^{かるく} 麝^六一分 薰^七三朱

坎方

大本

方 96 一沈^一三兩 占^二唐一兩 蘓^三合香一兩 白^四旦二分

丁^五子一兩 甲^六香一兩 麝^七香二分

薰衣香

方 97 一沈^一二兩一分 丁^二子二分 甲^三香一兩一分

麝^四金三朱 白^五旦一兩三分 蘓^六合一兩三朱

占^七唐一分 青^八木香二分

說 41 あまつらにあはせずして散にして

たく也

承和百歩香

方 98 一甲^一香小八兩 蘓^二合香小一斤 占^三唐小一斤

白^四旦小八兩 零^五陵香小八兩 藿^六香小四兩

甘^七松花小四兩 乳^{にゅう}頭香小五兩 白^{びやく}膠香小二兩二分

麝^八香小四兩 麝^九金小二兩二分 中^{ちゆう}

說 42 ツキフルイテ蜜ニアハせてウツム事三七日

百歩ノホカニニホフ 大江千里カ所献方也

(紙継目)

方 99 公任卿方 一沈^一三兩 丁^二子一兩二分一朱 白^三一兩二分二朱

甘^四二分二朱 藿^五香一分(一朱ヒカ) 貝^六一兩

くろ方 半さい 竜^{りゆう}一朱 麝^{じや}三分(二分二朱ヒカ)

方 100 くむろく^{かるく} 一沈^一三兩 丁^二子一兩二分一朱 白^三一兩二分二朱

白^{しろ}堂^{どう}一ふん^{かるく}

かい甲^{かい}一兩^{かるく} ちやうし^{ちやう}二兩 ちん^{ちん}四兩

方 101
しろう 半さい
ちん 四両 ちやうし 二両 かい甲 一両一分
うこむ 三分 かんせう 三分
三しゆ半 三しゆ半

同

方 102
ちん 四両 ちやうし 二両一分 うこん 二分
かい甲 二分 かんせう 二分 さかう 一ふん

おち葉 ひは左大臣方半さい

方 103
ちん 四両 ちやうし 一両三分 かい甲 二分
さかう 五しゆ半 かうふく 一分 四しゆ
二しゆ 二しゆ 一四しゆ半 一分四しゆ半

梅花 半さい

方 104
ちん 四両一分 かい甲 二両 かんせう 二しゆ
白たん 一分二しゆ ちやうし 一両三分 くんろく 三しゆ
半 二しゆもよし

かよふ 半さい

方 105
かんせう 三しゆ ちん 四両 かい甲 一両一分
白たん 一しゆ うこん 一分 くわつかう 二しゆ

きく花 半さい

方 106
ちん 四両 ちやうし 二両 かい甲 二しゆ
かい甲 二分 ちんよりはかるく ちやうしよりはおもく
くんろく 一分 かんせう 一分
かるく おもく

右七色之方寛文八年十一月十一日
後徳大寺左府書借写之了秘方也

黒方 用此説尤是 正親町院勅方也
從御室御所拝受之

一 沈三両二分 口伝加 丁一両一朱 白一両三朱 朱加え一分也

貝一分一朱 麝一分 薰一分 口伝三朱二一

但麝想合後二一分ヲ掛合テ兩度ニ入之口伝有之可秘々々

調合具各以梅木作之 塩一分入之

黒味 黒松以焼煙色之口伝有之

宿紙ノ表紙薰方 四辻流也

黒方

方 108
二 沈四両 二 丁子二両 三 甲香一両
少ヲモクテモ不苦 少カロキカヨシ

四 白旦二分 五 薰陸一分二朱 六 麝香二分
同 少カロク入タルカヨシナラヒ也 少ヲモクテモヨシ

又勅方

方 109
一 沈三両 丁一両二分 白三分 薰三分
貝二分一朱 麝一分二朱

(紙継目)

又 四季通用祝言之時も用之

方 110 一沈四両 丁二両 貝香一両 薰一分

白旦一分 麝二分

又 秘中極秘也

方 111 一沈^{一分}二両二分 五^{一分}二分一朱 薰^{三分}一分一朱

薰三朱 一貝^{一朱}一分 六^{一朱}麝^{一朱}一朱

麝ハ一朱ヲ二度ニハリテ入也

説 44

又 家方 四辻家敷

方 112 一沈二両 丁二分 薰一朱半 帕^{一分}一朱半

貝一分^{或ハ三朱} 麝^{或ハ三朱}四朱

烏方 家の方

方 113 一沈四両二分 丁二両 貝一両 薰一両

白一両 麝香一分

梅花

方 114 一沈四両 丁二両 貝二分 甘二朱

麝二朱

又

一沈 貝 丁 白 くん 甘 麝
各々とうふん

又 御調合ノ梅花

方 116 一沈五両大 丁一両大 貝一両小 甘二分
麝二分大

梅花 梅の香ニにたるにほひ也

方 117 一沈^{一分}三両 丁一両二分 貝一両二分
麝一分 薰一分 白一分

仙人 伏見殿方

方 118 一沈二両 丁一両 白一朱 薰一朱
麝一分

又

方 119 一沈二両 丁子三分 貝二分
白一分 麝^丁香皮二朱 薰一朱
麝三朱

(紙継目)

菊花 秋

方 120

一 沈二両 丁二両 貝三分 薰三朱
甘三朱 麝一分

き菊花 菊
これをたきこれをかけは老さけ
命をのふる方なり冬菊のにほひ也

方 121

一 沈二両 丁二両 貝三分 薰三朱
甘三朱 麝香一分

侍従 冬是を用口伝

方 122

一 沈四両 丁二両 貝三分 甘一分三朱
占唐一分三朱

又

二

(紙継目)

方 123

一 沈四両 丁二両 貝三分
薰二分 白二分 甘二分
宇金二分 占唐三分

又

方 124

一 沈三両 丁二両 貝一両
薰二分 宇金三分 樟脳一分口伝

又 勅方

方 125

一 沈二両 丁一両 貝二分 薰一分
宇金一分二朱
又一朱

落葉

秋の末冬のはしめに用ゆ
時雨する時もみちのちりかゝる
に心すこきかにやあらん

方 126

一 沈九両 丁四両 貝一両二分
麝二分 かうふし二分 白一分二朱
薰一分 そかう一両

又方

方 127

一 沈一両二分 丁二分かろし 貝一分二朱
白一朱 薰一朱かろし かうふし二朱おもし
麝一朱 そかう二朱

花はちす

方 128

一 沈四両 丁一両二分
貝三分 宇金一分
甘松一分

三

(紙継目)

荷葉 夏

方 129

一 沈七両二分 甘一分 貝二両二分
丁二両二分 霍一分四朱 白一分二朱
宇金三分 安息香一分

↑ここから紙背
の裏映りあり

蓮葉 後白川右府新作

方 130 一沈三両 甘三分 貝一両一分

白一分 宇二朱 薰二分
霍二分 丁二両半 麝一分半

玉椿 後白川右府新さく

方 131 一沈四両 丁二両 甘松一分二朱

貝一両 薰二分 宇一分
麝三朱

若草 同

方 132 一沈三両 占唐三分 貝一両一分

甘松三朱 白二分 丁一両
薰一分 麝二分

花たち花
盧橘

方 133 一沈四両 丁二両 貝一両一分

青木一朱 霍香一分 白一両一分
柏一朱^{口伝} 麝一分

新枕 家方

方 134 一沈六両 丁子二両二分 貝二両三分

白檀二分 桂心一分二朱 薰二分
青木香二朱 麝二分<sup>アハセヤウ
口伝あり</sup>

四

(紙継目)

野風

方 135 一沈四両 丁二両 貝二分

白一両 薰一両 霍二分
青木一朱 甘一分 桂心一朱
麝香一分

蘭 家の方

方 136 一沈二両 占唐三分 貝一両

甘三朱 白一分二朱 丁一両一分
桂心一朱 薰三朱 麝二分

千種 れうしやういんしんさく

方 137 一沈五両 丁二両 貝一両 白一両

薰一両 宇金一分 甘二分
麝二分

菖蒲

方 138 一沈一両一分 丁一両 貝二分

白二分 薰二分 宇一分二朱
あやめのね一朱 麝一朱

二葉

方 139 一沈一両二分 丁二分 貝三朱

白二分 甘三朱 麝二朱

たきものゝ代々の匂ひを

雲上に

つたふる風のたよりうれしも

↑紙背の裏映り
ここまであり

(紙継目)

紅梅

方
140

一沈三両 丁子一両一分一朱 白一両二分三朱
甘二分二朱 藿香一分十 貝両（ママ）
竜一朱 麝三分十

玉簾

方
141

一沈四両十 丁一両二分二朱 貝二分二朱
三分二朱 三 二
白十兩十 甘三朱 薰三分十朱
麝一分三朱 樟 二
返腦三朱 ●

時雨

方
142

一沈四両十 丁二両三朱 貝三分十朱
一分 三朱
白三分 甘十朱 ウ三朱
薰二分 麝一分十朱 安息香二朱
蘇香油 一分

建久之説

梅花 四条大納言

方
143

沈四両一分 甲香一両三分
甘松三朱 丁子一両一分
麝一分 薰三朱
合八両朱

説
45

梅花にハ薫陸ハ両数スコシタ
ラサテイルヘシ

方
144

梅花 上手の家の方

沈四両一分 丁一両一分
甘三朱 白一朱半
甲一両三分 麝一分

(以下、紙背)

薰衣香方

唐方

シヤウチウフイテ

十排草 ●●へ入吉ヲ ●●五十一冊

十王奈 一冊
キサム 蕪香油ニモ ●マセル也

十松五十一冊

十田里四十一冊

十竜腦五十一冊

十麝香五十一冊

十蕪香油七十一冊

十排草 一冊

十排草 一冊

十排草 一冊

十排草 一冊

十排草 一冊

十排草 一冊

十排草 一冊

十排草 一冊

十排草 一冊

十排草 一冊

十排草 一冊

十排草 一冊

十排草 一冊

十排草 一冊

十排草 一冊

十排草 一冊

十排草 一冊

↑方 39 に付随の
和歌の裏面

(紙継目)

方 148

梅花

十松四匁 一木二匁 一青木七分半

十里二匁 一丁四匁 一阿二匁

十安二匁 一陸二匁 一藿二匁

十龍十五匁 一麝十五匁 一返腦一匁

十苗四匁 一伽一匁 一爵(マヤ)一匁

十良七分半

果国入梅花

方 149

十松三匁 一麝二匁 一苗五分

十木 一青木 一良

十安 一薰 一丁

十阿各一匁 一且三匁 一反二匁半

小富 名薬十四味アリ

方 150

十甘二分 一黄三朱 一丁一分

十安息一分 一良香三朱 一苗香三朱

十木香一分 一阿仙一分 一薰一分

十菊花二分 一リウオウ一兩 一反オウ一朱

十麝一兩一分 一伽羅三分 コニシチ

以二十四味

供養香 今案同線香

方 151

十沈一兩 一丁一分 一薰三朱

由二分半 甘三朱 黄(宇)三朱

(紙継目)

右粉ニシテ由菰ヒヤクギウ（墨滅）ニテシルタキ

カタタキナキヤウニヨクカタメテセン香ノ

ホトクニシバ出也由菰ハ粉ニシテ水ニテ

ネル也

主簾 薫物之新作

（紙継目）

十沈四上兩二分 下兩二分 貝一兩五分 由三七分

廿三分一朱上兩 薫一分 松マツヤニ二朱一分（アタラク●●ヲ） 麝二朱十分上朱

龍腦一朱

右松二朱十分龍腦一朱不カた粉ニテ磨モネリタルヲ

●●メニカケウケテ一分朱（墨滅）ソノ中へ松脂上朱

龍腦一朱ヨタクコニシタルヲ入テ又ネリ合テ後

貝香ヲ●ウメホドカケテ右ノ中へ入ヨクネリ合

ヲキテ余ノ香具ヲ次第ノコトクニ合テソノ後

麝香ヲサネゴトクニカウシヲ付テサシ入ヨクヨク合テ

後又残ノ麝香ニ朱ヲ（墨滅）入コト口伝也

双葉 薫物新作

十沈四兩二分 下兩二分 貝三分上朱 二朱 由一兩

廿上朱 下七分 薫一分（一分上朱）（一分） 麝二分上分上朱

蕙香油一分 ヨクササケトリテ蜜合ノトキニ入

右○（ネリタルリヤウメ）麝一分○（上朱）分ヲ

薫二分（フルヒタル）ナカラソノ中へ入テネリヤ

セ又ソノ中へ貝三分上朱ナカラ入テネリ合テヲキテ

又●麝●朱ヲサネ（墨滅）也

中ト口伝也

附・「薫物秘蔵抄」人名家名等解説

凡例

一、京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薫物秘蔵抄」にあらわれる人物の呼称と家名及びその他団体名について解説した。

一、人名や家名等の内、拙著『薫集類抄の研究…附・薫物資料集成』（三弥井書店、平成二四年）所収「校注薫集類抄 人名家名等解説」において解説を加えたものについては、既出の内容を適宜改める等して引用し、引用箇所末尾に拙著の注番号（注一）を記した。

一、解説は、書中の人称や呼称を標目として行い、人物の場合は氏名、生没年、享年（数え年）、家系、略歴、号、その他の動静、薫物との関わり並びに「薫物秘蔵抄」載録の方・説の有無とその通番について、家名等の場合はその沿革と薫物との関わり、ゆかりとされる方・説の有無とその通番について記した。なお、各標目に関連する事項が本誌掲載の解題及び本附録に記載される場合は、続く丸括弧（ ）内に、当該箇所の表題の略称と本誌の頁数を示して参考供した。

（例）解説中のある人物について『薫物秘蔵抄』人名家名等解説の別の頁に関連する解説が記載される場合

…三条実香（人名家名等解説77頁「轉法輪前左府」）もまた…

一、解説は、氏名など呼称の旧仮名遣いによる五十音順に行った。

一、仮名遣いの「ん」「む」は「ん」に統一した。

一、標目となる呼称には、原則として掲載元の本文における初出のそれを使用した

一般に通用する呼称と異なる場合は、一般の呼称も標目に加え、該当する書中の呼称を示した。

（例）貞敦親王 ↓ 妙莊嚴院

一、標目の読みは、「薫物秘蔵抄」の記述及び既存の資料における通例を採集または推定して示した。表記には、旧仮名遣いによる音訓にひらがなを、現代仮名遣いによる音訓に片仮名を用いた。

一、標目の表記が「薫物秘蔵抄」の原文と異なる場合は、解説の末尾の丸括弧（ ）内に次のように原文を示した。なお、原文の仮名遣いが通例と異なる場合は「ママ」と傍書した。

（例）方・説 千種方^{ママ}137（れうしやういん）

一、閲歴と伝承及び考察結果の出典、並びに薫物書の所蔵情報やテキストの掲載先については、伝本や典籍により説の別れる場合や、一部の資料にしか見られない記述である場合に限り書名等を併記し、必要に応じて注欄に記した。出典を明記しない記述は、既存の史料の内六国史、『公卿補任』、『尊卑分脈』、『本朝皇胤紹運録』、『歴代編年集成』、『諸家伝』並びに『系図纂要』の記事に依った。

あ行

異国人

イコクジン

和人に対する異国人。詳しい出自や履歴、氏名については明らかでない。京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薫物秘蔵抄」の薫物「梅花」149を考案なし所持したと云う。

薫物「梅花」は古代の中国で発祥した可能性がある^(注二)。異国人梅花はこうした漢籍の載録方であつたか、あるいは類纂当時の社会において渡来人の方として披露され、本書の類纂者の知る所となつたのかもしれない。

「梅花」方149と同一の処方は管見に確認できていないが、類似の香具を配合したものととして、徳川林政史研究所蔵「薫物之方」載録の「院ノ御所様御方」と伝わる「梅花」方92を確認している。「院ノ御所様」は室町時代後期以降の上皇、法皇への尊称であり、既出の拙稿では正親町院（人名家名等解説63頁）の可能性を指摘していた^(注五)。正親町院の合香活動における異国人梅花との影響関係の有無については検討を要す。

方・説 梅花方149

家

イェ

当該方の考案ないし所有された家。「黒方」方112の由緒として記載される「家方」が初出。「家方」は「四辻家歟」との注記を伴う。また、続く「烏方」113と「新枕」方134及び「蘭」方136にも「家方」又は「家の方」とある。「黒方」方108から「二葉」方139までは、依拠資料「宿紙ノ表紙薫方」に載録された可能性が高く、同書は由緒として「四辻流也」と記載される（解題14—18頁、人名家名等解説90頁）。

「黒方」方112には「四辻家歟」とされる以外に家名を検証し得るような記述が見当たらず、処方の同類文も管見に確認できないことから、四辻家（人名家名等解説88頁）の処方であるとの見方を現時点で検証するのは困難である。

その他の「家」の方のうち、「黒方」方113については次の七点の同類文を確認している。

- 鎌倉時代初期の書写と伝わる「焼物調合法」^(注二) 載録の朱雀院「黒方」方13

- 2 高松宮本「たきものゝほう」^(注二) 載録の由緒不明の「黒方」方6

- 3 東山御文庫所蔵「薫物調合秘方」^(注三) に「轉法輪家方実香公以自筆書写之」として載録される「黒方」方11

- 4 京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薫物秘蔵抄」に依拠資料「勅筆巻物」として載録される「黒方」方24

- 5 専修大学図書館菊亭文庫所蔵「万方」^(注四) に「又方 秘勅作并三家」の方として載録される「黒方」方10

- 6 徳川林政史研究所蔵「薫物之方」載録の由緒不明の「黒方」方38

- 7 徳川林政史研究所蔵「薫物之方」^(注五) 載録の由緒不明の「小倉」方31
右の七点のうち、「烏方」方113と完全に一致するのは2から4の処方である。2は由緒を伴わず伝来したが、3は轉法輪三条実香（人名家名等解説77頁「轉法輪前左府」）自筆の書に、4は勅筆巻物とされる書に載録されていたという。異文を含んだその他の同類文のうち、7は勅作で「三家」にゆかりの品と伝わる。皇室にゆかりの処方という点では4の伝承に重なる。後述するが、「勅筆巻物」は今出川公規が禁裏に進上した家伝の薫物二点のうち、伝承筆者轉法輪実香の卷子本一点を後水尾法皇が自ら書写した宸翰に該当する可能性がある（解題8—11、18—21頁）。「三家」は三条家の略称かと考えるが、3の伝承とともに、上記の勅筆巻物が、伝承筆者轉法輪実香の伝書の写しと見られることに関係する。

本書にいう「家」のうち、「黒方」方112の所蔵先とされるものについては、「四辻家歟」との伝承の真偽を検証することが肝要である。「烏方」方113を所持したとされる「家」については、依拠資料ないしその祖本を書写した可能性のある轉法輪実香の三条家に該当する可能性は否定できない。ただし、前述の依拠資料「宿紙ノ表紙薫方」は、三条家の主要な合香家によるとされる新作薫物や、三条家で珍重され、同家類纂の秘伝書には必ずと言って良いほど記載される後土御門院御製の和歌一首を末尾に記載することから、三条家ゆかりの秘方秘説を元々複数載録しており、その上で四辻家に代々相伝されたものとして伝来した可能性があることから、本書に云う「家方」及び「家の方」の「家」

とは全て四辻家の意味で書かれたものと解釈できる。

方・説 黒方方112（家方 四辻家歟）、烏方方113（家の方）、新枕方134（家方）、
蘭方136（家の方）

大江千里

おほえのちきと
オオエノチサト

生没年不明。文章博士大内記民部左大弁従三位参議大江音人朝臣男（『大江氏系図』）。兄または弟に千古（注）がある。一説に、実は音人子息右京大夫玉淵男とも云う（『中古歌仙三十六人伝』）。元慶元年に大学学生（『古今和歌集目錄』、同七年備中大掾（『中古歌仙三十六人伝』）。これ以後に伊予権守に任ぜられたが、他者の罪に連座して籠居することあり。寛平六（八九四）年散位従六（又は五）位上の時に、勅を奉じて当時の心境を詠んだ和歌を含む自作の和歌百二十首を献上した（『句題和歌』又は『大江千里集』）。延喜元（九〇一）年陽成院御給により中務少丞に、翌年には兵部少丞に任じ（『古今和歌集目錄』）、翌三年六位の兵部大丞に任じた（『勅撰作者部類』）。漢詩文の題材に寄せて詠み上げた和歌を中心に採録する私家集『句題和歌』を編纂。『古今和歌集』に一〇首入集して中古三十六歌仙の一人に選ばれている。

京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵『薫物秘蔵抄』に千里が献上したと伝わる「承和百歩香」方98は、平安時代後期の類纂と伝わる『薫集類抄』に載録されて後世の諸書にも伝来しており、付随する調査の説42もまた、『薫集類抄』等に漢文体で記される説の漢字仮名混じりで読み下したものに相当する。ただし、『薫集類抄』をはじめとした薫物の伝書においては、管見に方の由緒として、四条大納言源定家（人名家名等解説72頁「四条大納言」）より出て大江千古の上りし所と伝わるのが一般的である。両者の閱歴にはどちらを合香家とするのが本来的かを決するだけの事跡は見当たらない。

合香には本草や医薬の漢籍を読み解くための学識が必要であったと考えられる。中古の歌人には合香家としても著名な人物が少なくなく、合香の才は和歌の創作の幅やそれに伴う贈答といった交流の幅を広げる上で有益であったと考えられる（注六）。千里と千古

とともに文章博士の家に生まれて大学に学んだ。千古は献策により式部丞に任じて文章博士に昇り、式部大輔、伊予権守に任ぜられて従四位上に至ったとされる（『除目大成

抄』、『大江氏系図』）。延喜四（九〇四）年に醍醐天皇の御前に特別に召し出されて日本紀を講じた（『新日本紀』）ほか、天皇の侍読の役を拝命（『朝野群載』）。和歌については、『後撰集』に二首、『新古今集』に一首入集し、『日本紀寛宴和歌』に玉依姫に寄せて詠じた一首が載録されるほか、千里や堤中納言藤原兼輔、合香家としても著名な源公忠（人名家名等解説69頁）などとの間で贈答を交わしたことが知られる。漢学者としては千古のほうが千里よりも成功しており、千里はむしろ和歌の才を生かして評価された人物と言える。

『源氏物語』古注釈書の『原中最秘抄』絵合巻勘物の「薫物合高名人数」は、中古の合香家の一人として千里の名をあげている。この勘物は、鎌倉時代の書写と鑑定される杏雨書屋所蔵「香秘書」（注）に近い内容の伝書に依拠して執筆された可能性があるが、「香秘書」諸本の承和百歩香方には千古と記載される。

『薫物秘蔵抄』載録「承和百歩香」方の依拠資料は、これに先立つ「坎方」方96、「薫衣香」方97ともども「大本」と伝わる。以上三点の処方はいずれも『薫集類抄』と「香秘書」に同類文が載録されることから、これらの伝書の写本のうちいずれかを参照して書写されたのかもしれない。ただし、管見に、前述の「香秘書」諸本だけでなく『薫集類抄』諸本においても、千古を千里とする異文は確認できていない。一方で、『原中最秘抄』諸本の該当箇所については異文が伝わらない。

「承和百歩香」方の由緒にまつわる伝承本来の内容は、本来は千里ではなく千古を献上者として伝えるものであったのだろう。『原中最秘抄』の勘物に千里とあるのは、原本筆者が千古を千里と誤って写したためか、或いは、勘物の依拠資料と「薫物秘蔵抄」の方98依拠資料とされる「大本」が、どちらも「香秘書」とよく似た内容であって、ともに千古を千里とする異文を記載した為かと考える。

方・説 承和百歩香方98、同方調査の説42

正親町院

おほきまのいん
オオギマヂネ（イ）ン

第一〇六代正親町天皇。永正一四（一五二七）年—文禄二（一五九三）年。後奈良天皇第一皇子。母参議万里小路賢房女贈皇太后吉徳門院榮子。

諱方仁（みちひと）。永正一四年五月二九日誕生。天文二（一五三三）年二月九日に一七歳で親王となる。弘治三（一五五七）年九月九日父帝崩御、一〇月二七日踐祚。三年後の永禄三（一五六〇）年正月二七日に即位。天正一四（一五八六）年七月二四日誠仁親王（号陽光院）薨去により、同年一月七日皇孫和仁に親王宣下して讓位。文禄二年正月五日に仙洞にて崩御、七七歳。号正親町院。

和漢の学問、教養を幅広く習得して奨励したほか、寵臣を召し出して立花や炷香等も嗜んでいる。天皇は右大臣三条西公條から『帝範』や『職源抄』、『源氏物語』等の進講と、古今伝授や『伊勢物語』の伝授を受けた。皇子誠仁親王に対しては、四辻公遠に命じて琴を始めとした音曲の稽古を授けた。公遠はまた立花の名手であり、御前に召されて度々実作に及んでいる（『御湯殿上日記』）。

薫物については、父帝が轉法輪三条実香（人名家名等解説77頁「轉法輪前左府」とその子息公頼から薫物の伝授を受けたことがあり、永禄三（一五六〇）年、同五（一五八二）年ならびに同八（一五八五）年には、父帝の調査した「薫物」の下賜に与っている（『後奈良院宸記』等）。即位して後は、公家の寵臣や武家の有力者に対して、自ら調査した「薫物」や「匂袋」の下賜を頻繁に行った（『御湯殿上日記』等、^{注七}）。

室町時代以降の書写者識語を備えた薫物の伝書は、「薫物方」や「薫物書」といった書目により伝来するが、その内容は、いわゆる練香の処方をはじめとして、散薬状の薫衣香やそれを用いた匂袋、香油といった、多様な形態と用法による香料の処方も載録する。

「薫物」は、狭義においては練香のように練り合せ小さく丸める等して、薫炉にくべて芳香を発散させる類の香料をいうが、広義においては、練香だけでなく薫衣香や薫香具を用いた多様な形状、用途による香料も「薫物」として分類されていたことが分かる。

さて、先行研究によると、正親町天皇が「薫物」と「匂袋」の調査や贈答に及んだとする記事は、『御湯殿上日記』だけで六八件を数え、「匂袋」の一種と推定される「掛け袋」^{（注七、注八）}の下賜三三件を合せた場合は百一件にのぼる^{（注七）}。この件数は、後奈良朝における「薫物」及び「匂袋」の下賜や調査、贈答に関する記事が、『御湯殿上日記』に一五件、『後奈良院宸記』に三件確認されることに比して、各段に多い。

薫物そのものの香料としての、また伝統文化としての価値のみならず、天皇の勅作という高貴なあたらしさが、皇族や公武の臣下を始めとした人々の期待を集めた為であろうか、天皇はしばしば公家の臣下の要請に応じて薫物の調査と下賜を行っているし、織田家や豊臣家の主従に対して褒美や返礼として薫物を下されることも多かった^{（注七）}。父帝が当時の薫物の名家から秘方を相伝した合香家であったことは、この帝が合香の教養や技能を習得し実作に及ぶにあたり、少なからず影響したと考えられる。

当時の禁裏において合香活動とその完成品の贈答が頻繁に行われたと見られる背景には、正親町天皇自身が合香に関心が高かったことや、御製の薫物を珍重する上層社会の人々の期待があった為かと想像するが、それらに加えて、正親町朝のほとんどの時期において、それ以前の層社会における薫物文化の宗匠的立場を担ってきたとされる轉法輪三条家（人名家名等解説70頁「三条右府家」、71頁「三条家」、77頁「轉法輪前左府」、91頁「龍翔院」）の嗣子が洛中に常住せず、或いは長く不在であったこと、また、当時の皇族が轉法輪三条家の〈宗匠〉から直に薫物を伝授された、いわば正統継承者の一族であったことの影響も、考慮すべきかと考える。

伝承によれば、轉法輪三条家による皇室への薫物方の伝授は後奈良朝以前から既に行われており、後奈良院父帝の後土御門天皇の代には龍翔院三条公敦（人名家名等解説91頁「龍翔院」）がこれを行ったと云う。後柏原院への伝授については伝承、史実とも探索中であるが、後柏原院勅筆の薫物書の逸文とされる薫物「侍従」方一点を確認している^{（注三）}。この処方は、『薫集類抄』や「焼物調合法」、『薫物故書』^{（以上、注二）}といった平安後期から南北朝期までの類纂と伝わる伝書に載録された著名な処方と一致する。後柏原天皇の勅筆との伝承が事実であれば、天皇はこうした伝統ある名方を学び、自ら写すなどして蒐集していたものと推察される。

後柏原天皇の即位以前から公敦は周防に下向して洛中に戻らず、永正四（一五〇七）年にかの地で薨去した。伝承によれば、周防守護大内政弘、義興父子や〈流れ公方〉足利義植の懇望により家伝の薫物方を伝授したとされる。公敦子息で嗣子の実香は洛中に留まり従一位太政大臣に昇った。前述のように、天文二（一五三三）年一〇月一九日以

降には、子息公頼とともに禁裏に召されて薫物の処方や調合法について勅問を受けたほか、御前において調査も行っていた。実香は天文五（一五三六）年六月二五日に太政大臣を辞し、翌年二月八日に出家して諦空と号した。永禄元年二月二五日に九一歳で薨去。伝承に、実香は複数の公家や武家の懇望により家伝の秘書を書写したとも伝わるが、出家後に書写されたとするものはほとんど確認できていない（注九）。

公頼は天文五（一五三六）年に周防、同一二（一五四三）年に三河、翌年に周防と但馬、翌一四年に越前、翌一五年と同一八（一五四九）年に周防へ下向するなど、度々洛中の自亭を不在にした。周防へは特に頻繁に訪れていたが、天文二〇（一五五一）年に下向した際に、かの地で発生した大内家臣陶晴賢の乱に遭遇し、長門へ逃れる道中で横死している。管見に、公頼が書写したとされる薫物の伝写本は、あまり多く確認できていない（注一〇）が、祖父や父がそうであったように、その時々有力者らの求めに応じて、薫物方の授受や相伝を行っていたものと想像される。

実香父子が薫物方を伝授した後奈良院は、公頼の不慮の死から七年後の弘治（一五五七）三年九月五日に崩御。実香は翌年の永禄元年二月二五日に薨じている。管見に、これ以降の時期に初めて轉法輪三条家の嗣子が薫物の道の宗匠としての働きを見せるのは、後陽成朝の慶長年間のことである（注一一）。

なお、『御湯殿上日記』に確認された事例に限れば、後奈良院が皇子方仁親王のために薫物を調査して下賜に及んだのは、実香父子による伝授の翌年に当たる天文三（一五三四）年以降のことである。後奈良院は、歴代の天皇の師範を務めたとされる公家の合香家による伝授を経た上で、皇子に対して正統的な薫物を伝えたい、等と考えたのであろうか。その検証は今後の調査研究の中で行いたいと考えている。

京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薫物秘蔵抄」には、正親町院ゆかりの品とされる薫物「黒方」方107とその調査の説43が載録される。これらは院が「御室御所」（人名家名等解説65頁）より拝受したもので、「口伝故実」も逐一御相伝になったという。ここにいう「口伝」とは、香具の目方の加減や調査の手順についての口説であり、「故実」とは合香の伝統的な秘方秘説を云うのであろう。伝授の場においては、薫物「黒方」107

を実際に調査しながら秘説を口述すると共に、その処方と調合法を書き記した書を贈与するという内容による伝授が行われたかと考える。

管見に、本書以外にも正親町院ゆかりと伝わる処方や調合法を載録した他書は複数あり、その内訳は次の通りである。

- ・ 東山御文庫所蔵「薫物調合秘方」（注三）載録「黒方」方2（正親町院御方）
 - ・ 専修大学図書館菊亭文庫所蔵「万方」（注四）載録「黒方」方12、27（以上、正親町院〈闕字〉勅方）、29（正親町院之御方中）、方27調査の説18
- また、徳川林政史研究所所蔵「薫物之方」（注五）には正親町院の可能性のある「院御所様」ゆかりの処方が載録される。処方の由来を「院御所様」とするその他の伝書の記述も併せると、次の五点の「院御所様」方を確認している。

- ・ 徳川林政史研究所所蔵「薫物之方」載録「黒方」方58（院御所様方）、63（院御所様より信長御相伝ノ方）、「ねみたれかみ」方78（院御所様御方）、「竜煎香」方104（院御所様）
- ・ 上田流和風堂所蔵〔無題 薫物書〕二冊の内一冊載録「黒方」方30（院御所様御調合方）

以上の他書四点のうち、前者の二点は皇室と公家に、後者の二点は徳川將軍家と、豊臣家恩顧の大名で、開幕後に浅野家の家老を務めた上田宗箇の子孫の家系に伝来するものである（以上、注五）。前者と後者で院の呼称の異なる背景には、類纂時の方針や依拠資料における記述のあり方が影響している可能性もあり、今後の調査研究により明らかにしたい。

方・説 黒方方107、同方調査の説43

御室御所

おもむこしよ
オムロジヨ

御室仁和寺門跡をいうか。「薫物秘蔵抄」には「黒方」方107と同方調査の説43の由来に関する記述の中にあらわれており、正親町院（人名家名等解説63頁）勅方であって、御室御所より拝受したのであり、口伝故実も逐一御相伝になったと記される。

御室御所よりこれらを拝受、相伝したのは正親町院と解釈すれば、御室御所は、正親町院の存命中に仁和寺宮門跡を務めた法親王に該当する。具体的には、第一九世覚道法親王と第二〇世任助入道親王のいずれかということになる。任助が入滅して第二一世覚深法親王が入室するまでの期間に禁裏の御修法を行っている守理入道親王もまた、検討の対象に加えるべきかと考える。

覚道法親王は後柏原院第二皇子で、正親町院父帝後奈良院の弟皇子にあたる。明応九（一五〇〇）年誕生。永正八年に親王宣下を受け同一二年に出家した後、翌一三年に仁和寺法金剛院観音殿にて灌頂の儀を果たし最高位に昇る。大永七（一五二七）年正親町院が一歳の年に薨じた。

任助入道親王は大永五年に誕生。父は後柏原院猶子で今出川左大臣教季女所生の伏見宮貞敦親王（人名家名等解説87頁「妙莊嚴院」、母は轉法輪三条太政大臣実香（人名家名等解説77頁「轉法輪前左府」）女藤原香子である。のち後奈良院猶子となり、天文八年親王宣下を受けて仁和寺へ入室した。天正一二（一五八四）年逗留先の芸州嚴島にて病により入滅している。

守理入道親王は伏見宮邦輔親王御子として永祿元（一五五八）年に誕生。永祿八年に正親町天皇猶子となり、親王宣下を受けて仁和寺へ入室するも、天正一五（一五八七）年六月以降に「非法器」であるとされ退出し、一老と号したとされる（門跡伝^{（注一）}他）。

いずれの人物も正親町天皇とは近い関係にあるが、覚道は院の少年時代に早世しており、守理は院の猶子であるがはるかに若年であるから、薫物の方とともに口伝故実を院に対して伝授するような関係にあったとは考え難い。一方で、任助入道親王は院と同年代であったほか、実母は後奈良院に薫物を伝授した轉法輪三条実香の姫君である。正親町院の項で述べたように、院が御室御所から相伝したとされる「黒方」方は、平安後期以降の古い薫物書にも掲載されているが、室町時代以降には三条家類纂の『薫物故事』^{（注一）}に載録されて上層社会に伝来したことが知られる。任助入道親王が母方から薫物の秘方や秘説を継承しており、正親町院にその一部を伝授したとの推論には、蓋然性が認められよう。

京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薫物秘藏抄」以外の伝書にも、御室仁和寺にゆかりの品として伝わる薫物の方や説は散見する。載録先と概要は次の通りである。

- ・東山御文庫所蔵「薫物調合秘方」^{（注三）}載録「荷葉」方25（御室方、寛文五々十八調合）、31、32、「菊花」方42（以上、御室方）、挿紙A・「梅花」方10（仁方）
- ・専修大学図書館菊亭文庫所蔵「万方」^{（注四）}載録「千方」方74、同方調合の説55、56（以上、御室）

「御室（方）」または「仁」と併記されたこれらの記述の載録先は、皇室と公家に伝来した秘伝書である。稿者の現在までの調査の中で、徳川氏等の武家に伝来した秘伝書の現状における載録は確認できていない。御室の方は、主として皇族、貴族に伝来して珍重されたのかもしれない。

方・説 黒方方107、同方調合の説43

か行

唐 ^{からんち} 中国大陆の王朝である李唐（義寧二（六一八）—天祐四（九〇七））ないし後唐（同光元（九二三）—清泰三（九三六））又は南唐（昇元元（九三七）—開宝八（九七五））、或いは特に唐代以降のその地域をいう。

「薫衣香」は、唐代以前の医薬書に口臭、体臭の改善を目的に服用する為の処方が載録されるほか、宋代以降の成立と伝わる香書に芳香剤としての処方が記載される。我が国では奈良時代に高価な品として輸入されており、平安中期には渡来僧のほか和人独自の処方も考案されたという^{（注二）}。『うつほ物語』では高貴な人々が催す特別な席の贈答品として、『源氏物語』では高貴な姫君の婚礼に際して特別に詠えられた祝いの品としてあらわれる他、当時の和歌にも「薫衣香」について詠まれたものが伝わる。室町以降の時代にも、高貴な人々が調合しないし蒐集して臣下に授ける特別な品として扱われたことが分かっている^{（注五）}。「薫衣香」の処方や調合法は、鎌倉時代以降の類纂と伝わる薫物書にも主要な種類として載録され続けた。

「薫物秘藏抄」には「薫衣香」方145の由来について「唐方」とあり、同類文は確認

できていない。本方は紙背に書写された九点の処方のうち第一に記載され、他の処方ともども墨減される。本紙の処方に比べて劣る品と見なされたか、或いは本書の趣旨にそぐわないものと考えられた可能性がある。

「薰衣香」方145には「目（匂）」の単位が採用されるほか、三奈や辛夷といった香具を処方する。管見に、目（匂）の単位は江戸時代以降に書写された伝書に記載される。三奈や辛夷は、管見に江戸時代以降のものと思われる薫物方に配合され始める。また、由緒を「唐方」ないし「唐人方」とする処方は、後西院宸翰「薫方之書」^{〔注二〕}と徳川林政史研究所蔵「薫物之方」^{〔注五〕}、及び京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薫物秘藏抄」と同じ今出川家に伝来して同類文も多い専修大学図書館菊亭文庫所蔵「万方」^{〔注四〕}にも散見するのであって、これらはいずれも江戸時代の類纂ないし写本と伝わるものである。以上の特徴から、「薰衣香」方145は江戸時代の上層社会に中国大陸ゆかりの品として流通した可能性が考えられる。由緒の真偽の検証や伝来の解明には、江戸時代までに伝来していた大陸の医薬書や香書の載録方の調査と本朝の新作薫物方との比較検討が不可欠であり、今後の課題として取り組む考えである。

方・説 薰衣香方145（唐方）

公任卿

きんたうのきやう
きんとうノキョウ

藤原公任、康保二（九六六）年—長久二（一〇四一）年。清慎公実頼二男廉義公関白太政大臣頼忠一男。母中務卿代明親王女巖子女王。同母姉妹に円融院太皇太后四条宮遵子（人名家名等解説72頁「四条宮」）と花山院女御醍子がある。

公任の官人としての関歴や学問芸道における業績については、小町谷照彦氏による人物、作品研究や竹鼻績氏、後藤祥子氏、伊井春樹氏や新藤協三氏らによる家集研究の成果^{〔注三〕}に詳しい。平安後期以降の類纂と伝わる『薫集類抄』を始めとした幾つかの薫物書における公任の薫物の伝承については、既出の拙著^{〔注一〕}において小考を加えたことがあった。本稿では、以下にその要点を振り返りつつ資料と考察を補いながら、京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薫物秘藏抄」の公任卿方の概要と特徴について解説する。家集『公任集』の和歌や詞書によれば、公任父頼忠は薫物「梅花」を調査しており、

知友との私的な交わりの中で珍重されたい。公任自身も薫物を調査し、それにちなんだ和歌とともに贈答に及んだとされるほか、姉妹と同席して調査や賞翫に及んだり、姉妹に献上したりといったことも行ったと云う。事実であるとすれば、頼忠家では、薫物に関する父の嗜好と手法が子息子女にも受け継がれ、趣味として共有されていた可能性が伺える。

一方で、『薫集類抄』によれば、公任が所持したとされる処方は、嵯峨天皇の寵臣で漢学、漢詩にも長じた滋野貞主ゆかりの品と伝わる三点の薫物「黒方」方に同じであり、公任と同時代の小一条皇后藤原成子や、一条院女一宮で入道一品宮と呼ばれた脩子内親王の女房陸奥もまた同じ処方を所持したと云う。『薫集類抄』裏書勘物の筆者は、頼忠が養父で合香家としても著名な八条大将保忠（人名家名等解説82頁「八条大将」）の秘方秘説を用いており、公任はこれを習い伝えたか、或いは、合香をよくしたとされる清慎公実頼の秘方秘説が小一条皇后成子と公任に伝来したのではないかと推測する。また、別の裏書勘物には、姉の遵子のもとで薫物の香りを試し、処方の問題を聞き当てて褒美に与ったとの逸話が引かれた上で、公任は薫物の道に長じており、尤も至極と謂うべき人物かと評されている。

鎌倉時代以降の類纂と伝わる資料にも、公任の合香に関する伝承は散見する。鎌倉時代初期の源光行から後期に活躍した曾孫行阿へと伝来して、代々増補加筆の行われたとされる『源氏物語』古注釈書『原中最秘抄』もその一つである。同書では、物語にあらわれる薫物の文言や文脈についての勘物には、勘物筆者が信頼して参照したと見られる散逸薫物書の処方や説が引用される。薫物方は八点、薫物調査の説は三点を数え、それらのうち、「行阿云」として起筆される箇所には処方六点、説二点が含まれる。依拠資料については探索中だが、勘物筆者が「香秘書」によく似た内容の伝書を参照した可能性を指摘したことがある^{〔注一〕}。

さて、『原中最秘抄』に伝わる公任の薫物に関する逸文は、物語の絵合巻本文「百歩のほかをおほく過にほふまで」に対する勘物の中で、次のように確認される。

- 1 「四条大納言公任卿秘香」と伝わる薫物「百歩香」の処方と調合法、各一点。

2 「四条大納言公任」を平安朝の合香家の一人に加えた「薫物合高名人数」。

1の百歩香方と調合の説は「行阿云」以下の記述に含まれる。説は『薫集類抄』以降の伝書によく転載される「承和百歩香」の説を漢字仮名混じり文に改めた文面、内容に近似するが、処方については一致しない箇所が多い。処方の由緒について、「承和百歩香」方は一般に「四条大納言家」こと嵯峨源氏源定家（人名家名等解説72頁「四条大納言」）から出たものと伝わるのに対して、『原中最秘抄』の「百歩香」方は銘に「承和」の号を冠しておらず、由来も「四条大納言公任卿秘書」とされる。方、説ともに、有名な「承和百歩香」の調合法を参考に記述されたのは間違いないが、銘や処方、由緒に大幅な変更が加えられ、「承和百歩香」方とは別のものとして伝来したようである。なお、前に2とした「薫物合高名人数」の勘物ともども、通常ならば源定とされる「四条大納言」を公任のこととして記されている点は、本書の特徴として重視すべき点かと考える。依拠資料にそのように記載されていたか、或いは勘物筆者の筆によるかといった問題については、依拠資料の特定が実現した段階で改めて考察したいと考えている。

公任ゆかりとされる薫物方として次に現れるのは、宮内庁書陵部鷹司本と京都大学壬生家文書に写本の伝来する『薫物方』^{〔注一〕}、^{〔注二四〕}であり、薫物「黒方」方五点と、練り合わせた香具を埋める場所と日数についての説一点とが伝来する。処方のうち一点は、『薫集類抄』に公任方が所持したと伝わる処方三点中の一点に一致する。この処方は公任のほか、公任父頼忠の叔父に当たる枇杷左大臣仲平（人名家名等解説84頁）と、薫物の名手として『源氏物語』や薫物書の伝承に名高い光孝源氏公忠（人名家名等解説69頁「公忠朝臣」）にも所持されたと云う。他の四点の処方も他書に同類文を確認することができるが、いずれも公任に関する品としては伝来しない。なお、『薫集類抄』ともども「黒方」の処方のみ転載するのは、公任がその調合を得意とした為とも想像されようが、本書の類纂者が、「黒方」を珍重する観点から特にこの種類に特化して類纂したと見られることの影響も考慮すべきかと考える^{〔注一四〕}。

「薫物秘蔵抄」には、「公任卿方」として薫物「くろ方（黒方）」、「しろう（侍従）」、「おち葉（落葉）」、「梅花」、「かよふ（荷葉）」、「きく花（菊花）」の処方計七点（うち

侍従方二点）の薫物方が転載され、これらの末尾に書写者識語として「寛文八年十一月十一日後徳大寺左府書借写之了秘方也」と記載される。また、「公任卿方」と書かれた脚欄の余白に薫物「紅梅」方一点も記載される。「公任卿」は藤原公任と見なして良いだろう。寛文八（一六六八）年十一月一日に、後徳大寺左府こと左大臣藤原実定の蔵書を拝借して書写し終えた秘方であると云い、その所蔵者と拝借、書写した者の名は記載されない。

「紅梅」は、他の五種類の薫物が平安時代に存在したとされるのに対して、室町時代以降に盛んに考案された新作の一種と見なすべきである。五種類の方とは別に「公任卿」方として伝来していた方を入手した類纂者が、本紙の余白に加筆したものと想像される。『公任集』によれば、小野宮邸の梅の花は評判が高く、公任父頼忠や公任自身もこの花を詠んだ和歌を残しているほか、前述の通り、頼忠が調合した薫物「梅花」は知友の間で賞賛されたと云う。小野宮邸の梅は白梅であろう。この花に寄せた和歌とともに贈答されたという頼忠手製の薫物は、白梅の面影に重ねて賞玩されたかと推察する。一方で、『古今著聞集』の説話には、公任が宇治殿藤原頼通と春秋の優劣を論じた中で、「なほ春の曙に紅梅の艶色すてられがたし」と述べて優劣が決したと伝わる（巻第一九、六四三、宇治頼通、四条大納言公任と春秋の花の勝劣を論ずる事）。こうした説話が読み継がれるかたわらで、薫物「紅梅」方を公任と関連付けることが行われたのかもしれない。

「薫物秘蔵抄」は内題を「薫物秘蔵抄上」、外題を「薫物方上」と記述される。同じ専修大学図書館菊亭文庫に伝来する「薫物合様」とは内容と装訂の特徴から元々一對のものとして書写された可能性がある。また、「薫物合様」は寛文六（一六六六）年一月二三日に当時の権大納言今出川公規の執筆したものとして伝わる。以上の特徴や伝承に、公規は徳大寺左大臣公信二男であることを考え合わせると、後徳大寺左府書とされる公任卿方の依拠資料が江戸時代の徳大寺家に伝来しており、公規が拝借して寛文八年に書写を終えた可能性は検討に値する（解題25、26頁）。

公任ゆかりとされる薫物方のうち筆頭に位置する「黒方」方100は、『薫集類抄』及び「香之書」^{〔注二〕}以降の多くの伝書に転載された、平安時代の皇族、貴族を始めとした著

名な合香家が所有したとされる有名な処方の同類文であり、『薫集類抄』では公任が同じ処方を所持したと伝わる。ただし、その他の伝書の同類文も含めて内容を比較して見たところ、「黒方」方100に最も近いと思われるのは、平安後期の類纂とされる「香之書」に「平等院方」として伝来する「黒方」方4と、南北朝期の類纂と伝わる『薫物故事』(注1)に「他家方」として載録される「黒方」方10である。『薫集類抄』載録の同類文は、公任方として載録されていないが、原本類纂の際に参照されたであろう公任方とは異なる点があっても不思議ではない。本書の「黒方」方100の依拠資料「後徳大寺左府書」が確かに平安後期の公卿藤原実定の蔵書であるとしたら、『薫集類抄』類纂当時に存在したはずの、公任方の古写本であった可能性も浮上してくる。公任卿方の来歴の検証については、伝後徳大寺左府書の探索と併せて、引き続き取り組む考えである。

方・説 黒方方100、侍従方101・102、落葉方103、梅花方104、荷葉方105、菊花方106

公忠朝臣

きんたのあそん
キンタアソン

源公忠。寛平元(八八九)年―天曆二(九四八)年。光孝天皇皇子正四位下大蔵卿源国紀子息。延喜一八(九一八)年補蔵人。承平八(九三八)年従四位下、天慶六(九四三)年近江守兼右大弁。同八年に右大弁を辞し、天曆二年一〇月二八日逝去、六〇歳。号滋野井弁。又の説に天慶九(九四六)年卒、号滋野と。歌人としても評価が高く、『拾遺和歌集』や『後撰和歌集』、『新古今和歌集』等に入集。中古三十六歌仙の一人。家集『公忠集』に採録された和歌や詞書からは、醍醐朱雀両朝における寵臣歌人の一人として活躍したことや、撰閑家との和歌を介した主従関係の有り様がかがえる。『大鏡』には、放鷹の名人で鳥の産地を言い当てるほどの人物と伝わる。『源氏物語』梅枝巻には物語の前時代に活躍した著名な合香家として名前があがる。物語の古注釈書や『薫集類抄』等の薫物諸書には、公忠が所持したとされる薫物の処方や調合の説が多数伝来しており、平安中期を代表する合香家の一人として評価される。母は不明。『薫集類抄』には、公忠と同じく合香家として著名な典侍滋野直子朝臣と伝わる(注1)。

京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薫物秘蔵抄」の「荷葉」方43がそうであるよう

に、公忠が天曆六(九六四)年または天慶六(九四六)年二月に「荷葉」方を進上したとの伝承は、処方とともに『薫集類抄』以降の薫物諸書に伝来するほか、『源氏物語』古注釈書の梅枝巻勘物にも引用される。『薫集類抄』では「荷葉」方の筆頭に掲出され、「天慶(又は天曆)六年二月廿一日甲午これを進らす」とあり、本書の方43の同類文である方の他にもう一点の処方も公忠方として載録される。管見に、薫物「荷葉」方についてはこれよりも古い処方も伝来せず、鎌倉時代の類纂には「(荷葉には)させる秘方なし」とも説かれる。公忠方は「荷葉」方の始祖であり最良の品として位置づけられてきたと理解できる。なお、公忠は天曆二年に亡くなっているため、進上の年については天慶六年としたほうが史実に適っている。

なお、『薫集類抄』鎌倉期古鈔本と、鎌倉前期に成立して後期までに加筆増補されたという『源氏物語』古注釈書『原中最秘抄』梅枝巻勘物には、公忠が同日または別日に進上ないし献上したとされる別の種類の処方が伝わる。前者は銘を「会昌薫衣香」といい、方の末尾に「天慶六年十一月十一日公忠朝臣所進」と記載される。進上相手は当時高位にあった人物としか分らない。後者は『薫集類抄』諸本に公忠朝臣方として伝わる「薫衣香」方の同類文で、調合の説を伴うが『薫集類抄』諸本のそれとは異なる。ただし、同書の続文で一説に公忠方とも言われる「或方」の調合法を、漢字仮名混じり文に読み下した文章には近似する。調合法の末尾に「天慶六年二月廿一日甲申依勅公忠朝臣所合献上也云々」とある。この伝承には、薫衣香が天慶六(九四三)年に朱雀天皇の勅により献上されたと明記されるのである。

公忠のものとされる「荷葉」方や「薫衣香」方について、鎌倉時代以降の伝承に公忠の「薫衣香」方が天慶六年に献上されたとする記述が加わっている点は、『源氏物語』本文との比較考察を試みる上で暗示的である。物語の梅枝巻には、明石御方が、実在した「朱雀院」の「薫衣香」方に「公忠朝臣」が工夫を加えた「百歩の方」と呼ばれる処方を調合した、と記されている。『河海抄』等の古注釈書は公忠について、「(前略)延喜天慶間右大弁公忠朝臣蔵人所小舎人大和常生相並奉合香之役」との勘物を引用する。

当該勘物は、公忠の工夫した処方は実在の「朱雀院」のうち承平の帝(人名家名等解説

73頁「朱雀院」のものであつて、物語の内容が歴史的事実に即したものであるとの解釈を示すための根拠資料として引用されたものと評価できよう。ただし、『薫集類抄』等の薫物諸書の同文には、「(大和常生は)延喜聖代與公忠朝臣同時相並奉合香之事者也」とあり、禁裏において合香の雑事に奉仕したとされるのは醍醐朝であつて、朱雀朝にも継続したとは記載されておらず、古注釈書の勘物に対して齟齬を生じている。

『原中最秘抄』を執筆した源光行や親行、加筆増補に熱心であつたとされる行阿の時代には、公忠が天慶六年に朱雀天皇に対して「薫衣香」を献上したとの伝承が、物語に記された〈歴史的事実〉の根拠資料として注目されたのであろう。南北朝期書写と伝わる『薫集類抄』古鈔本に、公忠が天慶年間に献上した「薫衣香」方と伝わる処方有加筆されている点は、『原中最秘抄』勘物との同時代性を示す特徴と言えるかもしれない。

方・説 荷葉方 43

禁裏 きんり 天皇の住居または天皇。京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薫物秘蔵抄」

では二点の薫物方と一点の調合法の由緒を記した識語の中に、それぞれ「右禁裏へ申入方也」、「右禁裏申入之委細以 勅筆口伝之義被伝之分」として記載され、後者の意味に用いられる。管見に、これらの処方と説は今出川家の類纂と見られる薫物書にしか伝来しない。また、ここに云う「申入」とは天皇の御前に召されて方や説を相伝することと解釈できるが、いずれの天皇に対して何者が相伝したのかは明記されない。なお、処方のうち「菊花」方 67の依拠資料は「白表紙半切」の書であつたと云う。

「薫物秘蔵抄」と同じ専修大学図書館菊亭文庫に所蔵される「万方」^(注四)には「菊花」方 67の同類文が載録されており、「薫物秘蔵抄」と同じ識語も併記される。また、本方は「勅方」、天皇の考案ないし所持した処方と明記されている。識語に「禁裏申入」云々と伝わることから、書写者が本方を天皇所有の方として書写、収録したものと想像される。

『公規卿記』寛文五(一六六五)年七月四日条によれば、今出川公規は所蔵していた薫物の古写本二点を禁裏官庫の充実のために進上したことがあり、当日には後水尾法皇

と後西院が自ら写した宸翰、宸筆の下賜に与っている(解題8―11頁)。日記には、薫物方や薬方の調合を行うことがままあり、他家から所望されたとも記されていることから、公規は合香方に精通し調合にも熟達していたと考えられる(解題11―14頁)。

「黒方」方 35とその調合の説14ならびに「菊花」方 67の「禁裏申入」が公規の代に行われた可能性も含めて、今出川家における合香活動と薫物を媒介とした禁裏との関わりについては、引き続き検討したいと考えている。

方・説 黒方方 35、同方調合の説 14、菊花方 67

さ行

貞敦親王 ↓ 妙莊嚴院

三条右府家

さんてうふけ
サンジョウフケ

右大臣を家長とした当時の三条家(人名家名等解説71頁)

をいう。三条家の本流である轉法輪家と別流の正親町家、及び正親町の庶流である三条西家のいずれも右大臣以上に任ぜられる家格であつた。

京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薫物秘蔵抄」には「三条右府家秘本」とあり、依拠資料の由緒として記載される。同書から書写されたという処方や説のうち、「黒方」方 18は専修大学図書館菊亭文庫所蔵「万方」^(注四)に同類文が確認でき、ここでは「実香方」として轉法輪三条実香(人名家名等解説77頁「轉法輪前左府」)ゆかりの品である由が記される。また、「黒方」方 19は同じ「薫物秘蔵抄」に載録される新作薫物「新枕」方 81及び「千種」方 83に類似するほか、公益財団法人武田科学振興財団杏雨書屋乾々齋文庫所蔵「薫物之方」^(注一六)に載録される「黒方」方 2に一致するなど、複数の伝書に同類文を確認することができる。これらの同類文のうち、「薫物秘蔵抄」の「新枕」方 81は「勅筆巻物」に載録された「三条秘方」とある^(注一七)。「勅筆巻物」とは今出川公規が寛文五(一六六五)年七月四日に後水尾法皇から賜った、法皇による轉法輪三条実香自筆の宸翰を意味する可能性がある(解題18―21頁)。「千種」方 83は「三条家秘本」の載録方と伝わる。諸書^{(注九の1「薫物(黒方秘方)」等)}の伝承に、この種類は龍翔院三

条公敦（人名家名等解説91頁「龍翔院」）の考案した新作と伝わる。由緒を併記された同類文は他に乾々斎文庫所蔵「薫物之方」^{〔注一六〕}の黒方方2のみであり、「宰相殿方」と記載されるが、人物の特定は困難である。

以上のことから、「薫物秘蔵抄」の「三条右府家秘本」とは三条家伝来の秘方秘説が載録された薫物書であつたらしき、「薫物秘蔵抄」の類纂者ないし書写者の手元には「三条右府家秘本」と称して伝来したものと想像される。

なお、「薫物秘蔵抄」が寛文年間以前に今出川公規が類纂した伝書であると推定した上で、「三条右府家」が当時の轉法輪三条家を意味すると考えた場合は、「三条右府」は実秀ないし子息公富に比定する。実秀は徳川家康に薫物方を伝授したとされる公広の子息であり、公富も、延宝年間に薫物方を伝授したと伝わる人物である。実秀、公富父子の当時の轉法輪三条家に「秘本」と呼ばれる薫物の伝書が伝来し、彼らが再び合香の道の宗匠としての役割を果たしていたとすれば、今出川家等の他家の懇望により秘本を貸し出して書写を許す、或いは写本を譲るといったことが行われていた可能性は、検討に値する。

方・説 黒方方18・19、同方香具の説6—9

三条公敦 ↓ 龍翔院

三条公冬 ↓ 後白川右府

三条実香 ↓ 轉法輪前左府

三条家 さんてういへ、さんてうけ
サンジヨウエー、サンジヨウケ 公家の三条家。京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薫物

秘蔵抄」に「三家」とあるのはその略称の一種であろう。藤原北家閑院流の家系であり、

平安後期の公卿藤原実行を祖とする。

『薫物故書』^{〔注一〕}は室町時代の三条家で上下二巻として類纂されたと見られる薫物書

であるが、そのうちの上巻は、後三条相国実冬子息後白川右府公冬（人名家名等解説79頁「後白川右府」）に伝来し、公冬から禁裏に申し入れた口伝の内容を写したものと伝わる。また、下巻の書写者識語には、実行後裔で鎌倉時代後期の三条家当主である白川右大臣実親が合香を好み、その「故実」は南北朝期の同家当主後押小路内府公忠を経て子息の後三条相国実冬に伝来したと記述される。

三条家の本流である轉法輪三条家の室町時代中期の当主である龍翔院公敦（人名家名等解説91頁）は、同時代の親族である三条西実隆に薫物を贈答したことがあり、その一部はいわゆる新作薫物と見られる。伝承に、公敦は後土御門天皇や（流れ公方）足利義植、周防守護大内政弘、義興父子に対して薫物方の伝授等を行ったとされる。公敦子息実香（人名家名等解説77頁「轉法輪前左府」）とその子公頼は、後奈良天皇の勅により御前に参上して薫物「黒方」方及び「侍従」方の伝授と調査を行ったことが史実に明らかである。伝承には、両名がその時々有力者や好事家の求めに応じて家伝の秘方秘説を書写、贈与したと記されている^{〔注九〕}、^{〔注一〇〕}。

実香公頼父子の薨去後に、轉法輪三条家による本格的な合香活動についての史実や伝承を見出すことができるのは、管見に江戸時代初期の公広の代以降のことである^{〔注一一〕}。一方で、こうしたいわば轉法輪三条家不在の期間に、同じ三条家の別流である正親町三条家の人物が薫物方の調査や禁裏への献上といった活動を実施している^{〔注一七〕}。また、天正一十七年書写と伝わる京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薫物方」^{〔注一八〕}等の伝書には、新作薫物「遅桜」の発祥について、「するか三条いふ」で調査して広まったと記載される。この伝承が事実であれば、「遅桜」を調査したとされる人物は、室町時代後期に今川氏を頼って駿河へ度々下向し、同国に於いて剃髪し薨去した、正二位内大臣正親町三条実望またはその同居する親族であつた可能性が高い。

正親町三条家の庶流にあたる三条西家においても、前述の通り、実隆が周防在国中の龍翔院公敦から薫物を贈られているほか、自ら調査して親族、知友に贈ったり、皇族の調査した貴重な品を贈られたり、薫物を用いた「十炷香」を催したりしたこともあつた^{〔注一七〕}。公頼が横死して轉法輪三条家の直系が絶えると、三条西公国二男で正親町三条公

兄女を母に持つ実綱が嗣子となり、この実綱の養嗣子公広もまた三条西家から迎えられている。彦根藩主井伊家に伝来する薫物秘伝書の写しによれば、公広は徳川家康の懇望により「菊花」を始めとした複数種類の薫物方を伝授したと云う。

三条家は、合香の道の有職として、また宗匠としても、皇室を始めとする上層社会の薫物文化を長きにわたり支えてきたのであり、その主体的役割を果たしてきたのは轉法輪三条流と見て間違いなからう。ただし、白河右府実親以来の合香の「故実」が血脈ともども正親町三条家や三条西家にも伝来し、時に両家による補完又は発展を経て継承された可能性も見受けられた。三条家全体としての互恵的連携関係の実態については、今後も引き続き調査、検討したいと考えている。

方・説 梅花方2、同方調合の説2、梅花方8—10（三家）、同方調合の説3（三家）、黒方方31（三家）、同方調合の説12（三家）、荷葉方44、同方調合の説19、侍従方51、菊花方63、落葉方75、同方香具の説30、盧橘方77、新枕方81、千種方83、同方調合の説31、二葉方139

四条大納言

しゅうたいなごん
しじょうダイナゴン

源定（さだむ）。弘仁六（八一五）年—貞観五（八六三）年。嵯峨天皇御子。母尚侍従二位百濟慶命。淳和院養子となり天長五（八二八）年賜姓源朝臣。正三位大納言に右大將を兼任。貞観五年正月三日薨去、四九歳。贈従二位。四条大納言の他に、賀陽院大納言、揚梅大納言とも号した。漢学の才に乏しい反面音楽を愛好したとされる。

合香家の四条大納言といえ、鎌倉時代の古注釈書における一部の例外（人名家名等解説67頁「公任卿」）を除いて、嵯峨天皇御子の源定と見なすのが通例である。平安後期類纂と伝わる『薫集類抄』や鎌倉初期の書写と伝わる「焼物調合法」^{（注）}を始めとした薫物諸書、『河海抄』等の『源氏物語』古注釈書には、四条大納言家から出たとされる「承和百歩香」方とその調合法が載録されるほか、四条大納言ゆかりの品と伝わる薫物「梅花」や「黒方」の処方も伝来する。「百歩香」に冠した「承和」の称は定の異母兄仁明天皇（人名家名等解説74頁「承和」）治世の年号であり、この帝の呼称でもあつ

たことから、仁明天皇に由来する処方であつた可能性がある^{（注）}。

「薫物秘蔵抄」の「梅花」四条大納言方143には由緒について「建久之説」とある。処方の内容は諸書と同類文のうち「焼物調合法」に載録される四条大納言方に最も近い。「焼物調合法」には建久四（一一九三）年正月二〇日付け書写者識語が伝わることから、同書の載録方が後世の合香家から「建久之説」と呼ばれた可能性は検討を要す（解題21、22頁）。

方・説 梅花方143

四条宮

しゅうのみや
しじょうノミヤ

円融院太皇太后宮藤原遵子。天徳元（九五七）年—寛仁元（一一〇一七）年。関白太政大臣贈一位頼忠一女。母中務卿代明親王女厳子内親王。同母弟妹に大納言藤原公任（人名家名等解説67頁「公任卿」）と花山院女御諱子がある。

天元元（九七八）年四月一〇日円融天皇に入内して五月二二日に女御となり、承香殿に局を賜る。同五（九八二）年三月一日に中宮、正暦元（九九〇）年一〇月五日に皇后となり、長徳三（九九七）年三月に出家。長保二（一一〇〇）年二月二五日皇太后。寛仁元年六月一日崩御、六一歳。四条宮、四条太皇太后宮、三条太皇太后宮などと号した。

勅撰集に三首入集するほか、『公任集』に同腹の弟姉と交わした贈答歌が載録され、和歌の素養を備えていたことが知られる。信仰に篤く、念仏供養を度々主催したほか、寛弘八年の円融院国忌には御諷誦を修した。こうした篤志が裏目に出了たのであろうか、『今昔物語集』には、四条宮が横川の恵心僧都の托鉢用に銀の器を贈って返されたとの説話が伝わる。四条宮は皇子に恵まれず、公任子息任円を養子に迎えている。『大鏡』によれば、慢心の余り東三条院藤原詮子側の女房らの恨みを買うことがあり、「すはらの后」と揶揄されたと云う^{（注）}。

平安時代から江戸時代までの類纂とされる薫物諸書に、四条宮にゆかりの品として伝わる薫物方や調合法は、ほとんどが薫物「黒方」のものである。江戸時代の類纂と見られる京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薫物秘蔵抄」に四条宮の方として伝来する「黒

方」方25は、『薫集類抄』や「焼物調合法」^(注二)のような古い時代の伝書にも同じ由緒の品として載録される有名なものであるが、古い時代の伝書における四条宮方に対して小異が散見する。依拠資料の「勅筆巻物」は、室町時代の公卿で合香家としても活躍した轉法輪三条実香（人名家名等解説77頁「轉法輪前左府」）自筆とされる伝書を、後水尾院が書写して今出川公規に与えた宸翰の可能性がある（解題18—21頁）。古い時代の四条宮方に対する異同は、平安時代から室町時代までに為された伝来の過程において生じたものかと考える。

『薫集類抄』の伝承によれば、四条宮は様々な種類の薫物のうち「黒方」を最も優れた品として讃えたという。同様の評価は『源氏物語』における薫物の描かれ方にもうかがえることから、四条宮個人の価値観によるのではなく、当時の上層社会においてある程度共有されたものであったと考えられる^(注一)。

管見に、四条宮方と伝わる「黒方」以外の種類の方では、「薫物秘藏抄」の「梅花」方8の一点のみである。ただし、「梅花」方8の由緒は「四条宮黒」と書かれた上に墨滅されており、方の末尾に「三家（三条家）秘方」と記載される。また、依拠資料は「黒方」方25に同じく「勅筆巻物」と伝わる。「梅花」方8の同類文は『薫集類抄』を始めとする薫物諸書に数多く見出され、ほとんどは醍醐朝の藏人所小舎人大和常生にゆかりの品と伝わる。一方で、「薫物秘藏抄」と同じ時代に類纂された可能性のある専修大学図書館菊亭文庫所蔵「万方」^(注四)に載録された同類文は、「実香方」、轉法輪三条実香方と記載される。

以上のことから、「梅花」方8もまた、轉法輪三条実香自筆の伝書を後水尾法皇が写したとされる宸翰から書き写された可能性がある。「四条宮黒」は書写者が誤って記入したものであり、それを訂正する目的から墨滅されたかと考える。

方・説 梅花方8（四条宮黒・墨滅）、黒方方25

上手の家

しやうすのいへ
じょうすんいへ

合香を得意とした家の意。京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薫物秘藏抄」に「上手の家」の方として載録される「梅花」方144の由緒については、

これより先に記載される四条大納言方¹⁴³とその調合の説45ともども「建久之説」とある。いずれの方、説も鎌倉時代の類纂と見られる「焼物調合法」^(注一)に同類文を確認でき、また同書には建久四（一一九三）年付け書写者識語の伝わることから、「建久之説」とは「焼物調合法」の載録方であることを意味すると考えられる（人名家名等解説72頁「四条宮」）。

同類文は、「焼物調合法」の他に鎌倉時代の類纂と見られる「香秘書」^(注二)と、「薫物秘藏抄」に同じく江戸時代の今出川家に伝来した「万方」^(注四)、ならびに源氏物語古注釈書『原中最秘抄』に行阿が加筆、増補したと伝わる勘物に確認できる。薫物書の同類文はいずれも由緒「上手の家の方」と伝わるが、『原中最秘抄』にはそのように記されておらず、「八条式部卿宮の両種の方に小一条院に伝申さるゝ梅花黒方合する日記」に載録していた処方を書したことで、また、八条大将藤原保忠（人名家名等解説82頁「八条大将」）の処方「承和方」こと親王の父帝仁明天皇（人名家名等解説74頁「承和」）の処方に同じであり、仁明皇子の八条式部卿宮本康親王（人名家名等解説82頁「八条宮」）から孫の保忠に伝来した、以上の事は「公世卿」の説である、と記されている。

右の「日記」は前述の勘物にわずかな逸文が伝来するのみであり、書誌の解明や原本の復元には至っていない。ただし、『薫集類抄』等の薫物諸書には、小一条院敦明親王やその母后である小一条皇后藤原成子（本康親王と同じ薫物方を所持したと伝わる^(注一)）ことから、こうした伝承に関係した資料であった可能性はある。なお、「公世卿」は藤原氏八条流実俊六男参議従二位藤原公世かと推測するが、その検証と解明については今後の課題として引き続き取り組む考えである。

方・説 梅花方144

朱雀院

しゅしやくゐん
しゅじやくゐん

第六一代天皇。延長元（九二三）年—天曆六（九五

二）年。醍醐天皇第一皇子、母昭宣公藤原基経女太皇太后藤原穩子。延長元年七月二四日誕生。同年十一月一七日親王宣旨、諱寛明。同三（九二五）年十一月二日立太子。同八（九三〇）年九月二日受禪。同年十一月二日即位。承平七（九三七）年正月四

日元服。天慶九（九四六）年四月一三日禪位。天曆六年三月一四日出家、法名仏陀寿。同年八月一五日崩御。号朱雀院。

『源氏物語』梅枝巻には、明石君が調査した薫物方の特徴と由緒について、「百歩」離れたところにも届く強い香りのする薫物「薫衣香」の処方であって、「前の朱雀院」が写させなさって「公忠朝臣」が特に工夫した品、と物語られる。古注釈書『河海抄』梅枝巻勘物には、「前の朱雀院」の語に対する注釈の中で「承平の帝合香を好しめ給よし古方等々みえたり」と記述される他に、「延喜天慶間右大弁公忠朝臣藏人所小舎人大和常生相並奉合香之役」（以下、傍線は稿者記入）、公忠朝臣こと源公忠が大和常生とともに醍醐、朱雀朝に「合香之役」を勤めたとする勘物が引用される。また、事実上の朱雀院の薫物方として無銘の処方二点も記載される。これらの方は、他書との比較により薫物「黒方」と「侍従」の方であることが分かっている。『河海抄』梅枝巻勘物には、右の「黒方」「侍従」の方に続けて黒方の異名を持つ「薫衣香」方一点と、字を「侍従」と伝わる「百和香」方一点も記載される。

以上の注釈や引用によれば、物語の「朱雀院」と「公忠朝臣」は承平の帝とその「合香之役」を勤めた源公忠（人名家名等解説69頁）に比定する。つまり、この帝が所持した処方を公忠が入手して工夫し直すという物語の筋立ては、勘物に示された〈歴史的事実〉と重なることになる。

一方で、薫物書に載録された伝承には、公忠が「合香之事」を勤めたのは醍醐朝としか記されていない（注）。また、管見に、朱雀院にゆかりの品と伝わる処方の銘は「黒方」と「侍従」の二種類のみであって、それらに「薫衣香」の銘を付したり「百歩方」と称したりして載録する例は確認できない。このことは、江戸時代の書写と伝わる京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薫物秘蔵抄」においても同様である。

ただし、鎌倉時代以降に書写されたと伝わる『薫集類抄』の伝本や、それ以降の日付による類纂には、公忠朝臣が天慶年間に進上したとされる薫物「薫衣香」方が載録される。こうした伝承は後世に加筆増補されたものかと考えるが、伝承としての時代性や正統性の問題については、今後の調査の中で明らかにする必要がある。また、こうした伝

承が後になって注目され始めた経緯の究明を目指すにあたり、『源氏物語』の登場とそれに対する注釈活動との関係の有無を検証することが肝要であり、引き続き取り組む考である。

「薫物秘蔵抄」に載録される朱雀院ゆかりの処方は、前述の通り「黒方」と「侍従」のそれらであり、依拠資料は前者が「大本勅筆」、後者が「大本」と伝わる。辞書類の定義によれば、大本とは半紙の長辺を二つ折にして閉じた本で、縦約二六から二七センチ、横約一八から一九センチの大きさのもの、或いはそれ以上の大きなものを云う。いずれの処方も大本形態に装訂された冊子体の薫物書に載録されたのであって、「黒方」方は勅筆と伝わる珍重すべき伝書から写し取られたのであろう。なお、「大本勅筆」は、江戸時代前期の今出川家に伝来した筆者不明の古本一冊を、後西院自ら書写した宸筆とされる伝書に該当する可能性があり（解題18―21頁）、同時に作成されたと伝わる後水尾法皇宸翰の可能性を備えた「勅筆巻物」ともども慎重な検討を要す。

方・説 黒方方14、侍従方50

承和

（そわ）

第五四代仁明朝の年号またはこの天皇の呼称。承和の帝は嵯峨天皇皇子、母内舎人贈太政大臣正一位橘清友女皇后嘉智子。諱正良。弘仁元（八一〇）年生。同一四（八二三）年四月一九日立太子。天長一〇（八三三）年二月二八日即位。嘉祥三（八五〇）年三月一九日落飾して二一日崩御、四一歳。号深草帝。日本根本天璽豊聰慧とも号した。学問や音楽に長じたほか医方にも精通。天皇の学問には滋野貞主が東宮学士、文章博士として長く奉仕した。皇子に第五代文徳天皇や第五八代光孝天皇、八条式部卿宮本康親王らがある。

管見に、平安時代後期から江戸時代までに類纂されたと伝わる薫物書には、「承和秘方」として伝来する薫物「黒方」、「侍従」の方や「承和百歩香」方を載録するものが多い。『源氏物語』古注釈書の『河海抄』等の勘物にもそれらの同類文が引用されている。『源氏物語』梅枝巻の古いテキストには、光源氏の調査した薫物方の由緒について「そうわう」や「孫王」と記されていたらしいが、『河海抄』には、この文言を「そ

うわ（承和）」と校訂して仁明天皇にひき付けるとともに、薫物の処方を用いる等して、光源氏の処方と合香活動が仁明天皇のそれらに準拠するとの趣旨による勸物が記載される。この校訂本文と解釈は、以後の源氏学において定説化し、今日の研究においても尊重されている。薫物諸書に「承和」の処方が時代を超えて載録され続けた理由の一つとして、『源氏物語』研究史におけるかなり早い段階から、光源氏がこの帝の秘方を調査したとの説が唱えられ、源氏学者の間で肯定的に受け入れられ、通説として長く継承されたことの影響を考慮すべきであろう（注一）。

さて、管見に、「承和」の由緒を伴うか、「承和百歩香」の銘により伝来した薫物方と調査法は、『薫集類抄』から江戸時代の書写とされる専修大学図書館菊亭文庫所蔵「万方」^{〔註四〕}において、それぞれ次の通り確認できる。

- ・「承和」の薫物「梅花」 処方Ⅱ一点、同調査法Ⅱ一点
- ・「承和」の薫物「坎方（黒方）」 処方Ⅱ六点、同調査法Ⅱ二点
- ・「承和」の薫物「侍従」 処方Ⅱ六点、同調査法Ⅱ四点
- ・「承和百歩香」 処方Ⅱ七点、同調査法Ⅱ二点

右のうち、「坎方（黒方）」と「侍従」、「承和百歩香」の処方と調査法のうち、特に処方は『薫集類抄』に載録されたものの同類文がほとんど（右の処方二〇点のうち一七点は内容が重複）であり、古来珍重されて長く受け継がれたものと理解できる。これに対して、「梅花」方は『源氏物語』古注釈書『原中最秘抄』に行阿の加筆増補とされる箇所に記載されており、仁明皇子本康親王から小一条院敦明親王に伝来した「梅花黒方合する日記」なる逸書に載録されたという「承和方」であるが、『薫集類抄』以下の薫物諸書において、本方の由緒は「上手の家の方」としてしか記載されない。

前述の行阿注は、梅枝巻で紫上が調査した三種の薫物のうち、二種類は光源氏の調査した「承和」の方と源を同じくしており、「八条式部卿」本康親王にゆかりの品であり、「承和秘方」の伝わる「黒方」と「侍従」の処方と考えられることを踏まえて、残る一種の「梅花」もまた同様の由緒を持つものであると推測し、その例証の為に本康親王の「梅花」方とされる処方を用いたものであったかと考える。

本解説の「朱雀院」項（人名家名等解説73頁「朱雀院」）などで指摘したところであるが、古注釈書と薫物書との間に見られる齟齬の生じた経緯として、物語を〈歴史的事実〉に基づくものとして実証しようとの意識が働いていた可能性が考えられた。行阿注に「承和」の方と伝わる薫物「梅花」方が、専門的な他書には一般に「上手の家の方」として伝来することは前にふれた。薫物書にはいわゆる所有者未詳の処方として伝わるものが、古注釈書に仁明天皇のものとして載録された経緯として、当時の物語注釈活動の影響の有無とその実態を検討する必要がある。物語とその注釈活動が薫物文化に与えた影響の通時的解明については、今後も引き続き取り組む考えである。

京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薫物秘蔵抄」の載録方のうち「承和」を由緒や銘の一部に記載するのは、前述の通り「黒方」方17と「承和百歩香」方98の二点のみである。前者の方は『薫集類抄』以降の諸書に多数の同類文が掲載されるもので、異同がほとんど見られないことから、古い時代の処方がおおむね正確に写し伝えられてきたものと言える。『薫集類抄』のように古い時代の伝書に記載されていた「八条式部卿方承和秘方」との古い由緒を明記している点からも、そのように考えられる。後者の「承和百歩香」方98についても、『薫集類抄』以降の同銘の処方に対して処方上の異同が多くなく、古い処方におおむね忠実に写し伝えられてきたものであることが分かる。以上の点からは、書写者がこれらの処方を珍重し、より古い時代のテキストを正確に伝えたいとの意識を働かせていた可能性をうかがわせる。

以上の特徴に加えて、「黒方」方17については、依拠資料が「大本勅筆」と伝わる点を重視すべきである。「朱雀院」項に記述した通り、「大本勅筆」は江戸時代の公卿で「薫物秘蔵抄」筆者の可能性のある今出川公規が後水尾法皇から賜った、薫物書の「古本一冊」を後西院自ら書写したとされる宸筆の可能性がある。「薫物秘蔵抄」に「大本勅筆」からの写しと明記される薫物方は、平安時代の著名な合香家の処方とされる「黒方」方のみである。「黒方」は我が国の薫物文化の〈歴史〉上もとても珍重されたと見られる種類の一つであり、特に平安時代から南北朝期までの〈新作薫物〉以前の時代において高く評価されたと考えられる。宸翰の底本が平安時代の「黒方」方を中心とした類纂

であつたとすれば、「古本」と呼ばれたことに矛盾しないのではないかと考える。

方・説 黒方方17（承和秘方）、承和百歩香方98、説42

た行

中納言宗種

ちゅうなごんむねたね
チヨウナゴムネタネ

京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薫物秘藏抄」に「中

納言宗種」として秘方、秘説の伝わる人物。新作薫物の時代の人物とされることから、江戸時代初期の難波宗種（慶長一五（一六一〇）―万治二（一六五九）に比定する。

難波宗種は従一位権大納言飛鳥井雅宣（まさつら。雅胤とも）男。母不明。難波家は藤原北家師実流の称号。父雅宣は飛鳥井雅庸（まさつね）二男で初め宗勝といい、難波家一四代宗富の死後に中絶していた同家の家督を相続して再興したが、慶長一四（一六〇九）年七月、二三歳の時に勅勘を蒙り一月九日配流。同一七（一六一二）年勅免を賜いて洛中へ戻り、翌年八月三日に飛鳥井家を相続して名を雅胤と改め、更に又雅宣と改めた。

宗種は父の配流の翌年に当たる慶長一五年二月一〇日に誕生。元和三（一六一七）年正月五日に八歳で従五位下に叙され、同五（一六一九）年六月一〇日に一〇歳で元服、同日に侍従従五位上の官位を賜る。寛永四（一六二七）年四月五日、一八歳の時正五位下。翌年二月一〇日左権少将。同八（一六三二）年一月六日従四位下。翌年正月一日左権中将に転じ、同一一（一六三四）年正月六日従四位上。同一四（一六三七）年正月五日に二八歳で正四位下に叙された。同一七（一六四〇）年正月五日従三位非参議。同一九（一六四二）年正月五日に正三位に叙され、翌正保元（一六四四）年八月に位記を賜っている。翌正保二（一六四四）年一〇月二五日参議、同年一二月二五日奏慶。翌年より白馬節会の外弁に任ぜられて、同年には節会の御酒勅使、同四（一六四七）年には同じく宣命使を務め、翌慶安元（一六四八）年には雑事催と禄所に奉仕したが、同年一二月二二日に参議を辞した。同四（一六五一）年正月五日従二位。翌承応元（一六五二）年一〇月一二日に従二位の口宣案を賜わる。同三（一六五四）年四月七日に権中納言に任ぜられ、翌明暦元（一六五五）年四月七日に後西院より聴直衣の賞を賜り、翌年

て夜をや隔てむ憎からなくに」から、新作薫物「若草」が命銘、考案された可能性を指摘したことがあった（注一〇）。『源氏物語』梅枝巻において、紫上が薫物「梅花」の特別な処方の正統な継承者であり、その調査により薫物比べの判者から高く評価されたことが着想の契機となり、古い時代の薫物「梅花」を写して工夫し直して新作薫物「若草」を考案した可能性についても、今後の課題として検討したいと考えている。

方・説 黒方方40、同方調査の説16、若草方92、同方調査の説39

知恩院宮良純法親王 ↓ 八宮

轉法輪前左府

てんほうりんざのさふ
テンボウリンザノサフ

京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薫物秘蔵抄」の

「梅花」方6を、天文三（一五三四）年七月一七日に調査したとされる人物。年代と関歴から轉法輪三条実香（てんほうりんさんてうさねよし／さねか、（テンボウリンサンジョウサネヨシ／サネカ）、応仁二（一四六八）—永禄元（一五五八）に比定する。三条実香は龍翔院右大臣従一位公教（人名家名等解説91頁「龍翔院」）一男。母は不明。

文明一二（一四八〇）年叙爵。父公教は前年の四月に周防へ下向したまま戻らず、翌一三年五月には祖父の前左大臣入道実量とともに洛中の借家に居住。公教は同年二月に周防で出家していたが、実量と実香はそのことを知らなかったと云う。（以上、『宣胤卿記』同一三年五月一日条）。同一三（一四八二）年某月某日従五位下侍従。同年五月一二日正五位下。翌年七月二八日に少将を経ぬまま左中将に任じ、同一六（一四八四）年六月二〇日、一六歳で元服して従四位上に聴禁色の賞を賜う。同一八（一四八六）年二月正四位下、翌長享元（一四八七）年七月二九日従三位に叙されて公卿に列した。左中将如元。同三（延徳元、一四八九）年七月八日權中納言に任じて、同年八月二〇日勅により帶剣を授かる。翌年一〇月二三日權大納言。同三（一四九二）年二月一八日正三位。文龜元（一五〇一）年閏六月一日權中納言兼右大将。同年八月一八日従二位。同四（永正元、一五〇四）年三月一五日正二位。永正三（一五〇六）年十二月二五日右馬寮御監宣下。翌年四月九日任内大臣、同日大將如元。右大臣内大臣は官次により列せしむべき由宣下。同年五月七日、父の入道右府公教が前月（四月）八日に薨じた由を注

進して服解。同一〇（一五一三）年十一月九日転左大将。同一二（一五一五）年四月一六日任右大臣、左大將如元。同年十二月二六日従一位。翌年三月二九日辞大将。同一四（一五一七）年正月一日拝賀着陣、同日内弁一上事、伊長朝臣より鬼間にてこれを仰せ。元日内弁。翌年五月二八日転左大臣。同一六（一五一九）年一〇月七日輕服、一〇月一〇日拝賀着陣。御即位日時并擬侍従定奉行。翌大永元（一五二二）年三月二日御即位内弁并即位叙位執筆。同年七月一日左大臣を辞退。同三（一五二三）年閏三月一六日本座。天文四（一五三五）年八月二八日任太政大臣。同五（一五三六）年二月二日聴輦車陣宣下。同月二三日拝賀、同日聴輦車。消息宣下。同年六月二五日太政大臣を辞退。同六（一五三七）年二月八日出家、六九歳。法名諦空。定法寺法務戒師。永禄元（一五五八）年二月二五日薨去、九一歳。『続史愚抄』に浄土寺と号した由が伝わる。

今日まで伝来している実香の著述の多くは、有職故実と和歌の分野において行われる。有職に関しては、「白馬節会職事要」と永正二（一五〇五）年奥書「十六日節会次第」、「南殿御装束略式」各一冊が伝来する。和歌については、文龜二年から享禄元年までの作とされる詠歌が多数残されている。後柏原朝の永正四（一五〇七）年六月二五日付けで伏見宮邦高親王等と共に詠進した百首歌の他、永正六（一五〇九）年から享禄元（一五二八）年までに開催された、少なくとも一七回の和歌御会への出詠等が確認されており、後柏原、後奈良兩朝を中心とした時期に活躍した廷臣歌人の一人に数えられる。

実香の歌人としての素養は、天皇に近似する律令官人に必須の教養として、在京中の父公教や、同居していたとされる祖父実量によつて養われたと考えるのが自然であろう。公教は在京中に阿野公瀬らとの勸進歌や寛正五（一四六四）年仙洞三席御会、文明五（一四七三）十一月七日按察使親長家歌合に出詠している他、五十首和歌を類纂して義政に合点を加えられている。実量は『新統古今和歌集』作者でしばしば御会詠草に合点する等、当時の歌壇において存在感を示している（注一一）。

和歌以外の分野における実香の文学活動については、永正一七（一五二〇）年に完成したと見られる『清水寺縁起』に、甘露寺元長等とともに詞書を寄せ書きしたとされる他、『実隆公記』大永八（一五二八）四月八日条に後柏原天皇三回忌法会の経供養の願

文を清書したとも伝わる（注二）。

天文二（一五三三）年一〇月一九日に実香が子息公頼とともに後奈良天皇に対して薫物の秘方を伝授したことは、『後奈良院宸記』や『言継卿記』、『御湯殿上日記』等の史料に記録される。右の史実については、中世の禁裏文化に関する先行研究において考察の対象となされてきた（注三）。轉法輪三条家が南北朝期の三条家当主の蒐集した薫物の「故実」を継承し、禁裏を始めとする上層社会においてその道の師範としての役割を果たして来たとする伝承は、江戸時代以降に刊行された薫物書の板本や近代以降の鳩居堂広報物により、その道の好事家を始めとする人々の間でよく知られてきた（注四）。公敦が、和歌だけでなく薫物の道においても最も身近な先達として実香に影響を与えていたことは、想像に難くない。

『実隆公記』には、公敦が三条西実隆に対して周防から薫物を送り届けたことが記録される。各地の文書館や図書館等には、室町時代後期以降に実香が類纂、書写したとされる多数の秘伝書が伝来しており、それらによれば、三条家の歴代当主は、南北朝期から皇室の薫物の師範役を果たして来たとされる。また、轉法輪三条家においては、公敦父実量のが家伝の薫物書を書写することがあったとされる他、公敦が、後土御門天皇や足利義植等の為にこうした秘伝書の書写や秘方の伝授を行ったと伝わる（注九の1「薫物（黒方秘方）」及び拙稿）。

管見に、実香は文龜三（一五〇三）年から享祿二（一五二九）年までの間に、少なくとも七回の類纂又は書写を行い、後奈良天皇を始めとしたその時々有力者や好事家らに贈ったとされる。また、それ以後の時期にも、「実香孫姫」なる人物を始めとした人々が、実香自筆の薫物書を書写した等と云う（注九）。実香の所持した秘方、秘説や秘伝書は、実香の亡くなる以前から、その道の愛好者の間で珍重された可能性が高い。

轉法輪家の直系は、実香子息公頼が周防で横死して以来しばらく途絶え、薫物についても皇族や同じ三条流の他家がその師範としての役割を果たすようになる（人名家名等解説71頁）。合香家としての実香と轉法輪家に対する評価は、江戸時代の公家社会においても維持されていたらしく、当時の類纂ないし書写と伝わる薫物諸書には、実香にゆ

かりの品と伝わる処方や説が数多く載録される。江戸時代前期の今出川家において類纂された可能性のある「薫物秘蔵抄」にも、龍翔院公敦や実香の考案ないし所持した薫物方とされる記述の他、公敦よりも前の三条家当主によるとされる処方等も載録される。「薫物秘蔵抄」には実香ゆかりの方として「梅花」方6が載録される。実香の秘方、秘説とされるものは多く伝来し、それぞれに同類文も複数確認できるが、本方については管見に同類文を確認できていない。依拠資料は「半切 白表紙」とある。書中の別の箇所「白表紙半切」とされる伝書に同じものかと考える（解題16—18頁）。「薫物秘蔵抄」には「梅花」方6以外にも他の伝書に載録されない独自の処方が多数確認できる。それらの依拠資料の特定や来歴の究明に向けて、引き続き努力したいと考えている。

実香が和歌文学活動に注力していたことは前に述べた。実香の詠作と伝わる和歌のうち、「乞巧奠」と題した次の一首には、空薫物が次のように詠まれている。

乞巧奠 　ほしあひの空たき物の煙もや
雲の衣のにほひそふらん 　実香（注二五）

平安時代の歌合では、左右それぞれの趣向に合った薫物を薫き匂わせて、歌とともに香の優劣を競うことが行われたとされる。また、当時の勅撰歌人のうち、優れた合香家としての業績や評判も伝わる人々の中には、薫物の贈答や賞翫を契機とした詠作を行ったり、薫物によってより文化的活動の範囲を広げたりしたと考えられる（注六）。和歌と薫物を関連付ける趣向は後の時代にも行われた可能性があり、薫物書に伝わる逸話によれば、実香父公敦は、後土御門院や足利將軍に薫物を伝授した後に、院や將軍と薫物を主題とした和歌を贈答したと云う（注七、及び注九の1「薫物（黒方秘方）」並びに拙稿）。

前掲の和歌が実際に実香の作であったとすれば、天皇の師範を拝命した合香家が詠むのにふさわしい内容と言えるだろうし、こうした和歌を披露した場において、自身が工夫を凝らした薫物の香りを実際に空薫きして披露するなど、歌の心を香りによって具現化するような趣向が行われたとすれば、歌会の場に一層の興を添えたものと想像する。

方・説 梅花方6

な行

難波宗種 ↓ 中納言宗種

二条関白

にとうわんはく
にじうかんぱく

從一位関白太政大臣藤原教通。長徳二(九九六)年—承保二(一〇七五)年。関白太政大臣道長五男、母一条左大臣源雅信女從一位倫子。長徳二年六月七日誕生。寛弘三(一〇〇六)年二月五日元服、即昇殿、一六日侍従。長和四(一一一五)年二月二日正二位。治安元(一一二二)年七月二五日内大臣。永正二(一一〇四)年八月一日右大臣。康平三(一一六〇)年七月一七日左大臣。治暦四(一一六八)年四月一六日関白。延久二(一一七〇)年三月二三日太政大臣。承保二(一一七五)年九月二五日薨去、八〇歳。号大二条殿。

長和元(一一一二)年、一六歳の時に藤原公任(人名家名等解説67頁「公任卿」)女を北の方に迎えて子息子女に恵まれたが、万寿元(一一二四)年に死別。二年後の万寿三(一一二六)年に三条天皇女二宮綏子内親王の降嫁を賜る。子息のうち信長は太政大臣に昇ったほか、子女の真子は後朱雀天皇に入内して女御となり、歆子は後冷泉天皇に入内して皇太后に昇るなど、一族は繁栄した。

『薫集類抄』上巻には道長二男とあり、教通ゆかりの「梅花」、「侍従」、「黒方」の三種の薫物方が載録されて、いずれも治暦四(一一六八)年四月六日に調合されたと伝わる。調合した人物については特に明記されないことから、教通自身と解釈されよう。同年四月一七日に女御歆子は皇后となり、教通はその前日に関白に任じている。こうした慶事の趣向として教通が自ら薫物を調合し、完成品を祝いの品として周囲にふるまった可能性は検討に値する(注一)。

京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薫物秘蔵抄」には「侍従」方53の末尾に朱筆で「右一方堀川右大臣 二条関白治暦四年四月六日」とあり、直前の「侍従」方52とともに「勅筆巻物」(解題18頁)から抄出した方として伝わる。方53は朱筆に云う通り『薫集類抄』等に堀川右大臣藤原頼宗(人名家名等解説86頁)のものとされる処方に一致するが、

これらの古い伝書に伝わる二条関白方とは一致しない。ただし、直前の方52は二条関白方に一致する。以上のことから、朱筆による注記は、方53は堀川右大臣方、方52は二条関白方であることを言わんとし書かれたものと推察されるが、「堀川右大臣方は二条関白方と同じである」との誤解を招く書き方である。「薫物秘蔵抄」と同じ今出川家に伝来した「万方」(注四)は、「薫物秘蔵抄」の同類文を多数転載し、伝来の過程で緊密な関係にあったものと想像されるが、「万方」に見られる別分量の処方にも、由緒の中に堀川右大臣と二条関白の名前が併記される。両書の一方が他方の類纂における依拠資料として用いられた可能性を示唆する記述の一つとして注意を要す。

方・説 侍従方53(但し、実際は侍従方52が二条関白方か)

仁明天皇 ↓ 承和

後白川右府

のちのしろかほうふ
ノチシラカフウフ

轉法輪三条公冬。元名公量、又公光。入道太政大臣実冬二男。母は家女房。応永一九年(一一四二)非参議、正月五日從三位に叙される。同日左

中将如元。一月日正三位。同二〇(一一四三)年正月五日從二位、中将如元。二月一日權中納言。同二一(一一四四)年六月一日、夕立、將軍足利義持が公量の三条亭に渡御すること有り『満濟准后日記』。同二二(一一四五)年二月一日權大納言。

同二三(一一四六)年正月六日正二位。同二四(一一四七)年一月一日、名を公光と改む。同二六(一一四九)年六月二日には一条室町で公量下僕の青侍と幕府の近習関口某との間に争いが起こり、多数の負傷者と死者が出た。將軍義持はこれ聞き関口某を厳しく叱責。公量は將軍の処置に大層感心したと云う『看聞日記』。同二七(一一四二〇)年閏正月一〇日左大将。右大臣二条殿持基の辞退により替えとして任じたと云う『康

富記』。同二三日内大臣。左大将如元。二月某日大将を辞す。二月五日右大臣に転ず。内大臣初任の年に右大臣に転任した初例として注目された『看聞日記』同年二月四日、七日条、『康富記』同年同月五日条。同二九(一一四三)年正月五日從一位に叙される。同三〇(一一四三)年八月又は一〇月一四日に右大臣を辞す。同三一(一一四二五)年四月二五日本座宣下。三公(太政大臣、左大臣、右大臣)本座の初度。正長元(一一四

二八) 年七月二八日、伏見宮貞成親王(後崇光院) 御子で後小松院養子となった彦仁王(後花園天皇) の踐祚の儀を、宮中觸穢により三条公光第を新内裏と為して行(『椿葉記』)。後花園院永享三年、名を公冬と改む。嘉吉四(文安元、一四四四) 年本座。文安六(宝徳元、一四四九) 年に五八歳とあり、『公卿補任』において初めて年齢が記載される。宝徳四(享徳元、一四五二) 年六一歳。享徳四(康正元、一四五五) 年条に某月某日六五歳で出家とあるのは、文安六年、宝徳四年の年齢に対して一年不足している。長祿三(一四五九) 年五月一七日薨去(宝徳四年条に記載)。享年は、宝徳元年及び享徳元年条の年齢が正しければ六八歳、出家時の年齢が正しければ六七歳となる。『管見記』同年五月二一日条に享年七七歳とあるのは誤りであろう。

公光は後花園天皇を筆頭に將軍足利義教も交えた『永享百首』に出詠しており、後花園朝の寵臣歌人の一人と目される。著述に『八幡一社奉幣記』があり三条家に伝来したとされるが、原本の所在が不明であり、内容についての詳しい報告も行われていない。ただし、『実隆公記』永正五(一五〇八) 年三月一日条には、同名の資料である「八幡一社奉幣記」、「寛元記」、「公光卿記」等を寛城法師に貸し与えたこと、翌日条に寛城が参り「一社奉幣記」に目を通したこと、また五日条に寛城、宣賢達が来て「寛正八幡一社奉幣常盛記(寛正(記))」、「八幡一社奉幣(記)」、「常盛記」と区別して読むべきか」を書写して宣賢が持参したことが記述される(注六)。『実隆公記』の「八幡一社奉幣記」又は「八幡一社奉幣(記)」が、三条家に伝来したとされる同名の書と同じものであったとすれば、正親町三条家庶流である三条西家に実隆の代に原本又は写本が伝来しており、祭祀の先例を記した書物として同家の周辺で珍重されたものと想像される。また、実隆がこれと一緒に寛城に貸し与えたという「公光卿記」が轉法輪三条公光(公冬)の著述であって、祭祀についての著述とともに伝来し参照された可能性は検討に値する。公冬は、轉法輪三条家における薫物の(歴史)を記した伝承において、禁中に薫物の口伝を申し入れた一人として現れる人物である。南北朝期の三条家当主白川入道右府実親の蒐集した薫物の故実を基に三条家で類纂されたという『薫物故書』(注二)には、禁裏の所望により、「後白川殿」こと公冬が、祖父公忠と父実冬による奥書を備えた秘本を

用いて、そこに伝わる口伝を悉く申し入れたところ、今度は写本を進上するようにとの仰せがあり、奥書から寸法まで原本と全く同じ上下二冊を進らせた、と云う。写本を作成したのは公冬子息実量と推定される。なお、拙著『薫集類抄の研究』(注二) 411頁において、『薫物故書』の伝承に公冬が「後白川入道右府」と称されていたとの前提により、公冬に口伝の申し入れを所望したのは後花園天皇であろうとの私見を示していたが、「後白川入道右府」の呼称は後世の伝書に記載されるのであり、『薫物故書』には「後白河殿」としか記されておらず、後花園天皇に特定する根拠としたのは誤りである。公冬は後小松院による院政の敷かれていた称光朝と、後花園朝を中心とする時期に活躍し、前例の無い累進や厚遇に与る程の寵臣であった。薫物の口伝の申し入れが行われた時期と、これを所望した天皇の特定には、関連する史実や伝承の探索を行いながら、一層慎重に取り組む所存である。

京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薫物秘蔵抄」には、「後白川右府新作」等と伝わる新作薫物三種類「蓮葉」、「玉椿」及び「若草」の処方各一点が伝来する。後白川右府公冬が新作薫物を考案したとする伝承は、三条家の秘方秘説の類纂と伝わる複数の他書にも確認できるが、ここでは「玉椿」と「若草」という「新調合之秘説」を調査したところ、か記されておらず(注九の1「薫物(黒方秘方)」)、「蓮葉」の考案者を公冬と伝えるのは管見に「薫物秘蔵抄」のみである。こうした伝承同士の比較検討による伝承としての正統性の検証を始めとして、公冬と薫物との関わり、特に新作薫物の発祥と普及への関与の実態の究明に向けて、引き続き努力したいと考えている。

方・説 蓮葉方130、玉椿方131、若草方132 (同)

後徳大寺左府

のちのくたいしきふ
ノチノトクタイシキフ

藤原実定。大炊御門右大臣正二位公能一男、母故権中

納言俊忠女。長暦三(一一〇三九) 年―建久二(一一九二) 年。永治元(一一四一) 年二月二六(八イ) 日従五位下、無品禰子内親王給、三歳。久安二(一一四六) 年正月七日従五位上、前待賢門院御給、八歳。同五(一一四九) 年四月九日左兵衛佐、一一歳。同七(仁平元、一一五一) 年正月二日正五位下、朝覲行幸賞、暲子内親王給、一三歳。

仁平二（一一五二）年正月二八年左少将、一四歳。同三（一一五三）年正月二一日兼伊予權介。同四（久寿元、一一五四）年正月五日、近衛府の勞に依り從四位下に叙される、一六歳、于時無五位将。久寿二（一一五五）年正月六日從四位上、前待賢門院未給、一七歳、少将。同年十一月二二日正四位下、東宮御給、一七歳。保元元（一一五六）年九月一七日左中將（左權中將イ）、一八歳。同年一〇月二七日兼中宮權亮、同年十一月三日叙從三位、左中將如元、中宮立后後始入内賞、權亮。同二（一一五七）年正月廿四日但馬權守。同三（一一五八）年二月三日兼皇后宮權大夫、同九日叙正三位、皇后宮御入内賞、同月二二日任權中納言、皇后宮權大夫如元、不歷參議。同年八月一日轉皇后宮大夫。同四（平治元、一一五九）年二月一三日止大夫、院号。平治二（永暦元、一一六〇）年正月二一日兼右衛門督、同年二月二八日為別当、同年七月二四日辞督別当、同年八月一日轉正、同二（応保元、一一六一）年八月一日服解、応保二（一一六二）年八月一七日從二位、行幸故右大臣大炊御門第賞、長寛二（一一六四）年閏一〇月二三日任權大納言。同三（永萬元、一一六五）年八月一七日辞納言、叙正二位。同年一〇月二八日蒙本座宣旨。同二（仁安元、一一六六）年正月二二日皇后宮大夫。嘉応二（一一七〇）年七月二八日皇后宮大夫を辞して藤原俊成に譲る。安元三（治承元、一一七七）年三月五日還任、任大臣次宣命、同年二月二八日任左大将、除目。寿永二（一一八三）年四月五日任内大臣、無兼宣旨并大饗、同月九日左大将如元。同年一月二二日被任替、停内大臣左大将。同三（元暦元、一一八四）年正月二二日還任、左大将如元。文治二（一一八六）年一〇月二九日轉右大臣、左大将如元。同年一月某日辞大将。同五（一一八九）年七月一〇日轉左大臣。建久元（一一九〇）年七月一七日辞職、以男左中將公繼申任參議。同二年六月二〇日身病に依り出家。法名如圓。同年二月一六日『尊卑分脈』又は閏二月一六日薨去、五三歳。号後徳大寺。

九条兼実の日記『玉葉』承安二（一一七二）年二月八日条によれば、実定が「花園左大臣記」八十余巻と「四条戸部記」百余巻を殊に秘藏して披露せず、これらの他にも和漢の本書抄物を一万巻余も所持したことを弟の実守が明かしており、藏書家として知られたらしい。三条西洞院の実定邸は安元三（一一四五）年四月二八日に洛中で発生し

た火事により焼亡。邸内に収蔵された豊富な文書もこの時焼失したという（注二七）。著述に日記『槐林記（庭槐抄）』があり、治承元（一一七七）年から寿永二（一一八三）年までの五年分のうち一部が伝存する。

和歌文化活動における実績と評価は高く、平安時代末期から室町時代までの勅撰集及び鎌倉時代後期の私撰集にのべ九九首が入集するほか、家集『林下集』が編まれた。『古今著聞集』には、嘉応二（一一七〇）年一〇月九日に住吉社に奉納された歌合に歌人として参加した折の逸話として、実定の出詠歌「ふりにける松物いはごとひてましむかしもかくや住の江の月」に対して判者の藤原俊成が感じ入り、世間においても高く評価されたと伝わる。実定の逝去から数十年後に成立したとされる『無名秘抄』には、実定の人物と和歌を酷評する逸話や評伝が記載されており（「無名大将事」、「歌人不可證得事」、評価は必ずしも一定していなかったらしいが、以後も室町時代まで多くの勅撰集等に入集し続けたことにも明らかなように、平安末期から鎌倉前期の歌壇における代表的な廷臣歌人の一人と評価される（注二八）。なお、実定は雅楽にも長じたらしく、多好方から神楽歌の秘曲を相伝し、子息公繼に伝授したとされる（『神楽血脈』）。

管見に、実定の薫物に関する伝承が記載されるのは京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薫物秘藏抄」のみである。同書に「公任卿方」（人名家名等解説67頁「公任卿」として載録される六種類、七点の薫物方の書写者識語に「寛文八年十一月一日後徳大寺左府書借写之了秘方也（寛文八（一一六八）年十一月一日、後徳大寺左府書借りてこれを写しおはんぬ、秘方也）」との記載があり、今出川公規が、実家である徳大寺家に伝来した「後徳大寺左府書」を拝借して写し、「薫物秘藏抄」に記載した可能性が考えられる（解題22頁）。処方のうち「黒方」方100は『薫集類抄』等の薫物諸書に載録される著名な処方の同類文で、『薫集類抄』の同類文には「公任卿」方に同じとする伝承も記載されており、「薫物秘藏抄」の方100とは処方の内容と由緒のいずれも重複する。「侍従」方101は茶道上田宗箇流上田家に収蔵される伝書の載録方の同類文であり、その他の処方は他書に同類文が確認できない。以上の特徴から、「後徳大寺左府書」の逸文は、他書にほとんど伝来しない珍しい処方を中心とした内容であるが、平安後期の類纂と伝

わる伝書の内容に対して重複も見られることから、後徳大寺左府実定の蔵書と言われるだけの時代性を備えていると評価できるのであって、或いは、『薫集類抄』の典拠の一つと依拠資料を共有した可能性についても考慮すべきかと考える。

今出川公規の日記『公規卿記』の現状には、寛文八（一六六八）年の条文が伝来せず、公規の当日の動静について明らかにするのは困難な状況にある。ただし、日記の他日の記述には、公規が薫物や医薬の調合に熱心で評判も高く、貴重な薫物の伝書を所持しており、禁裏に進上して宸翰、宸筆による写本を褒美に頂戴したこと等が記される。菊亭文庫には数十点の薫物の資料がまとまった形で伝来しており、それらの内の複数が、公規の存命中の日付による書写者識語を伝えていることから、公規が当時の上層社会において合香家として活動、活躍していた可能性は高い。

今後の調査研究においては、「後徳大寺左府書」の伝本や他書における逸文の探究による『薫集類抄』との比較検討も視野に入れて、公規の薫物に関する動静の調査も引き続き実施したい考えである。

方・説 黒方方100、侍従方101・102、落葉方103、梅花方104、荷葉方105、菊花方106
(以上、公任卿方、後徳大寺左府書、云々)

は行

八条大将 はちてうたいしやう
ハチジョウタイシヨウ 藤原保忠。寛平三（八九一）年—承平六（九三六）年。左

大臣藤原時平一男、母八条宮本康親王（人名家名等解説83頁「八条宮」）女従四位上廉子女王。延長五（九二七）年正月一二日中納言従三位春宮大夫兼左衛門督。同八（九三〇）年十一月二日正三位。十二月一七日大納言。承平二（九三二）年八月三〇日兼右大臣。同六（九三六）年七月一七日薨、四六歳。号八条大将、賢人大将。

『続教訓抄』等の楽書や『花鳥余情』に伝わる音楽伝承によれば、延喜五（九〇五）年正月二日、保忠は醍醐天皇の御前に召されて笙の笛を演奏し、仁明天皇（人名家名等解説74頁「承和」）が若き日の昭宣公藤原基経に賜った名器「橘皮」を授かったと云う。『源氏物語』柏木衛門督の準拠した人物の一人とされる（『河海抄』柏木卷勘物）。

大臣宣旨を蒙って間もなく薨じたとも伝わる（『続古事談』）。

薫物諸書には合香家「八条大将」ゆかりの方や説が複数伝わる。保忠の人物についての諸書の勘物には、藤原撰関家の子息であるとともに、八条宮家との血縁関係が強調される。『薫集類抄』の薫物「侍従」方49には、保忠を八条宮の方の継承者の一人とする説が引かれた上で、八条宮が仁明天皇から伝えたとされる方の内容が保忠の方に一致しないことが指摘され、保忠が仁明天皇の方、あるいはその正説を伝えた可能性について疑うべきかと記述される。また、同書の裏書勘物Cの筆者は、藤原公任（人名家名等解説67頁「公任卿」）が継承したとされる薫物「梅花」方の来歴について、保忠から三条右大臣頼忠を経て公任へ渡ったかと案じている（以上、注二）。

保忠ゆかりの品と伝わる秘方、秘説は『薫集類抄』以降の諸書にも伝来している他、『源氏物語』古注釈書の『原中最秘抄』梅枝卷勘物にも記載があり、物語の光源氏が聞き伝えた「孫王」の薫物方が、皇族の子孫である保忠の処方であって、そのため紫上が相伝した八条式部卿の方に一致したのであるとの、「公世卿」説の傍証として引かれる。京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薫物秘蔵抄」には薫物「黒方」方13と「侍従」方49の二点が載録される。「黒方」方13は『薫集類抄』等にも伝来する著名な保忠方の同類文であるとともに、南北朝期の写本とされる宮内庁書陵部所蔵「薫物方」（注一、注二）に舍人大和常生ゆかりの方として伝わる処方に一致する。「侍従」方49は『薫集類抄』や三条家の類纂と伝わる『薫物故書』（注三）に朱雀院（人名家名等解説73頁「朱雀院」）または東三条院藤原詮子の処方として伝来するものの同類文で、それら以外の他書にも載録されるが、由緒の明らかにされないものが多く確認できる。本方が確かに八条大将方として伝来したものであるのか、その検証も含めて、本書の依拠資料の究明には引き続き調査による新出資料の探索を行うことが肝要である。

方・説 黒方方13、侍従方49

八条宮

はちてうのみや
ハチジョウノミヤ

本康親王。新作薫物の時代の薫物書には、八条宮智仁親王（天正七（一五七九）—寛永六（一六二九））の秘方秘説とされるものが多く伝来するが、京

都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薫物秘蔵抄」における「八条宮」の処方^九は全て、平安前期の皇族で合香家として著名な本康親王（天長九（八三二）以前・延喜元（九〇一）の所有ないし考案したとされるものの同類文である。

本康親王は仁明天皇（人名家名等解説74頁「承和」）皇子。母滋野貞主女従四位上滋野繩子（『文徳実録』仁寿二（八五二）年二月八日条、『薫集類抄』上巻梅花条。繩子は『本朝皇胤詔運録』、『代要記』に綱子、『花鳥余情』梅枝卷勘物に温子）。一説に母は紀名虎女静子（『原中最秘抄』及び『河海抄』梅枝卷勘物）とも伝わる。

承和三（八三六）年十一月三日近江野洲群の地を賜う。同四（八三七）年正月二二日、河内の廢田を賜う。同一五（嘉祥元、八四八）年四月一四日、源朝臣冷とともに清涼殿にて元服。嘉祥二（八四九）年正月七日、无品から四品を授かる。同三（八五〇）年正月一五日上野太守。同年五月一七日上総太守に転ず。貞観二（八六〇）年二月一四日彈正尹、上総太守如元。同五（八六三）年二月一〇日兵部卿。同月一四日勅賜帶剣。同一三（八七二）年正月七日三品。同一八（八七六）年太宰帥、兵部卿如元。元慶七（八八三）年正月七日二品。同八（八八四）年三月九日式部卿。仁和五（寛平元、八八九）年一〇月又は十一月三日日聰輦車。延喜元年十二月一四日一品式部卿の時薨去（『日本紀略』、『扶桑略記』）。号八条宮（『本朝皇胤詔運録』）。

藤原師輔の日記『九記（九暦）』の逸文に「式部卿本康記」、「中務^{本康}家」とあり（『西宮記』第二、正中中、女叙位）、宮の日記と称する記録が伝来しており、また存命中に中務卿に任じた可能性が伺える。『菅家後集』に親王の七絃琴の音色を賛美し、また惜しむ漢詩が伝わる（感吏部王彈琴、「奉哭吏部王」）。『古今和歌集』巻第七に親王の七十賀の席で詠まれたと云う紀貫之の和歌が採録されることから、生年は天長九年以前と推定される。子息子女に雅望王や左大臣藤原時平室廉子女王等が、孫に合香家としても知られる平随時や八条大将藤原保忠（人名家名等解説82頁「八条大将」）がある。

『薫集類抄』以下の薫物諸書にのべ三一点の処方と六 points の説とが伝来。これらの処方の内、大半は『薫集類抄』に載録された七 points が重複したものであり、重複分を除くと一八 points となる。また、八条宮の方や説と伝わる記述は平安時代後期から江戸時代までの類

纂と伝わる薫物諸書のほとんど全てに載録される他、『源氏物語』古注釈書の勘物にも処方や説、また人物伝が引用される。八条宮の合香家としての長きにわたる評価の高さとともに、『源氏物語』が以後の薫物文化に及ぼし続けた影響の大きさが推し量られよう。

八条宮の父仁明天皇は漢学や音楽に長じて学芸を奨励し、医薬方にも精通したとされる名君であった。『薫集類抄』には、我が国の薫物文化の伝承上の始発期として位置づけられる平安時代前期の合香家として、本康親王の遺業が伝わる。親王の母は、嵯峨朝の寵臣で仁明天皇の学問を東宮時代より支え続けた滋野貞主の子女繩子である。貞主は合香家滋宰相としても知られる人物で、仁明天皇と同時代に合香方や調合法を考案したとされる。親王は父帝の薫物の秘方秘説と同じものを所持したと伝わり、『源氏物語』にも、この伝承との整合性を備えた内容による秘方秘説の相伝が物語られていた。ただし、仁明天皇の秘方は「不伝男（男に伝へざれ）」との御禁制を伴う。男子である本康親王が父帝の秘方を入手したとされる経緯については薫物諸書に記載されていない。物語の古注釈書においても究明されて来なかったが、近代以降の物語研究においては、宮が父帝から音楽などの薫育を授かったと考えられることから、薫物についても、その道の最も身近で優れた先達である父帝から手ほどきを受けた可能性が指摘されている（注二九）。

京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薫物秘蔵抄」には「八条宮」、「八条式部卿宮」が所持したとされる薫物「黒方」方15、16、17及び「侍従」方58の四点が載録される。これらのうち、「黒方」方15は『薫物故書』^{（注一）}に、方16は「香秘書」^{（注二）}や『薫物故書』等に載録されたものである。「黒方」方17と「侍従」方58は『薫集類抄』以下の多数の諸書に伝来する有名な処方^九で、前者は秘方と伝わるものの同類文である。依拠資料は「黒方」方三点が「大本勅筆」、「侍従」方一点が「勅筆卷物」と伝わる。これらは、今出川公規が禁裏に進上した二 points の秘蔵書のうち、筆者不明の古本を後西院が書写した宸筆、ならびに轉法輪三条実香（人名家名等解説77頁「轉法輪前左府」）の真蹟を後水尾法皇が書写した宸翰の可能性がある（解題18頁）。

八宮

はちのみや

天皇の第八番目の皇子。薫物諸書では管見に京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薫物秘蔵抄」の紙背にのみ呼称と処方一点の見える人物である。処方の銘は明記されないが、前後の処方の配置状況から薫物「梅花」方と見なすことができる。ただし、処方には沈や甲香等の伝統的な「梅花」方に処方される香具が配合されず、代わりに伽羅や阿仙薬といった、新作薫物に顕著な香具が含まれることから、いわゆる練香状ではなく散薬状に仕上げ、匂い袋等の具材として用いたものかと考える。また、菊の花が二分ほど処方されることから、薫物「梅花」ではなく「菊花」等の銘により考案された可能性を検討すべきかと考える。

八宮は新作薫物の時代の人物である。また、本書の類纂は紙背への書入も含めて寛文八（一六六八）年から遠からざる頃に行われた可能性がある（解題14―16頁）。ここで仮に、新作の考案が行われ始めた時期と見られる室町時代中期から江戸時代前期の寛文年間までの期間に絞って「八宮」を探索した場合、後土御門院から正親町院（人名家名等解説63頁）までは第八親王を持たず、後西院第八皇子桂宮尚仁親王（寛文一一（一六七一）年誕生、元禄二（一六八九）年薨去）は当時まだ若年であり、霊元院第八皇子清宮（元禄元（一六八八）年誕生、元禄六（一六九三）年薨去）は夭折したこと、後陽成院第八皇子知恩院宮良純法親王（慶長八（一六〇三）年誕生、寛文九（一六六九）年薨去）に行き当たる。

ただし、「八宮」の薫物について確認できているのは処方一点のみであることや、処方の内容に対して銘が不相応な印象を与えており、誤伝の可能性を含めて検証を要すること、また「八宮」が「八条宮」等の誤伝であった可能性は否定できず、良純法親王の履歴における合香活動の事跡についても探索中であることから、現時点で「八宮」を良純と推定し、その合香活動について考察するのは軽々と言わざるを得ない。「八宮」の人物と処方については、今後の課題として引き続き調査研究に取り組みたい考えである。

日野

ひの

日野家の人物。京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薫物秘蔵抄」には薫物「薫衣香」方¹⁴⁶の由緒について「日野方」とある。処方の同類文は、同書と同じ今出川家に伝来した専修大学図書館菊亭文庫所蔵「万方」^{〔注四〕}にも転載されており、そこでは匂袋の処方として転載された可能性がある。薫衣香が匂袋の具材として用いられたことによるのであろう。

「薫物秘蔵抄」には他に日野家にゆかりの品と伝わる処方等は転載されないが、「万方」には同じ「日野方」と伝わる説の他に、「日野唯心」の「千方」方一点とその調査法一点が記載される。唯心とは、江戸時代権大納言正二位日野輝資（弘治元（一五五五）―元和九（一六二三））の法名である。また、菊亭文庫の他書や三条家の秘伝書と伝わる諸書には、足利將軍義政（永享八（一四三六）―延徳二（一四九〇））の正室日野富子（永享一二（一四四〇）―明応五（一四九六））が、義政の逝去後と思しき時期に考案したとされる新作薫物「有明」と「長月」の処方も伝来する。

以上の伝承から、日野家では室町時代から新作を調査する等合香に力が注がれており、こうした時代に蒐集された秘方秘説が戦国時代の後裔にも伝来して日野家の薫物の礎となり、合香家として実績と評判を残す人物を輩出した可能性は、検討に値する。

枇杷左大臣

ひばりさだいじん

藤原仲平。貞観一七（八七五）年―天慶八（九四五）年。

関白太政大臣昭宣公基経二男。母仁明天皇（人名家名等解説74頁「承和」）皇子四品禪正尹人康親王女。同母兄に時平、異母弟に忠平がある。寛平二（八九〇）年（『公卿補任』に仁和三年または二年）二月一三日、殿上で宇多天皇より元服を加えられ、宸筆の正五位下位記を賜るとともに、触首にあずかる（『日本紀略』等）。同年四月一日侍従、閏九月二〇日左衛門佐。同四（八九二）年二月二〇日左少将、聴禁色。同八（八九六）年正月二六日權中將。同九（八九七）年六月一九日右中將、權守元の如し。昌泰二（八九九）年三月七日兼中宮大夫、同年一〇月四日昇殿。延喜元（九〇一）年三月一九日藏人頭。翌年二月一二日兼備前權守。同八（九〇八）年参議。翌年九月二七日左衛門督を

兼ねる。同一五（九一五）年、比叡山無動寺に等身不動明王像と三間の仏堂を建造し奉る『四大寺伝記』。同一七（九一七）年二月九日中納言從三位兼春宮大夫、左衛門督。

延長元（九二三）年三月某日止春宮大夫。同年正月二九日大納言正三位兼按察使。承平二（九三二）年八月三〇日、右大将から左大将に転ず。同三（九三三）年二月一三日右大臣兼左大将。同六（九三六）年三月一三日醍醐寺に塔心柱六枝を送る『醍醐寺雜事記』所引『李部王記』同日条。同年二月八日、右大臣從二位兼左大将の時、藏人所別当に補される。翌七（九三七）年正月二二日左大臣に転じて左大将元の如し。天慶二（九三九）年十一月八日聴輦車。同六（九四三）年正月二九日、左大臣正二位の時、正室藤原善子の四十九日法事を極樂寺にて修す『春記』、『願文集』。同七（九四四）年二月二日、仲平子女有明親王室曉子『尊卑分脈』、『本朝皇胤詔運録』に時子）が仲平の七十算を賀す『日本紀略』。同八（九四五）年九月一日出家、法名靜覺。同月五日薨去、七一歳。枇杷左大臣または枇杷大臣と号す。子に無動寺僧都遍敷（または遍敷）、有明親王室曉子（または時子）、中納言藤原敦忠室從四位明子がある。（注）

比叡山無動寺に供養を施しており、子息の僧都が同寺に住んだこと、延喜一六（九一六）年六月二六日以前に比叡山律師無空と相知り、法華經一部を書写せしめ供養したとされる『日本往生極樂記』他、無空との間で多年に渡り師檀の契を結んだとも伝わる『今昔物語集』ことなどから、天台宗を篤く信仰したことが伺える。『古今集』から『新千載集』までの勅撰集に一一首入集。『伊勢集』等の贈答歌や詞書、『大鏡』等に記載される伝承等から、歌人伊勢との関係が知られる。後世に、広大な枇杷殿を有して倉庫に珍宝を納めた「富饒人」（『江談抄』）と評され、また「無才富人」（『玉葉』）とも酷評される。

仲平の薫物方やそれにまつわる伝承は、管見に平安後期類纂と伝わる『薫集類抄』と南北朝期の書写によるとされる『薫物方』（注一、注四）、並びに江戸時代の菊亭家で類纂された可能性のある京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薫物秘藏抄」に伝来する。『薫集類抄』では、「不知誰人」の薫物「菊花」方58に、薫物「菊花」に関する清慎公藤原実頼の言説とされる記述から始まる説15が併記される。それによれば、菊花は長生久視

の香であり、これを聞きこれを薫けば若返って寿命が長くなる、枇杷左大臣はこれを習い伝えたと言う。

薫物「菊花」方の香りは「菊花に似たる匂ひにやあらん」等と伝わる『薫集類抄』等。『薫物』方58に併記された実頼の言説に続く「或説」によれば、この薫物には乾燥した菊の花を一兩処方したほか、和合した香具を瓶等に入れて、水辺の菊の根元に一日四日間埋めたとされる。後世の伝書にも、菊の花を配合せよとする「菊花」方は多く伝わる。

菊の花は鑑賞用としてだけでなく、長寿の薬としても古くから用いられて来た。仲平は高齢で左大臣に任じた為、除目における顕著な例の当事者として、また長寿の公卿としても著名である。『薫集類抄』の「菊花」方58は仲平の習い伝えた方であるとは明記されていないが、後世の『薫物方』には、『薫集類抄』の「菊花」方58に近似した薫物「黒方」方16が仲平の方として載録される。「菊花」方58の効能と仲平の長寿との重なりから、この処方を仲平のものとして伝える動きが生じた可能性は否定できない。

『薫物秘藏抄』の仲平方は薫物「落葉」方103である。依拠資料は寛文八（一六六八）年十一月一日に拝借、書写したとされる「後徳大寺左府（解題25頁、人名家名等解説80頁）書」で、「公任卿」（人名家名等解説67頁）こと藤原公任の所持した処方の一つとされる。「落葉」方103は他書に同類文の確認できない処方であるが、「後徳大寺左府書」に記載されたという他の種類の公任方には、『薫集類抄』が公任方に同じと伝える処方に近似するものが確認でき、『薫集類抄』の依拠資料と重複する可能性が考えられる。「落葉」方103についても、同様の可能性を検討すべきかと考える。また、『薫物方』の仲平「黒方」方16もまた、「公任大納言」こと藤原公任の方に同じと伝わる。『薫集類抄』の説15によれば、公任祖父の清慎公実頼は叔父の「菊花」方を伝えたと言及されていた。仲平と公任が共に所持したと伝わる薫物方には、小野宮流に伝来して公任が継承したとの来歴が推定されるが、その歴史的事実としての検証は今後の課題としたい。

方・説 落葉方103（公任卿方、後徳大寺左府書、ひは左大臣）

ひは左大臣 ↓ 枇杷左大臣

藤原公任 ↓ 公任卿

藤原実定 ↓ 後徳大寺左府

藤原連子 ↓ 四条宮

藤原仲平 ↓ 枇杷左大臣

藤原教通 ↓ 二条関白

藤原保忠 ↓ 八条大将

藤原頼宗 ↓ 堀川右大臣

伏見殿 ふしみのふしみど 現在の京都市伏見区にあった伏見宮御領の殿舎、又はそこに住まいした皇族の呼称。ここでは後者を云う。

「伏見殿」の考案ないし所持したとされる薫物方として、管見には次の1から3の三種類の処方を確認している。

1 京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薫物秘藏抄」 「仙人」方 118 (伏見殿方)

同類文…上田流和風堂所蔵〔無題薫物書〕 「仙人」方 58 (伏見殿)

2 専修大学図書館菊亭文庫所蔵「香具撰様調様」 (注二五)

「有明」方 1 (伏見殿ヨリ相伝)

同類文…専修大学図書館菊亭文庫所蔵「万方」 (注四)

「有明」方 116 (伏見殿相伝)

3 杏雨書屋乾々斎文庫所蔵「薫物之方」 (注一六) 「千年菊」方 4 (伏見殿方)

同類文…(なし)

1から3はいずれも新作薫物の処方であり、室町時代以降に考案されたと見られる。1と3は「伏見殿方」と、2は「伏見殿ヨリ相伝」の方と伝わる。なお、本書は江戸時

代前期に類纂された可能性が高い。

以上の記述や条件から「伏見殿」を特定するのは困難である。ただし、「薫物秘藏抄」には伏見宮第六代貞敦親王と思しき「妙莊嚴院」(人名家名等解説87頁)ゆかりと伝わる処方が載録されており、東山御文庫所蔵「薫物調合秘方」(注三)には伏見宮の略称らしき「伏」を併記した処方が多数伝来するなど、伏見宮家に関係しそうな薫物方や説は比較的多数伝来する。平安後期の類纂と伝わる『薫集類抄』の散逸諸本として、伏見宮家所蔵の伝寂蓮自筆本なるものも存在したと伝わるが、その所在や真偽は不明である。(注二)「伏見殿」の人物と処方の来歴の究明には、薫物書と逸文の調査研究の進展が不可欠であり、今後も引き続き取り組む考えである。

方・説 仙人方 118

堀川右大臣

ほりかはのうたいしん
ほりかわノウダイジン

藤原頼宗。正暦四(九九三)年—康平八(治暦元、一〇六五)年。関白太政大臣道長二男。母左大臣源高明女盛明親王養女高松殿明子。幼名「巖(いは)君」また「異葉丸」。寛弘元(一〇〇四)年二月二六日元服、従五位下。寛仁二(一〇一八)年十一月二二日正二位。治安元(一〇二二)年十一月二二日正二位。治安元(一〇二二)年七月二五日権大納言。寛徳二(一〇四五)年十一月二三日右大将。永承二(一〇四七)年八月一日内大臣。天喜六(康平元、一〇五八)年正月七日従一位。同三(一〇六〇)年七月一七日右大臣。治暦元(一〇六五)年正月五日出家。二月三日薨去、七七歳。堀河(川)右大臣と号す。

『薫集類抄』に道長三男と。薫物諸書には頼宗の兄弟の宇治関白頼通や二条関白教通(人名家名等解説78頁「二条関白」)も合香家に数えられる。また、平忠盛家伝来の書と伝わる「香之書」(注一)によれば、頼宗後裔の白河承香殿女御藤原道子は複数の薫物方を遺した可能性がある。

管見に、堀川右大臣頼宗ゆかりの品と伝わる処方には次の三種類(1—3)五点(①—⑤)がある。なお、一部の処方の同類文二点も含めると、七点の処方の伝来が確認される。

1 「梅花」

①『薰集類抄』上巻 「梅花」方25（堀川右大臣、頼宗、云々）

2 「侍従」

②『薰集類抄』上巻 「侍従」方56（堀川右大臣）

同類文 ・ 「焼物調合法」^{〔注一〕} 「侍従」方10（堀河右大臣）

・ 京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薰物秘藏抄」 「侍従」方53

（勅筆巻物／右一方堀川右大臣 ^{二条開白} 治暦四年四月六日）

③専修大学図書館菊亭文庫所蔵「万方」^{〔注四〕} 「侍従」方16（堀川右大臣 ^{二条開白}）

治暦四年四月六日）

3 「黒方」

④『薰集類抄』上巻 「黒方」方83（堀川右大臣）

⑤「香之書」^{〔注一〕} 「烏方（黒方の異名）」方15（入道右大臣烏方／堀川右府／長

承二年十月三日合之）

右の内、②の同類文で「薰物秘藏抄」の載録方一点、及び③の専修大学図書館菊亭文庫所蔵「万方」^{〔注四〕} 載録方一点は、処方の由緒について、堀川右大臣ゆかりの品であることに続けて、「二条関白」、「治暦四年四月六日」と記される。平安後期の類纂と伝わる『薰集類抄』によれば、「二条関白」こと堀川右大臣頼宗同母弟教通は「梅花」、「侍従」、「黒方」の処方計三点を遺しており、いずれも治暦四（一一〇六）年四月六日に調合されたと云う。これら三点の処方のうち、「侍従」と「黒方」の二点は、それぞれ右の堀川右大臣方②及び④に処方が近似している。

「薰物秘藏抄」と「万方」とは、いずれか一方が他方の依拠資料として参照された可能性があり、今後の課題として慎重に検討したい考えであるが、どちらが先であったにしろ、堀川右大臣方を二条関白方と同一のものとする注記が行われた背景として、合香方が近親者間で共有され、或いは血縁関係を媒介として授受されるものであるとの認識が、「薰物秘藏抄」と「万方」の類纂及び書写を行った人々の間に存在したと考えられる。

方・説 侍従方53（堀川右大臣、二条関白）

ま行

源公忠 ↓ 公忠朝臣

源定 ↓ 四条大納言

妙莊嚴院

^{めうしやうこんゐ（じん）}
^{ミョウシヨウゴンキ（イン）}

新作薰物「仙人」方86を所有ないし考案したとされる

人物。新作が発祥したと見られる室町時代から、京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薰物秘藏抄」が類纂された可能性の高い江戸時代前期に実在して「妙莊嚴院」と号した人物には、伏見宮六代貞敦親王と後水尾院女三宮顯子内親王がある。これらの内、顯子内親王には既存の資料と管見に薰物や香に精通していた可能性をうかがわせるような事跡を確認できないことから、調査の現時点においては前者の貞敦親王の可能性が高いかと考える。

貞敦親王は伏見宮五代邦高親王御子、母は法雲院左大臣今出川教季女。延徳元（一四八九）年三月某日誕生。文亀二（一五〇二）年一二月二五日元服。同四（永正元、一五〇四）年二月三〇日親王宣下。上卿に三条西実隆、参陣に藏人右中弁甘露寺伊長が任じた。同日に後柏原院猶子となる。永正四（一五〇七）年二月四日中務卿に任じて二品に叙される。同六（一一五〇九）年八月二八日、内大臣轉法輪三条実香（人名家名等解説77頁「轉法輪前左府」）女香子を上臈と為す。天文一四（一五四五）年四月二七日薨去、法名澄空。元龜三（一五七二）年七月二五日薨去、八五歳。号妙莊嚴院。香子との間に伏見宮第七代邦輔親王、勸修寺宮寛欽法親王、妙法院宮堯尊法親王、仁和寺宮任助入道親王（人名家名等解説65頁「御室御所」）、応胤入道親王、位子女王があり、他に安善寺恵彰尼王と中宮寺尊智尼王も儲けた。

貞敦親王は和歌の詠作を始めとした創作活動に熱心であり、伏見宮御所において歌会や連歌会を数多く主催した他、三条西実隆、公条父子より『源氏物語』や『十八史略』

の進講を度々受けるなど、和漢の学識の習得に努めた。以上の活動に加えて、十種香等の聞香や蹴鞠、音楽、茶の湯の催しも度々催したことから、文化、教養に対して幅広い関心と豊かな知識、優れた技量を兼ね備えており、学問と諸芸の振興を牽引する存在でもあったことが伺える。

宮内庁書陵部所蔵伏見宮家本「貞敦親王御記」永正一五（一五一八）年正月の日記の内、二日、三日、八日、九日、二〇日、二八日及び二九日の条には薫物について記述される。それらによれば、親王は新年早々に手づから薫物を調合したり、手製の薫物を員に入れて催し事の参加者に遣わしたりしている他、二八日には「三条黄門」こと轉法輪三条公頼から「手合薫物一具」を贈られたとも記されている（注三〇）。

轉法輪三条公頼は親王に入内した三条実香女香子の兄弟である。右の日記の期日から一五年後の天文二（一五三三）年、実香と公頼は後奈良天皇の勅に依り薫物の秘方を伝授するとともに、御前において調合に及んでいる（人名家名等解説77頁「轉法輪前左府」）。また、史料総覧収録の「貞敦親王御日記」天文二年一月二一日条には、親王が後奈良天皇に香薬「甲香」を献じた由が記載される。甲香は古代の中国において医薬の調合に用いられたことに始まり、芳香剤にも配合され、本朝においても医薬と薫香の具材の一つとして使用され続けた。貞敦親王による甲香の献上は、禁裏における医薬ないし薫物の調合に供することを目的として行われたのであろう。

以上の記述からは、親王が合香活動に熱心であり、調合した薫物を文化的な催しの場において振る舞っていたこと、縁戚関係にある合香家の子息から薫物を贈られていたことが知られる。「貞敦親王御記」の他の年月の記述は伝わらないが、この親王の薫物への関心の高さや合香家としての評価を示唆する動静として興味深い。

「薫物秘蔵抄」に妙莊嚴院方として載録される新作薫物「仙人」方86の同類文は、本書の他に専修大学図書館菊亭文庫所蔵「万方」^{（注四）}に一点、前述の東山御文庫所蔵「薫物調合秘方」に二点、徳川林政史研究所所蔵「薫物之方」^{（注五）}に一点確認でき、いずれも同じ「仙人」の方として伝わる。由緒に係る記述として、これらの内「万方」の同類文には「三条流」と、「薫物調合秘方」の同類文の一方には「伏方」と見える。「万方」

筆者が「三条流」と記して意図したところについては慎重に検討したい考えであるが、「万方」筆者の周辺において、合香家三条家に伝来した秘方秘説の流れを汲む合香方であることを意味する語として通用した可能性は検討に値する（解題26―31頁、人名家名等解説90頁「四辻流」）。後者の「伏方」は伏見宮家の処方を意味する略称と考えられた^{（注三）}。

「薫物秘蔵抄」には、「仙人」方86の他にも伏見宮家に伝来した可能性を伺わせる処方数点が載録される（人名家名等解説86頁「伏見殿」）。東山御文庫所蔵「薫物調合秘方」^{（注三）}には、「仙人」方86の同類文以外にも、伏見宮家の薫物の秘方と見られる記述が一〇点ほど伝わる。また、貞敦親王御子の内三条香子所生で御室仁和寺に入室した任助入道親王は、「薫物秘蔵抄」に「御室御所」と呼ばれて正親町天皇に薫物「黒方」方を伝授した可能性が考えられた（人名家名等解説63、65頁）。貞敦親王の代を含む歴代の伏見宮が考案ないし所持したと考えられる薫物の秘方秘説の全容や、伏見宮家における合香活動の実態、並びに轉法輪三条家や今出川家を始めた他家との関わりの有無や詳細については、今後の資料調査の成果に照らしながら考究したい考えである。

方・説 仙人方86

本康親王 ↓ 八条宮

や行

四辻家

よつしけいへ、よつしけ
ヨツジイェ、ヨツジケ

鎌倉時代前期の太政大臣西園寺公経四男実藤を祖とする藤原北家閑院院流室町家の号。室町時代に樂奉行を拝命した家柄であり、江戸時代以降も箏や和琴の演奏を家職とした。

続群書類従には「四辻家薫物書」の書名による伝書が収録される。『群書解題』岩橋小弥太氏解説によると、書名は奥書の記述に由来する仮のものであり、内容は、次の三種の伝書を合綴した可能性があるとする。

第一の書は、奥書に「四辻家代々相伝之双紙」と呼ばれた秘伝書に該当する。来歴に

ついでに二点の識語が記されており、一点目には「予 数年根（懇）望之間雖黙。故重相遠行之砌。蘊奥口伝等不殘令伝授給者也。」と、二点目は「小澤本」こと小澤芹菴の所蔵した伝本の識語として「当今へは先年愚老御前におきて調合せられ。条々申入了。（改行）右四辻家代々相伝双紙也。重相遠行之砌。口伝等（解題に「無力」と）所殘令伝授畢。殊黒方者。（闕字）正親町院以御自筆之方奉写者也。」とあり、末尾に「于時文録（傍書「祿」承暦仲秋日」「僧都実隆」と記される。また、第二の書とは「天明五年首夏 平（花押）」、「天明六年立秋 経亮」の書写者識語を伴う薫物「薫衣香」方六点の記を云い、第三の書とは、「寛政三年六月」に小澤芹菴本と校合したとされる、「にはひ袋」や「わか草」等の新作薫物方を始めとした八点の処方の類纂を云う。

第一の書の一点目の識語の内容は、書き手である「予」が四辻家伝来の双紙を長年懇望し続けてきたところ、「故四辻重相」が遠方へ赴くにあたつて、口伝を残らず伝授していただいたと云うものである。二点目の識語の書き手である「愚老」は、当代の帝の御前において本書の処方を調合するよう御下命を受けて、秘方秘説を口頭により申し入れ終えたとも記される。これ以後に第一の識語の同文が挟まれており、続けて、殊に薫物「黒方」は正親町院（人名家名等解説63頁）の御自筆の方をもつて写し奉った無類の重宝である等としてこれを讃え、「文録承（ママ）暦仲秋日」に「僧都実隆」が書写した旨を記して終えられている。以上の識語の内容には、一部に重複の見られることから、「予」と「愚老」は同じ人物であり、いずれも「僧都実隆」の一人称として見える。

岩橋氏は前掲の解題において、「故四辻重相」が四辻季遠に該当する可能性を指摘していた。続群書類従の傍書が「文録」を文禄と校訂するところに従うならば、文禄四年に薨去した季遠子息公遠もまた検討の対象に加えるべきであろうが、いずれにしても根拠に乏しいことから、ここでは季遠の略歴と香との関わりについて確認するに留める。

四辻季遠は権大納言四辻実仲養子正二位権大納言公音男。母は実仲女。永正一〇（一五三三）年七月七日誕生。同一四（一五一七）年、五歳の時に従五位下に叙されて季規と名付く。大永八（享祿元、一五二八）年侍従、季遠と名を改む。天文二（一五三三）年四月一七日従四位下。同四（一五三五）年正月三日左権中将。同五（一五三六）年従

四位上。同六（一五三七）年七月一三日参議、中将元の如し。一二月二日正四位下。同七（一五三八）年三月八日土佐權守。四月一日直衣始。同八（一五三九）年正月五日従三位。同九（一五四〇）年二月一日に出仕を止められ、三月二日勅免。同一（一五四二）年閏三月一日正三位。土佐權守秩満。五月に日向国へ下向して一〇月に上洛。同一三（一五四四）年三月十九日權中納言、同日拝賀。同一四（一五四五）年正月五日従二位。同一八（一五四九）年正月五日正二位。同一九（一五五〇）年一〇月一二日權大納言。一二月二三日聴勅授、同日拝賀。弘治二（一五五六）年十一月二六日輕服。同四（永祿元、一五五八）年甲州に在国し、翌年一〇月二七日甲州より上洛。同九（一五六六）年六月には子息公遠と共に勢州に下向し、八月二七日に一緒に上洛している。天正三（一五七五）年正月二六日權大納言を辞す。八月二日薨去、六三歳。

季遠男公遠は女官得選を母として天文九（一五四〇）年某月某日に誕生している。季遠が同年二月一日から約一月の間出仕を止められた理由として、女官得選との密通が露見したこと等が想像されるが、季遠はこれ以後も累進しており、弘治元（一五五五）年と同三（一五五七）年には後奈良院主催の百韻連歌に参加している（註三〇）。何等かの不手際によつて出仕停止の処遇に甘んじはしたが、院からの信望は損なわれず、寵臣の一人として近侍し続けたのであろう。

後奈良院は合香家三条実香（人名家名等解説77頁「轉法輪前左府」・公頼父子から天文二年（一五三三）に薫物の秘方を相伝している。合香活動にはそれ以前から熱心であったらしく、皇族や臣下の公家、武家に対して、自ら調合する等した薫物を度々授けていた。後奈良院皇子の正親町院もまた合香への関心が高く、薫物を頻繁に調合しては、皇族の知友や公家、武家の寵臣にふるまっていた（註七）。季遠もそうした下賜に与った一人であり、『後奈良院宸記』や『御湯殿上日記』によれば、天文四（一五三五）年五月八日に後奈良院から薫物を頂戴した他、正親町院からも永祿四（一五六一）年閏三月九日と一一月六日に薫物を賜っており、後者については院が自ら調合した品であったと云う。

季遠が御前において薫物を調合したり、合香の秘方秘説を蒐集したりといった史実や

伝承は未見である。ただし、「四辻」又は「四辻家」にゆかりの品とされる薫物方については、管見に次の五点を確認している。

- 1 高松宮本「薫物（ノコト）」 「仙人（異伝仙人）」方7（薫物、四辻伝）
- 2 高松宮本「薫物（ノコト）」 「仙人（富士ト号スル也）」方8（薫物、四辻伝）
- 3 東山御文庫所蔵「薫物調合秘方」^{（註三）} 挿紙A 「梅花」方13（四辻方）
- 4 京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薫物秘蔵抄」 「黒方」方108（宿紙表紙薫方、四辻流也）

- 5 京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薫物秘蔵抄」 「黒方」方112（家方、四辻家敷）

右の内4と5の処方は、「薫物秘蔵抄」の依拠資料の一つで、この卷子本の末尾に貼り継がれた可能性のある薫物書「宿紙表紙薫方 四辻流」に載録される。また、これら二点の処方の同類文は、続群書類従本「四辻家薫物書」に合綴された第一の書「四辻家代々相伝之双紙」に確認することができる。

「宿紙表紙薫方 四辻流」には処方三二点と調合の説一点とが類纂されており、それらの内処方一点を除くほとんど全ての記述について、続群書類従本「四辻家薫物書」の内「四辻家代々相伝之双紙」に同類文を確認することができる（解題15、16頁）。「四辻」及び「四辻家」が、いずれも藤原北家閑院流の同家を意味するものであったとすれば、遅くとも江戸時代前期には、四辻家ゆかりと伝わる薫物の秘方秘説やその類纂が皇室や公家に伝来しており、当時の上層社会において珍重されたことが考えられる。

続群書類従本「四辻家薫物書」の載録方の内、主要と見られる処方の特徴について紹介しておきたい。冒頭に合綴された「四辻家代々相伝之双紙」には、平安時代の類纂と伝わる『薫集類抄』等の薫物書や『河海抄』等の『源氏物語』古注釈書に記載された、伝統があり著名な薫物方の同類文が記載される。室町時代に薫物方の蒐集や類纂、新作薫物の考案等を行ったとされる三条家当主にゆかりとされる処方の同類文も多く載録される。奥書の直前には、「当家たきものゝ方のことは。」云々として、和歌一首と薫物「黒方」の「勅方」とされる処方一点が記載される。和歌は三条家の類纂と伝わる秘伝

書に龍翔院三条公敦が後土御門天皇に秘方秘説を伝授して拝領した御製として伝わる。「黒方」の「勅方」については、管見に他書への載録を確認できていない。

続群書類従本「四辻家薫物書」が、室町時代以降の三条家の類纂や秘方秘説を主要な源泉として成る秘伝書の伝本であることは、右の特徴に明らかである。皇室や公家に秘蔵された薫物書の中には、四辻家にゆかりとされる薫物の秘方秘説が存在したとの伝承も伝わる。続群書類従本の解題において岩橋が「故四辻重相」と推定した四辻季遠は、後奈良院が轉法輪三条実香と公頼の父子から薫物方を相伝した当夜も含めて院に近侍しており『言継卿記』天文二年一〇月一九日条、この天皇と皇子の正親町院から薫物を下賜されたこともあった^{（註七）}。主君の嗜好や関心に追従するのは近臣の務めであるから、季遠が後奈良院の愛好した薫物を学びの対象としたとして、不思議では無い。季遠を始めとした四辻家の人物に、三条家の秘方秘説を蒐集して独自の処方を考案するという、いわゆる合香家としての事跡を遺した者のあった可能性は、検討に値する。

「薫物秘蔵抄」に貼り継がれて伝来した「宿紙表紙薫方 四辻流」と称する薫物書や、続群書類従本「四辻家薫物書」の内「四辻家代々相伝之双紙」と呼ばれる薫物書の書誌を解明するには、信頼できるテキストの発見ないし諸本の比較対象結果をふまえた原本の復元が肝要である。

方・説 黒方方112

四辻流

よつし（の）りう、
ヨツシ（ノ）リウ

京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薫物秘蔵抄」の依拠資料である「宿紙表紙薫方」について、「四辻流也」と記載されたもの（解題26―31頁）。

「宿紙表紙薫方」は「黒方」方108から「二葉」方139までの方32点及び説1点を載録したと考えられる。これらの処方や説の内、処方一点を除くほとんど全ての記述については、続群書類従所収「四辻家薫物書」の冒頭に合写された、「四辻家代々相伝之双紙」と呼ばれた秘伝書の内容に一致することから、「宿紙表紙薫方」は「四辻家代々相伝之双紙」の諸本であった可能性がある。また、「四辻流也」とあるところの「四辻」とは、鎌倉時代前期の太政大臣西園寺公経四男実藤を祖とする藤原北家閑院流室町家の号であり（人名家名等解説88頁「四辻家」）、「流」とは、「宿紙表紙薫方」が「四辻家代々

相伝之双紙」のような四辻家にゆかりの伝書の流れを汲むものであることを意味すると考えられる。

「宿紙表紙薫方」には書名が付けられていなかったらしく、跋文等も見当たらないが、末尾に合香家三条家の秘伝書において珍重された後土御門院御製が記される。書中には三条家の著名な合香家（後白川右府、龍翔院）が考案ないし所持したとされる薫物方も複数点含まれるが、「家の方」等の注記を伴う処方も散見する。以上の特徴から、「宿紙表紙薫方」とは、元は三条家の秘方秘説の類纂が四辻家に伝来したものを源泉としており、同家で考案ないし所持した薫物方数点を交えて再編されて、「薫物秘蔵抄」類纂者の手元に伝わった可能性が考えられる。「薫物秘蔵抄」を増補する最終段階において、「宿紙表紙薫方」から表紙を取り外して「薫物秘蔵抄」に貼り継がれた際に、本書の原型と素性を記し留める目的から、類纂者が冒頭の余白に「宿紙表紙薫方 四辻流」と加筆したものと想像される。

「薫物秘蔵抄」における「四辻流」の語の用例は、右の一例の他に確認できず、家名等に「流」と称した例についても同様である。ただし、同じ今出川家に伝来した薫物諸書の本文には、「三条流」や「三条の流」、「三条家の流」として、合香家三条家の薫物に関する「流」、及び「勅作中院等ノ流」、「誰ノ流」として、天皇家と公家の中院家などにも薫物の「流」の存在に言及した記述が複数点確認される（解題26—31頁）。

薫物の秘方秘説について、血脈や家系によって由緒来歴を分類し、「流」の概念を導入してそれらを系統立て、並列させて体系化することは、一般に行われていない。薫物について「流」の語を用いて記述された前例は少なく、管見にその唯一のものとして確認しているのは、『薫集類抄』裏書勅物が八条宮本康親王の秘方秘説が源公忠（人名家名等解説69頁）と平随時へ伝来した経緯と特徴を解説するにあたって、「流」と「派」の語が使用されたことである（解題28頁）。菊亭家の伝書における「流」の語の由来や独自性如何については、稿を改めて考察したいと考えている。

方・説 黒方方108—112、説44、烏方方113、梅花方114—117、仙人方118、119、菊花方120、き菊花方121、侍従方122—125、落葉方126、127、花はちす方128、

荷葉方129、蓮葉方130、玉椿方131、若草方132、盧橘方133、新枕方134、野風方135、蘭方136、千種方137、菖蒲方138、二葉方139（以上、四辻流）

ら行

龍翔院

れうしょうけい
リュウショウケイイン

轉法輪三条公敦。永享一一（一四三九）年—永正四

（一五〇七）年。後三条左大臣実量一男。母は内大臣正親町三条実雅猶子。文明一八（一四八六）年五月には在京、存命したとされる『実隆公記』同年五月六日条。弟に二男で大炊御門家を相続した信量が、妹に後花園院女御代で舊院上臈、舊院上臈局と呼ばれた冬子（嘉吉元（一四四一）—延徳元（一四八九））がある。子息には後浄土寺太政大臣実香（人名家名等解説77頁「轉法輪前左府」）のあった他、持明院基春子息慈尊院僧正実尊を猶子としている（勸修寺聖教）。

嘉吉二（一四四二）年正月五日従五位下、四歳。文安六（宝徳元、一四四九）年正四位下。宝徳三（一四五二）年月日従三位、左中将如元、一三歳。享徳元（一四五二）年三月二三日尾張権守。同三（一四五四）年正月五日正三位。康正二（一四五六）年三月二九日従二位。同年三月二九日權中納言。長祿二（一四五八）年七月二五日權大納言。寛正六（一四六五）年正月五日正二位。文正元（応仁元、一四六七）年二月五日右大將。文明五（一四七三）年二月二九日、応仁の乱後の困窮により右大將兼任への拝賀も叶わぬことを理由に、右大將と大納言の両職を辞せんとするが、前例無しとして許されず。同七（一四七五）年三月一〇日左大將。同八（一四七六）年八月二八日内大臣。左大將元の如し。同九（一四七七）年正月六日左大將を辞す。同年二月二九日従一位に叙される。同一一（一四七九）年四月一九日右大臣に転任して周防へ下る。同一二（一四八〇）年正月九州に在国（『宣胤卿記』）。同年三月、筑紫に在国して未だ拝賀せざるにより、同月一日右大臣を罷免。同二三（一四八二）年二月一五日周防において剃髪し、法名を祥空と改める。永正四（一五〇七）年五月七日周防にて薨去、六九歳。

在京時には後花園天皇と後土御門天皇に重用されて累進し、後土御門朝の寵臣歌人の一人としても活躍。室町殿足利義政が点をつけたとされる五十首和歌（伏見宮本「三条

公敦詠五十首和歌」一卷、宮内庁図書寮文庫所蔵）も伝来する。なお、『和泉遠藤家譜』には、和歌の道の衰廢斷絶を嘆いた後土御門院の勅定により、東常縁が文明一二年五月下旬に上京し、「関白近衛政家、三条内大臣公敦、將軍義尚三人」に対して、常縁を師範として東山にて古今集秘訣の伝授を受けるよう勅命が下されたと伝わる。前述の通り、公敦は文明一一年四月に内大臣から右大臣に昇進し、同一二年正月から三月まで九州に居り、筑紫の地で右大臣を辞任していたことから、先行研究には、「常縁の名が有名になった室町末に創られた伝説」等として事実と反する内容と見なされ、退けられている（注三二）。なお、公敦実弟で大炊御門家を継承した信量吉見は文明一一年から同一三年まで内大臣に任じたことから、『和泉遠藤家譜』の筆者が公敦と信量を混同した可能性を検討すべきかと考える。信量が古今伝授を受けたとする伝承等は未見である。

文明一一（一四七九）年四月に右大臣に任じた経緯については、同年三月から翌一二年三月にかけて記された近衛政家や甘露寺親長、三条西実隆、同年五月一四日に卒去した広橋兼頭等の日記に基づき詳しい考察が為されている（注三三）。この間の動静は聊か複雑であり、後述予定の薫物の史実や伝承の内容とも関わることから、以下の解説では、先行研究の成果に学びながら改めて日記の条々をひも解き、下向の経緯と顛末について稿者なりにまとめてみたい。

文明一一年三月に左大臣を辞した鷹司政平の後任を埋める人事として、四月七日に政家を左大臣に、公敦を右大臣に、信量を内大臣に任じる案が進上され、翌日勅約が結ばれるとともに、その旨を記した書状が各人に対して遣わされたと云う『兼頭卿記』四月七日、八日条）。任官の手続きが予定通り進められる一方で、一二日には禁裏において公敦の在国の可否について意見が交わされ、小河殿の義政に勅問されることとなり、兼頭等を勅使として小河殿に奏上することとなった。任官を目前に控えたこの時期に、公敦は何処かの所領地等に在居していたようである。勅問はその日の内に義政の検討に付されたらしく、兼頭は翌一三日早朝に小河殿に召し出されて義政の奉答を承っている。それによると、勅定に云われる通り、任官中の在国はあつてはならないことであり、公敦が家領等の違乱を理由に在国したいのであれば、幕府が違乱を成敗する、との

ことであつた（『兼頭卿記』四月二二、一三日条）。

文明一一年四月現在に政家は南都に居住しており、京都との書状の往来による執務と情報収集に努めていた（『後法興院記』同年四月日記、『親長卿記』同年四月一二日条）。翌一四日に京都の兼頭から南都の政家に宛てられた書状によると、在国する公卿に任官が宣下されることへの異議は、按察卿親長の呈した意見に基づくものであつて、応仁の乱の最中には在国のまま任官宣下の行われることもあつたが、乱の平定された今となつてはこうした先例を踏襲する必然性は無いとされている。兼頭は、親長がこうした意見を提出した子細について、前内大臣西園寺実遠が右大臣の座を競望して親長がこれを禁裏に取り継ぎ、公敦が所望した際には新中納言広橋兼頭が取り継いだところ、公敦を任ずる勅許が下されたことが原因しており、親長はそのことを恨みに思っているのだろうと記している（『後法興院記』四月一四日条）。

『宣胤卿記』文明一二年日記の冒頭にまとめられたところによると、正月元日に在国していた公卿は公敦だけであるが、現任公卿のほとんどが未拝賀、未着陣の状況であつたと云う。政家のように、乱後の混乱を避けて洛外の比較的近距离にある家領等に在居したまま任官したか、他の何らかの事情により参内が困難であつたということであろう。公敦は文明五（一四七三）年に乱後の困窮を理由として権大納言と右大将の辞職を申し出ていたが、前例無しとして容れられなかった。今回は、幕府への勅問という事態に至つて義政の反対に遭い、在国しながらの任官宣下は一旦不可と決してしまつたが、二日後の一五日に南都の政家が洛中の兼頭を通じて働きかけたことにより、禁裏と將軍から、しばしの暇乞いであれば差支え無しとの判断が下されている。公敦の任官は、右の条件付きで了承されたことになる。

公敦は、任官宣下の当日である一九日に禁裏に対して暇乞いをして周防国へ向かつた。公敦の下向を早めさせた要因について、先行研究には、公敦が在国しながら任官宣下を受ける事情として申し出ていた、家領違乱による困窮に加えて、兼頭が推量していた西園寺実遠、甘露寺親長との軋轢と、公敦が下向直後の四月下旬に『尊卑分脈』閑院公季流条の余白に水無瀬周辺で書き入れたと見られる、西園寺流が閑院流の正嫡というのは

誤りであること、及び自身が実遠よりも早く昇進したことを「頗眉目」と記して誇ったことから推察される、「公家間の葛藤」によるものであると分析している（注三の3、11）

『長興宿禰記』の筆者である大宮長興は、周防は公敦にとり聊か由緒のある地であったかと推測している（四月一九日条）。公敦は、年が明けても帰洛せず、正月には九州に在国して拝賀を果たせぬままであった。但し、未拝賀の現任公卿は公敦だけではなく、未着陣の場合も合せると、中御門宣胤と三条西実隆の二名を除く全ての公卿が元日節会に拝賀着陣せずにいたらしい（以上、『宣胤卿記』文明一二年正月「現任公卿」記）。同年三月一二日、公敦は筑紫の地にて右大臣の職を辞し、後任には菊亭内大臣教季が任ぜられた（『後法興院記』三月一二日条）。在任中に京都と田舎を往復することが朝廷と幕府から容認されたとはいえ、在国期間としては一年が限度ということだったのかもしれない。

周防に下向したとされる公敦が、正月から四月までの間に九州、筑紫に在居した経緯は不明である。ただし、公敦の親族の内、母方の祖父正親町三条実雅の実弟であり猶子でもあった正親町三条公綱は、太宰権帥として長年彼の地に赴任していたことから、公敦にとって無縁の土地柄というわけでも無さそうである。実雅と公綱の二人の妹はどちらも將軍足利義教の妻妾であり、姉の尹子は義教の正室として嫡男義勝を養育した。先行研究には、実雅と公綱は縁戚関係を介して義教との結びつきを強めたことが指摘される（注三四）。当時の権勢の名残として正親町三条家に大宰府周辺の領地が伝来しており、乱の影響を受けながらもかろうじて維持されていたとすれば、親族である公敦が一時期そこに身を寄せたとして、不思議ではあるまい。

公敦は翌一三年二月一五日に周防で剃髪した。『宣胤卿記』五月一日条よれば、公敦の父実量と子息実香は、公敦が出家したことを知らなかったと云う。筆者の中御門宣胤は、家族に相談せずに剃髪に及んだとされる公敦の振舞について、「楚忽之儀也」、軽率な行為であると批判している。ただし、父実量の薨去から三年後の文明一八年五月六日に三条西実隆の許へ届いた公敦の書状によれば、公敦は七年ぶりに上洛して母と対面し、高野山に詣でる予定であったと云う（『実隆公記』五月六日条）。京都に残した家族

を慮る心を失ってはいなかったようである。

右の高野山詣でに係る公敦の動静として、文明一六年から同一八年まで和泉堺の海会寺住持を勤めた蕉軒こと季弘大叔著『蕉軒日録』には、次のように記される。

- ・ 四月二一日条 「三条右大臣号龍（闕）寺」は近年周防に潜居していたが、今まさに高野山に詣でんとしており、海会寺に一〇日間の寄宿を希望している」、云々と記した書状が蕉軒の許に届く。蕉軒は百計を案じて受人を辞退し、尊貴の客を鄙びた寺で遇することは躊躇される等の理由を仕立てて使者を帰す。
- ・ 同月二五日条 「三条右大臣入道殿性空」、四月下旬に住吉の村庵に寓す。
- ・ 同月二七日条 「三条右大臣」、住吉の僧廬に寓す。
- ・ 五月六日条 「龍翔」又「龍翔三条公」、印銷首座の許に寓居して蕉軒に串柿十枝を送り届ける。
- ・ 同月七日条 「龍翔」又「轉法輪三条公敦（傍書に「法名性空」とあり）」、印銷首座から贈られた漢詩に和歌を詠んで答える。
- ・ 同月二日条 「右府龍翔院」を囲む詩筵が住吉で催される。「龍翔」は艦上に主して、村に居住することの閑寂なることを語る。西国へ帰る舟は住吉の近くに留め置かれる。
- ・ 同月二四日条 「龍翔院」、住吉社家に厚遇される。一休宗純の真影を押し法名を改める。
- ・ 六月三日 「龍翔院」、舟で西国へ帰る。

蕉軒は、四月下旬には公敦を警戒していたらしいが、五月以降には印銷首座を介して徐々に親睦を深め、別れを惜しんでいた。日記の四月二二日の時点で公敦の号「龍翔院」を「龍（闕）寺」と不完全に記しており、親交の機会が増えた五月二〇日条以降には「龍翔院」と改めていた。このことから見て、逗留を打診された当初の段階では、公敦の人物について呼称ともども熟知していたわけではなさそうである。公敦が右大臣を辞職した経緯とその後の顛末については、風聞程度の情報を記憶していたのであろう。公敦が海会寺に逗留を希望したのも、蕉軒個人の公敦に対する信望等を持んでのことでは無く、

同寺が高野山への街道を擁する堺にあり、交通の便に恵まれた為ではないだろうか。以上のことから、蕉軒が公敦の法名を「性・空」と記したのは、勘違いや記憶違いの為であったかと考える。

なお、文明一八年五月二四日に公敦が一休の真影を拝して改めたとされる新たな法名については、日記の条に記されていなかった。薫物の伝承には、公敦が祥空以外の法名を号したことが伝わる。宮内庁書陵部所蔵「薫物黒方秘方」^(注九)や版本の『御薫物相伝』及び続群書類従本『三条家薫物書』等に伝来する明応九年五月一三日付け識語には、公敦の法名として「宗・空」^(注九の1拙稿)記されている。本間洋子氏は公敦が一休・宗・純に帰依した際に宗空と改名した可能性を指摘しており^(注七)、首肯される。文明一八年以降の史実や伝承において、宗空の名による公敦の動静が新たに報告されることに期待したい。

周防に在国していた公敦は、守護大内政弘の庇護の下に生活しながら、三条家累代の貴重書を書写して政弘と子息義興に供した他、彼の地で政弘が主催した文芸の催しに参加することもあったとされる。こうした文芸活動は、乱後の困窮や家領混乱に悩んでいた公家の人々が、洛外の家領の安堵を地域の守護に委ねたり、武家が守護する家領地に向向して在居したりする場合に、守護に対して行った典型的な返礼として評価される。公敦は、庇護への返礼として見るべき活動に精力的に取り組む一方で、同じように政弘を頼って下向してきた足利義材（後の義植）や、全国を行脚して和歌や連歌の師として厚遇された宗祇とも、和歌や連歌の創作を通じて親しく交わったことが分かっている^(以注三三)。

さて、薫物の分野において、公敦は右の文学活動以外に薫物方の調査や考案、相伝等を行った人物として著名な一人である。各地の文書館や図書館等には、室町時代後期以降に公敦子息実香が類纂、書写したとされる多数の秘伝書が伝来しており、それらによれば、公敦を含む三条家の歴代当主は、南北朝期から皇室の薫物の師範役を果たして来たとされる。また、三条家諸流のうち轉法輪三条家においては、後土御門天皇への秘方の伝授に始まり、周防国で大内氏の庇護を受けていた時期の足利義植や、大内政弘、義興父子に対しても、薫物方の伝授等に及んでいたと云う^(注一、注七、注九の1拙稿)。

右のような伝承に関わる史実として、公敦の親族で親交のあった三条西実隆の日記『実隆公記』には、公敦が周防に下向して以降の時期に調査した薫物等を送り届けた旨が記されている。

1 文明一三年二月三日、公敦、薫物「菊花」一貝を実隆に贈る。

2 文明一十九年二月二七日、公敦、薫物三具（新作薫物「早梅」と薫物「梅花」及び「黒方」）を実隆に贈る。

3 明応四年三月一九日、公敦、新作薫物「千種」一貝を実隆に贈る。

また、三条家に関する伝承の内、公敦が行ってきたとされる薫物の調査や処方考案、秘伝書の書写や授受についての伝承で、期日の明らかにされている事跡として、管見には次の四件を確認している。

1 文明七年八月二〇日、左近衛大将三条公敦、後土御門天皇の勅定により押小路内府三条公茂自筆の薫物書上下巻を書写し、覧覧に備えて故実を伝授し奉る。次いで、後土御門天皇に和歌を奉り、御製を賜る^(注九の1「薫物（黒方秘方）」等)。

2 文明九年三月一四日、内大臣三条公敦、文明七年に献じた薫物書が焼失したため、後土御門天皇の勅命により再度書写、献上を行う^(注三三)。

3 明応九年五月一三日以前、公敦（龍翔院、宗空）、恵林院足利義尹に薫物方を相伝。次いで公敦、義尹の順に和歌を贈答^(注九の1「薫物（黒方秘方）」等)。

4 永正二年正月某日、公敦（槐下桑門）、薫物書を書写^(注三六)。

なお、2の薫物書は、文明八年十一月に生じた火災によって禁裏で焼失した本を補う為に書写された、いわゆる文明補充本の一部であった可能性がある^(注三七)。また、日付は明記されないが、京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薫物秘蔵抄」や「薫物黒方秘方」等の諸書には、龍翔院又は故入道右府公敦が新作薫物「千種」を考案したとの伝承も伝わる。先行研究には、同じ由緒の記載された「千種」方が続群書類従所収「四辻家薫物書」にも載録されており、史実の内3とした『実隆公記』明応四年三月一九日条には、公敦が完成した「千種」を実隆に贈り届け、実隆がこれを「秘蔵々々」として珍重したとされることの関連事項として紹介される^(注七)。

以上の伝承が正しければ、公敦は、子息実香を始めとする歴代の三条家当主ともども合香家として活躍し、朝廷と西国において公武の薫物の師範を務めた可能性がある。それぞれの伝承の内容を事実として裏付ける史料については探索中であるが、少なくとも公敦が実際に調査を行う人物であり、自作の薫物が知友の間で高く評価されていたことは間違い無さろう。

公敦による薫物調査と贈答の事跡が史実として確認されるのは、公敦が周防に下向して筑紫において職を辞し、出家を果たして以降のことである。伝承においても、公敦は勅命に応じて秘伝書の書写や秘方の調査を行っていた。公敦は、子息実香が二三歳の年に周防へ下向している。実香の幼少期から轉法輪三条家の家計は窮しており、公敦自ら家領安堵の為に職を辞して京都を離れようとした程であった。在京中には薫物を調査する為の材料の調達もままならなかったのではないだろうか。

公敦が実香と同居したのは、実香が二三歳の春までであり、決して長い期間とは言えない。在京中の公敦が、自身の子息である実香に対して和歌等の教養を授けたと考えるのは、ごく自然なことであろう。公敦が実際に皇室の薫物の師範を務める程の人物であれば、家の伝統を後裔に継承するのは必要不可欠なことであり、合香の秘方や手技を指南する機会もあっただろうが、費用の関係から、実践の機会は必ずしも多く無かったものと想像される。実香の合香家としての素養が十分に培われるまでには、公敦の下向後に実香と同居していたと云う公敦父実量の手ほどきと、京都の家に秘蔵されたであろう累代の秘伝書に依る所が多かったのではないか（人名家名等解説77頁「轉法輪前左府」）。或いは、同じような秘方秘説を相伝した親族が、老いた実量の技量を補った可能性も考慮すべきかと考える。

ただし、実香の書写した秘伝書の諸本と伝わるものの識語には、公敦が書写して他家に相伝した伝書を依拠資料の一つとした旨を伝えるものも見られる。伝承の内容が正しければ、公敦は在京中と周防下向後に請われて書写し贈与した秘伝書の副本を作成しており、それを京都の家族に送り届けていた可能性が考えられる。公敦の薫物の秘方秘説がどのようにして後裔に伝えたのか明らかにする為には、関係する史料や秘伝書の更

なる探索が不可欠であり、今後一層努力したい考えである。

方・説 千種方137 (れうしやういん)

れうしやういん ↓ 龍翔院

注

(注一) 拙著『薫集類抄の研究…附・薫物資料集成』(三弥井書店、平成二四年)参照。なお、本書には『薫集類抄』の解題、校注等の他に、次の諸書の解題と翻刻を掲載する。

- 1 香之書、一軸、写本、名古屋市蓬左文庫所蔵、請求記号 162-14
- 2 焼物調査法、一軸、写本、名古屋市蓬左文庫所蔵、請求記号 162-95
- 3 香秘書、一巻一軸、写本、公益財団法人武田科学振興財団杏雨書屋所蔵、請求記号 研 1469
- 4 薫物方、一冊、写本、宮内庁書陵部所蔵鷹司本、函号 266・118
- 5 薫物故書、一冊、写本、専修大学図書館菊亭文庫所蔵、請求記号 原本・第2函第122号、マイクロフィルム通番 4-1110

(注二) たきものゝほう、一冊、写本、高松宮本、通番 22

(注三) 載録先は「薫物調査秘方」(二冊、東山御文庫所蔵、函号一三・四・二・二〇、宮内庁書陵部所蔵マイクロフィルム版あり、請求記号 N2208)。解題とテキストは拙著「東山御文庫所蔵「薫物調査秘方」解説と釈文・杏雨書屋所蔵『香秘書』享受史一考」『杏雨』第一四号、公益財団法人武田科学振興財団杏雨書屋、平成二三年)に掲載しており参照されたい。

(注四) 万方、一冊、写本、専修大学図書館菊亭文庫所蔵、請求記号 第2函第118号

(注五) 薫物之方、折本一帖、写年未詳、公益財団法人徳川黎明会徳川林政史研究所旧蓬左文庫所蔵、請求記号三六・七。テキストは拙稿「徳川林政史研究所所蔵「薫物之方」翻刻」に掲載。『薫物書の研究』、創刊号、薫物書研究会、平成二六年。広島県大学共同リポジトリ (HARP) 掲載、
<http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/hju/detail/1204520140611170113> 平成二七年二月一八日最終閲覧

(注六) 拙稿「平安中期の歌人と薫物―源公忠、藤原公任を中心に―」、『広島女学院大学大学院言語文化論叢』第一五号、広島女学院大学大学院言語文化研究科、平成二四年

(注七) 『御湯殿上日記』を中心とした当時の記録に見られる匂袋、薫物等の贈答の事例については、本間洋子『中世後期の香文化…香道の黎明』(思文閣出版、平成二六年)に詳しい。

(注八) 奥野高廣『戦国時代の宮廷生活』、続群書類従完成会、平成一六年

(注九) 薫物諸書の識語に見られる轉法輪三条実香による類纂、書写活動、及び実香の生前に自筆を用いて第三者により行われた書写活動の概要、並びにこれらの伝承を掲載する諸書の所蔵情報や解題、テキストの掲載先は次の通りである。

1 文龜三(一五〇三)年九月中旬、公敦子息権大納言正二位転法輪三条実香、後白河入道右府三条公冬新作の薫物「若草」「玉椿」処方載録の「当家累代の秘方」一冊を、「持明院相公」(藤原基春か)の希望により書写。(薫物(黒方秘方)、一冊、宮内庁書陵部所蔵御所本、函号163・865。解題とテキストは拙稿「宮内庁書陵部所蔵『薫物黒方秘方』翻刻」『広島女学院大学日本文学』、第一九号、広島女学院大学文学部日本文語日本文学科、平成二一年)に掲載)

2 永正五(一五〇八)年孟秋(七月)某日、内大臣(実香)、三条家秘本を沼間右京亮敦定の懇望により書写。(黒方巻物二巻の内一巻、陽明文庫所蔵、整理番号95094)

3 同 六(一五〇九)年六月某日、内大臣正二位三条実香、「当家代々秘本」なる薫物記録を書写。(三条家薫物語、続群書類従第一九輯下、遊戯部飲食部)

4 同 年 八月某日、三条実香、「当家累葉之秘本」なる薫物記録の前編を、「□橋重能」の懇望により書写。「新儀口説故実等」も新たに交える。(薫物(黒方秘方)。所蔵情報等は1参照)

5 同 年 一〇月某日、三条実香、「当家累葉之秘本」なる薫物記録の後編を、「□橋重能」の懇望により書写、相伝。(薫物(黒方秘方)、一冊。所蔵情報等は1参照)

6 永正一〇(一五一一)年六月一日、内大臣(実香)、口伝に随い懇望により秘方秘説を筆舌に顕す。(後水尾天皇薫物調合御覚書、一冊、東山御文庫所蔵、函号113・4・1・11)

7 享祿一(一五四二)年孟春(正月)下瀬、三条実香、薫物伝書を書写しいづれかへ贈る。(薫物相承次第、一冊、国立公文書館内閣文庫所蔵、甘露寺家旧蔵、享和元年写、請求記号139-0391)

8 享祿一五(一五四六)年四月某日、「定弘」、三条実香加筆・転写の「当家(三条家)累葉之秘本」の薫物記録を「相伝」。(薫物(黒方秘方)、一冊。所蔵情報等は1参照)

9 弘治二(一五五六)年五月一四日、「一位」(広橋か)、「親王御方」の御懇望により注進された三条実香家薫物方を「ヌスミ写」。(薫物方秘伝書、片玉続集四六所収、宮内庁書陵部所蔵、函号459-1)

また、実香の薨去から一八年後の天正四(一五七六)年初冬(一〇月)下旬には、三条実香の「孫姫」なる人物が、実香自筆の伝書を書写して「惣持院方上」に進上したとされる(寛文十一年俊海処方、一冊、京都鳩居堂熊谷家所蔵)。

(注一〇) 薫物諸書の識語に見られる轉法輪三条公頼による書写活動一件の概要、並びにこれらの伝承を掲載する諸書の所蔵情報は次の通りである。

・享祿二(一五三三)年四月一七日、「権大納言(傍書に「轉法輪三条家」と。」「一吟斎」御懇望の薫物記録一本を書写。

(香之書、一冊、天理大学附属天理図書館吉田文庫所蔵、吉田兼右自筆、請求記号2838(574)。他に上田流和風堂(広島市)所蔵の無題薫物書二点、及び続群書類従所

収「三条家薫物書」(注九の3)にも同文が伝来)

(注一一) 井伊直弼自筆の茶書「茶道下留」(彦根藩井伊家文書、請求記号28075、典籍91)に写し取られた「三条家ヨリ伝来薫物法」によれば、慶長二五(ママ)年一〇月八日、「公広公」こと三条西公国実子で轉法輪三条実綱養子となった公広は、「將軍家康公懇望」により「黒方」以下の薫物方を伝授したとされる。解題及びテキストは『史料 井伊直弼の茶の湯』下(熊倉功夫編、神津朝夫担当箇所、彦根藩資料調査研究委員会、平成一四年)、並びに拙稿「井伊直弼と三條家薫物秘説との関係について」(研究ノート、『藝能史研究』、第一八二号、藝能史研究會、平成二〇年)に掲載しており参照されたい。

(注一二) 薫方之書、一点(料紙六枚に処方を入し、それぞれに折り畳んで、四枚と二枚に分けて包紙に納める)、後西院宸翰、宮内庁図書寮所蔵、函号503・235

(注一三) 藤原公任の人物及び「公任集」についての主要参考文献は次の通り。

1 小町谷照彦『藤原公任』余情美をうたう、王朝の歌人7、集英社、昭和六〇年

2 伊井春樹『公任集』、桜楓社、昭和六三年

3 伊井春樹・津本信博・新藤協三『公任集全釈』、私家集全釈7、風間書房、平成元年

4 後藤祥子「公任集全釈」、新日本古典文学大系28『平安私家集』、岩波書店、平成六年

5 竹鼻績『公任集注釈』、私家集注釈叢刊15、貴重書刊行会、平成一六年

6 竹鼻績「大納言公任集」、『中古歌仙集』、和歌文学大系54、明治書院、平成一六年

(注一四) 『薫物方』の諸本は次の通り。なお、テキストは注一の拙著『薫集類抄の研究』に掲載しており参照されたい。

1 薫物方、一冊、宮内庁書陵部所蔵鷹司本、函号266・118

2 薫物方、一冊、京都大学大学院文学研究科図書館所蔵、請求記号た3-1

(注一五) 香具撰様調様、一冊、専修大学図書館菊亭文庫所蔵、第2函119

(注一六) 薫物之方、一冊、著者未詳、森田長元写本、増田學筆記(「因學筆記」一冊の内に「度量考」及び「紫雪方」とともに収録)、公益財団法人武田科学振興財団杏雨書屋所蔵、請求記号乾2172

(注一七) 京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵「薫物秘藏抄」載録「新枕」方81(翻刻51頁)の同類方は、同文庫所蔵「万方」(注四)にも収録されており、ここでも由緒は「三条」と記される。

(注一八) 薫物方、一冊、天正一七年写、京都大学附属図書館菊亭文庫所蔵、請求記号菊25

(注一九) 以上、『公卿補任』寛永一七(一六四〇)年条から万治二(一六五九)年条、日本古典全書『諸家伝』飛鳥井家、難波家系図、『時慶卿記』慶長一四(一六〇九)年七月二日から八日条等参照。

(注二〇) 拙著「(新作薫物)と平安文学」、研究余滴、『むらさき』、第五一輯、紫式部学会、武蔵野書院、平成二六年

(注二一) 轉法輪三条実量、公敦、実香の和歌文学活動については、井上宗雄『中世歌壇史の研究』室町前期「改訂新版」(風間書房、昭和六一年)及び日本古典籍総合目

録データベース（国文学研究資料館ホームページ）を参照した。

(注二二) 『古筆と絵巻』、古筆学叢林、第四巻、古筆学研究所、八木書店、平成六年
(注二三) 注八の奥野高廣『戦国時代の宮廷生活』（平成一六年）、注一の拙著『薫集類抄の研究』、附・薫物資料集成』（平成二四年）、注七の本間洋子『中世後期の香文化：香道の黎明』（平成二六年）等。

(注二四) 明治一〇年一二月付け鳩居堂店主熊谷直行筆「献家伝薫香表」跋文及び明治一二年九月付け村山松根執筆鳩居堂製薫香由緒書。釈文は注一拙著所収「専修大学図書館菊亭文庫所蔵『薫物故事』」解題に引用しており参照されたい。

(注二五) 『古筆と絵巻』、古筆学叢林第四巻、古筆学研究所編、八木書店、平成六年
(注二六) 山口県立大学日本史研究室「古記録を読む会」作成『実隆公記』現代語訳データベース」参照、<http://kohjizen.ypu.jp/newpage19.html>、平成二七年一月三〇日最終閲覧

(注二七) 安元三年四月二八、二九日条：細谷勘資著「撰閑家の儀式作法と藤原基房」、渡辺直彦編『古代史論叢』、続群書類従完成会、平成六年

(注二八) 後徳大寺実定の閑歴と業績については、主として次の先行研究に学んだ。

1 松野陽一「林下集について」、『研究紀要』、第八号、立正学園女子短期大学、昭和三九年

2 中村文「後徳大寺実定の沈淪」、『立教大学日本文学』、第四六号、昭和五七年

3 松野陽一「歌仙落書考―千載集時代秀歌撰研究続貂」、『講座平安文学論究』、第三巻、風間書院、昭和六一年

4 五味文彦『藤原定家の時代：中世文化の空間』、岩波書店、平成三年

5 松野陽一『玉箒 千載集時代和歌の研究』、風間書院、平成七年（1に補筆して再録）

6 黒田彰子「林下集贈答歌群をめぐって」、『愛知文教大学比較文化研究』、第三号、愛知文教大学、平成一三年、CINii Article 掲載、
http://ci.nii.ac.jp/els/110000037567.pdf?id=ART0000367411&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1423704196&cp=、平成二七年二月一二日最終閲覧

(注二九) 藤河家利昭「八条の式部卿について」、『広島女学院大学国語国文学誌』、第二七号、平成九年。広島県大学共同リポジトリ (HARP) 掲載、
<http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/hjui/metadata/4412>、平成二七年二月一六日最終閲覧

(注三〇) 国文学研究資料館ホームページ、所蔵和古書・マイクロ/デジタルデータベース掲載画像参照。

(注三一) 「弘治元年後十月十日御曼殊院宮等何人百韻」及び「弘治三年三月二十五日御中山等何路百韻」。国文学研究資料館ホームページ、日本古典籍総合目録データベース調々。

(注三二) 井上宗雄『中世歌壇史の研究：室町前期』、風間書房、昭和三六年初版、昭和五九年改訂新版。米原正義『戦国武士と文芸の研究』、桜楓社、昭和五一年。

(注三三) 周防下向前後の三條公敦の文藝活動について論じた学術論文またはそれら

を載録する学術図書の内、主に参考とした文献は次の通りである。

1 野村八良『国文学研究史』、萩原星文館、大正一五年初版

2 池田亀鑑「日本文学研究に於ける大内氏」、『文学』、昭和九年初版

3 西下経一「龍翔院と大内政弘」、『国語と国文学』、昭和九年

4 伊地知鐵男『宗祇』、青梧堂、昭和一八年

5 金子金治郎「兼載の初度山口下向一付、翻刻「兼載句艸」―」、『中世文芸』、昭和二九年

6 同「兼載伝考（三）―新撰菟玖波集と兼載―」、『中世文芸』、昭和二九年

7 同『連歌師兼載伝考』、国語国文学研究叢書九、南雲堂桜楓社、昭和三七年初版

8 米原正義「中世武士と連歌師―大内氏を中心とした一考察―」、『国学院雑誌』、昭和三二年

9 同「中世における地方武士と下向公家の文化交渉」、『国学院雑誌』、昭和三六年

10 同、「大内氏の文芸」、『国学院雑誌』、昭和三七年

11 同、「戦国武士と文芸の研究」（注三一）

12 井上宗雄『中世歌壇史の研究：室町前期』（注三二）

13 福井毅「公武連歌壇の人々の動静と世相―文明十年代連歌史の背景―」、『皇学館大学紀要』、創立百十周年再興三十年記念号、平成五年

(注三四) 伊藤敬『室町時代和歌史論』、新典社研究叢書第一七五、新典社、平成一七年

(注三五) 香譜、一冊、写本、静嘉堂文庫所蔵、請求記号 80-56-14327

(注三六) 黒方巻物、二巻の内一巻、陽明文庫所蔵、請求記号 95094

(注三七) 芳賀幸四郎『東山文化の研究』（河出書房、昭和二〇年）、井上宗雄『中世歌壇史の研究：室町前期』（注三二）

投稿論文執筆要領

- ◇ 「薫物書の研究」への投稿資格は会則に記載した通りです。
- ◇ 投稿は未発表のものに限ります。
- ◇ 投稿論文は三部提出してください。
- ◇ 投稿論文の文字数や図表、写真の枚数に制限はありませんが、A4用紙に縦組二八字、二五行の二段組にて紙面を作成してください。
- ◇ 図版、写真、翻刻等の掲載申請は投稿者が行ってください。
- ◇ 投稿論文の要旨を四〇〇字程度にまとめて三部提出してください。
- ◇ 本文、要旨とは別に、住所、氏名、所属（職名）ならびに投稿資格に係る研究業績一覧を記入した用紙を三部提出してください。
- ◇ パソコンを使用した場合は、文書ファイルをUSBメモリ等一点に保存して提出してください。
- ◇ 投稿論文一式（USBメモリ等も含む）は事務局宛に必ず簡易書留にて郵送してください。一式の返却はいたしません。
- ◇ 採用された投稿論文の執筆者校正は、三校までとします。
- ◇ 投稿論文の執筆者には、発行時に電子データ公開先のURLを通知します。

編集後記

「薫物書の研究」第二号をお届けします。平成二六年四月に薫物書研究会が発足いたしましたから、ちょうど一年が経過しました。お蔭様で香と薫物の学術研究をなさる方々にご入会いただき、また、その道の有識者の方からも、継続してお読み下さる旨のご連絡を賜るなど、少しずつ会員と読者が増えつつあり、誠にありがたく存じております。第二号の執筆は、前号に引き続き田中が行いました。貴重な資料の翻刻をお許しいただいた所蔵館の方々や、学会、研究会で御教示下さった諸先達、また、査読や英文題目の校閲をお引き受け下さった先生方より賜りました御学恩に報いたい一心で努力して参りましたが、今回も多くの課題を残してしまい、深く反省致しております。

さて、本年二月四日付けで発行されました翠川文子氏の御新著『香道文献目録―所蔵館別―』（香書双書…資料1、香書に親しむ会発行）において、氏が長年に渡り調査していらした膨大かつ重要な香関係資料の所蔵情報と概要が公表されました。香関係資料の調査研究を飛躍的に進展させる、素晴らしい内容と拝察します。まだ御覧になっておられない方は、ご所属先やお近くの図書館等からお取り寄せになるなどして、ぜひご利用ください。

弊誌の存在は、右の大著に比べて実に微々たるものではございますが、この分野の発展にいささかなりとも供したく、引き続き努力して参ります。何卒ご一読、御教示の程賜りますようお願い申し上げます。

（田中）

二〇一五年四月一四日発行 無料公開

薫物書の研究 第二号

編集兼発行者 薫物書研究会 代表 田中圭子
発行所 薫物書研究会事務局

〒七三九・〇六一一

広島県大竹市新町一丁目八・一八・二〇四

e-mail: misimal7@hotmail.com